

人物を中心とした

文化郷土史

—鳥取県—

徳永 職男



因幡鳥取藩

因幡鳥取藩は、因幡・伯耆の二か国から成っていた。その領域そのままを管下に、現在の鳥取県がある。

鳥取藩は、明治二年の版籍奉還当時についてみると、表高三千二百五十石で、二七七藩中、第二位を占める大藩であった。表高というのは、諸藩の正式の（表面上の）收穫高で、実際の收穫高は、各藩とも、新田の開墾などによって表高より多く、これは、実高と呼ばれる。鳥取藩の実高は、明治初年の記録によると、約四一万石で、表高の一・二六倍であった。この比率は、一般的に見て決して高いものではなく、表高二四万二千石で、順位第十九位の土佐藩などは、すでに寛政年間（一七八九—一八〇〇）に、実高四五万石（一・八六倍）に達している。

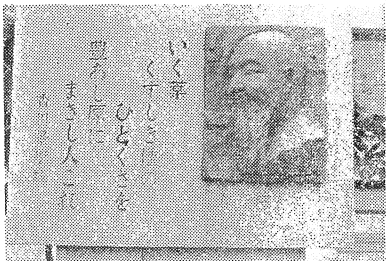
江戸時代の大名は、表高によって格式づけられ、表高に従って、幕府の各種の課役や御用金を負担したので、実高があまり多くない上、他に収入の道も乏しかった「大藩」鳥取藩の財政は、決してらくではなかった。したがって、藩士の家禄も、石高の十分の二、時には十分の一だけ支給されることも珍しいことではなかった。このように、因幡鳥取藩は、天下の大藩とされながら、経済的に見て、藩も家中も決して豊かではなかったのである。

経済力と文化発展は、必ずしも一致するものではないが、両者が密接な関係をもつことはいうまでもない。したがって、江戸時代の鳥取藩の文化に、多くを期待することはできないと思われるが、実際は、困難な諸条件に制約されながら、注目すべき人材が少なくない。

ついで、学んだ人々のうち、俊秀は、気多郡（今気高郡）加知神社の祠官飯田秀雄（寛政三—安政六）で、藩の国学・歌道の振興は、彼によるものと言えよう。その子に、後に述べる飯田年平（文政三—明治八）がある。

江戸時代には、全国各地で地誌の編さんがさかに行なわれたが、鳥取藩では、藩の侍医小泉友賢（元和八—元禄四）による「稻場民談」（「因幡民談記」ともいう）と、安陪惟親（享保九—文化五）の「因幡志」とが双へきである。また注目すべき人物に、藩の大目付を勤めた岡島正義（天明四—安政五）がある。彼の数多い著述の中で、「因府年表」は、学問的にも高く評価されている。これは、寛永七年（一六三〇）から、天保十二年（一八四一）までの史実を、藩史を中心に記録したもので、年表とは題しているけれども、記述内容は精密で、史料に忠実な点に特色がある。

美術の部門についてみると、日本画に、藩の絵師土方稻嶺（寛保一—文化四）があった。彼は沈南蘋の画風を好み、その門人宋紫石に師事したが、その写実の妙は、円山応挙を畏怖させたという。明治初年には、彼の作品で海外に流出したものがあり、明治十年に、元老院議官の海江田信義がドイツでスタイン博士に会ったとき、スタインは、一室に掛けてあった双鯉の掛軸を指して次のように言ったという。それは貴国の画工広邦（稻嶺）の描きし者なり。其発刺として身を翻したる首尾の氣勢、唼（くは）（口を水上に現わす）して口を張りたる面頰の形状より、鱗・鱗・濃淡の墨色等、写真・油絵より一層精神ありて、真に迫るを覚えたり……永久保存を図るべき者にて、美術に於て要するものなり。」（宮内庁蔵「須多因講義筆記」）



稲村三伯の胸像（歌は香川景樹）

て、フランス人フランソワ・ハルマ（F. Halma）の蘭仏辞書を翻訳して「波留麻和解」を完成した。これは、わが国最初の外国語辞書で、蘭学の発展に寄与するところが大きかった。

賀茂真淵の歌論を批判して、「歌はことわるものにあらず、しらぶるものなり」といい、和歌を柿本人麻呂・紀貫之の時代の在り方に復活させようと、「桂園派」を創始した香川景樹（明和五—天保四）は、鳥取藩士荒井小三次の次子で、二六歳の春京都に上り、小沢蘆庵らについて指導を受け、後に歌道家香川景樹の養子となった人である。景樹の号をとって名づけられた桂園派は、京都を中心に、やがて全国を風びし、明治の短歌革新期にまで及んだ。

鳥取藩の国学興隆は、本居宣長の同族であり、その門人でもあった伊勢の人衣川長秋によるものであるが、鳥取に迎えられた長秋に

このように、江戸時代の鳥取藩文化には見るべきものがあったが、それが、貧困の中に生まれた場合も多かったことは、注目されなければならない。香川景樹は、京都で学んだとき、按摩や青侍となつてその生活を支えていた。安倍恭庵は、「因幡誌成る此には、家宅雨漏を見るも、復た修繕の資なきに」至った（鳥取藩史）と伝えられる。

近代文化の発達

明治四年の廃藩置県によっておかれた三府三〇二県の中の鳥取県は、旧藩そのまま、因幡両国を管轄し、同年末これに隠岐が加えられた。この最初の鳥取県は、明治九年の府県統合で島根県に吸収されたが、十四年になって、因幡二国からなる当初の鳥取県が再置されて現在に至っている。

鳥取県の再置に先立って、山陰を巡視した参議山県有朋は、その復命書に、「山陰一道ノ若キハ、之ヲ東海・東山・山陽等ノ諸道ニ比スレバ、人文ノ開進ヨリ一等ヲ降り、加フルニ道路險惡、交通不便ヲ極ムルヲ以テ、制産貨殖ノ道亦極メテ難シ」と述べ、再置運動の中心となった旧鳥取藩士族については、「山陰ノ一隅ニ僻在シ、三百年來大藩ノ余風ヲ固守」（公文録）していると評している。

山陰一道が交通不便で、「人文の開進」がおくれていることは、一概に否定はできないけれども、「大藩ノ余風固守」については、ただ頑迷とだけ受け取るのは酷で、新時代に対処して、藩政時代に劣らぬ政治・文化を樹立しようとする県民意識もあった。

鳥取県の文化発展の先覚者の中で、注目すべき人物が二人ある。

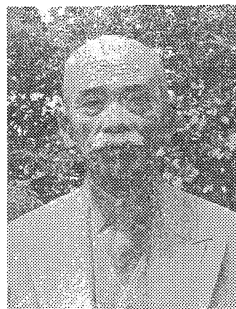
から優秀な人物を入学させたとき、鳥取藩貢進生に選ばれた。この時の貢進生に岸本辰雄（嘉永五―明治四五）もいたが、彼はのちに法律を専攻し、明治十四年には明治法律学校を創設してその校長となり、改組して明治大学となったときに、その初代学長となっている。

村岡は、明治二十四年に、物理学の学位論を書き、論文による理学博士の第一号となったが、その活躍は広般で、明治八年のドイツ留学は「師範学科調査」であり、職歴も東京帝国大学・第一高等学校・女子高等師範学校・京都帝国大学教授等多方面で、著書も「放射線の話」・「平民学校論略」・「実験音響学及音楽理論」など多彩であった。その村岡が、東京音楽学校校長のとき、明治二十五年に帰省したことが、鳥取県の音楽界に大きい影響を与えたことは後に述べる。

明治二十五年に東京高等師範学校付属音楽学校に入学した林重浩（明治四一―昭和一九）は、村岡範為の影を受けたといわれる一人であるが、彼は音楽家として名を成したのではない。しかし音楽学校に籍をおきながら、東京物理学校の夜間部に通って数学を専攻したことを見ると、村岡の影響は林において一番顕著であったといえるかも知れない。林の活躍舞台は、郷土の教育界であった。明治二十八年に両校を卒業した林は、八年余他府県で教員生活をし、三十六年には帰京して、県立第二中学校（今の米子東高等学校）教諭となり、三十九年にはその校長となった。その後、四十四年には県立鳥取中学校（今の鳥取西高等学校）、大正十一年には県立鳥取第二中学校（今の鳥取東高等学校）の校長を勤め校長生活二十七年の後、昭和八年に退職し、以来約十年余を県内にあって学校教育・社会教育

遠藤董（嘉永六―昭和二〇）と村岡範為（嘉永六―昭和四九）がそれである。

遠藤董は、鳥取城下材木町に、藩士重嘉の長子として生まれ、九歳から一六歳まで、藩校尚徳館で和漢学・フランス語・習字などを学び、この間、狩野派の藩絵師根本幽峨（文政七―慶応二）に就いて日本画をよくした。明治十年には五四歳で上京し、日本洋画の大先輩といわれる高橋由一の門に入り、洋画を消化した。彼の活躍は鳥取に帰ってから開始された。彼は郷土洋画壇の先駆として、又、文化施設の創設に大きい貢献をしている。早く女子教育の重要性に注目し、明治二十一年には呂美・法美・岩井・八上・八東・智頭の六郡（後、因幡）高等小學校に女子部を開校させ、これは後に鳥取市立高等女学校（後の市立因幡高等女学校）へと発展した。また、現在の鳥取県立鳥取図書館は、遠藤が因幡高等小學校長に在任中の明治二十三年、同校内に設けた久松文庫がその濫觴で、これが私立・市立鳥取図書館と変わり、さらに昭和四年、県立に移管されたものである。



遠藤 董（肖像）

村岡範為は、藩士村岡秀造の子で、父は蘭学者であった。範為は幼にして父の薫陶を受け、さらに藩校尚徳館に学んだが、明治三年七月、政府が大学南校（もとの開成学校。洋学）に、各藩

に尽瘁した。鳥取第二中学校は、七年制高等学校への昇格を企図して開校されたものであったがこれは実現に至らなかった。

このような先覚者が、人口五六万八千（昭和四十五年国勢調査）という、全国で最小県である鳥取県に、予想以上の近代文化の花を咲かせたのである。

学芸の分野

江戸時代の国学については上に述べたが、飯田秀雄の二男飯田年平（文政三―明治一九）は、父と同じく本居大平に師事し、国学・和歌に名を成し、同門の加納諸平・石川依平と共に「三平」の名で推称された。明治四年の大嘗会に、西方の祭場（主基田、安房国長狭郡蓬ヶ島）を詠んだ「名くはしき蓬が島は君が代の長狭県の神やつくし」の一首は、年平の詠進歌である。

日野郡溝口町出身で東大教授であった池田亀鑑（明治二九―昭和三一）は、国文学に文献学的研究を開拓した点で注目すべき業績を残し、「校異源氏物語」、「古典の批判的処置に関する研究」は不朽の名著として、その数多い著述の中でも高く評価されている。一方訓点語学・国語教育で知られるもと京大教授遠藤嘉基（明治四二―一九二二）は、前記の遠藤董の孫であることは興味深い。

国語教育、中でも児童の綴方教育に貢献した人に西伯郡の人峰地光重（明治二三―昭和四三）があり、早く大正九年には、同郡小學校で児童文集「芽生え」を出し、十一年には「綴方は児童の人生科である」という「文化中心綴方新教授法」を出版した。昭和四年には綴方教育雑誌「綴方生活」を刊行している。

地方史研究の分野では、明治四十二年に始まった旧藩主家池田仲博による藩史の編さん事業があり、その編さん責任者に、湯本文彦・梶川栄吉らがあった。編さん委員の一人であった岩美郡宇倍野村（現国府町）の人柄柴竹造（文久元―昭和五）は、藩史編さんをも含めて、鳥取県の地方史研究の開拓者であった。「岩美郡史」・「八頭郡史考」・「気高郡史考」のほか未刊に終わった「東伯郡史考」・「西伯郡史考」があって、県下各郡の歴史を手がけ、「因伯大年表」の著作もある。

昭和十二年に、当時県立図書館に寄託されていた旧藩時代の膨大な藩政史料の整理のために図書館司書となった萩原直正（明治一九一―昭和六）は、本務のかたわら郷土史を研究したが、彼はその著述を「私の一生を通じて、詐ならず、背かず、暖かく、安らげ、はぐくみ育てて呉れた郷土、その郷土へささげる讃美であり、憧憬であり、陶醉である」と言い、また「郷土愛必ずしも懐古的とは限るまい。竭くすることなき郷土思慕の中に、広い世界に通ずる何者かを見出して、故郷を世界の表に押し上げて行く、これが自分としては一杯の念願である」と述べている。郷土史の中に、民衆の生活を取り入れることも忘れなかった異色の郷土史家で、著書も多く、「因伯の本地屋」・「因伯伝説集」・「因伯地名雑話」・「百姓一揆年代記」等々がある。

「武信和英大辞典」（大正七年刊）によって、わが国英語学界に多大の貢献をした武信由太郎（文久三―昭和五）は、気高郡青谷町の出身である。明治三十年には、頭本元貞（文久二―昭和一八）と共に「The Japan Times」を創刊し、三十八年には早稲田大学教授となり、在

任中「The Japan Year Book」を創刊して日本の海外紹介に努めた。頭本元貞は、日野郡の人で、ジャパニタイムズの支配人であり、青少年層に英語と外国事情を知らせるために、その「学生号」・「少年号」なども発行した。また海外渡航二十数回という国際人でもあり、政界とも関係をもって、伊藤博文・小村寿太郎らの知遇を得た。

思想界には、いわゆる「西哲学」を樹立した西晋一郎（明治六―昭和九四）がある。彼は東京帝国大学で哲学科に学び、後、広島高等師範学校・広島文理科大学に倫理学を講じて、東洋倫理学の重鎮となった。著書に昭和十五年刊行の「東洋道德研究」をはじめ多くの名著があり、碩学であるとともに人格高潔で、子弟の教育にも力を注ぎ、門下に多くの学者が輩出している。

異色の思想家として、八頭郡智頭町の出身である伊福部隆彦（明治二九―昭和三）の存在も忘れられない。彼は、後に述べる生田長江に師事して、文芸評論家として出発したが、詩人としても名を成し、「無為庵詩集」は、ヘルマン・ヘッセの激賞を受けた。後半生に入っては「老子」と「正法眼蔵」の研究に没入し、また「人生道場無為修道会」という結社を創立して没年までこれを主宰した。

いわゆる「福本イズム」の提唱者福本和夫（明治二七―昭和四）は、東伯郡北条町の出身で、「経済学批判に於けるマルクス資本論の範囲を論ず」・「唯物史観の構成過程」等の論文がある。後者は、河上肇の唯物史観の研究方法を攻撃したものである。

著名な公法学者である佐々木惣一（明治一―昭和四〇）は、鳥取市の出身で、憲法・行政法に関する自著三二、編著二、論文四九七篇に

及んでいる。一般にその名が知られたのは、昭和八年の滝川事件のときと、戦後の昭和二十年十月に、内大臣府御用掛として帝国憲法の改正に着手し、翌月「佐々木案」と呼ばれる「帝国憲法改正の必要」を天皇に進講したことであろう。

自然科学の分野には、まず医学に原田謙堂（文久二―明治二六）がある。気高郡青谷町山根の出身で、江戸に出て築作院甫に種痘について学び、明治四年の種痘令に先立って因伯二州に種痘を施行した。彼は種痘の再三接種説を主張し、これが「種痘規則」に取り入れられた。

電気生理学を専攻した橋田邦彦（明治一五―昭和二〇）倉吉市の生まれで、昭和十五年、近衛内閣の文部大臣となり、終戦後戦争犯罪人の指名を受けて自決したことはよく知られている。著述には、生理学関係のほか、禅に関して「正法眼蔵釈意」などがある。その門弟に、日野郡日野町出身で「日本医師会雑誌」編集委員長の杉靖三郎（明治三九―九〇）がある。

このほか、癌研究に東伯郡羽合町出身の中原和郎（明治二九―昭和二九）母学に日野郡溝口町出身の橋谷義孝（明治三八―九八）らもある。

美術の世界

遠藤董が、郷土洋画壇の鼻祖であることは前に記した。その作品として、「鳥取城」二号・「清水彦五郎像」一五号の二点が鳥取図書館所蔵となっている。しかし、かれ以後に名をなした画家に、遠藤がどのようなつながりを持ったかは明らかでない。

香田勝太（明治一八―昭和七）は、日野郡溝口町の生まれで、明治四

十三年に東京美術学校洋画科を卒業し、その翌年文展に入選し、以後帝展にも出品を続けた。一方油彩による和風の装飾画を試み、赤坂離宮、帝国劇場などにその作品を残した。

東伯郡北条町の人、前田寛治（明治二九―昭和五）は、倉吉中学に学んだが、この学校の教師に東京美術学校出身の中井金三（明治一六―昭和四四）があり、前田が東京美術学校の洋画科に進んだのも中井の影響が大きい。前田は、在校中、帰省のたび中井の指導を受けたといわれるし、大正九年には、中井を中心に倉吉につくられた芸術団体である「砂丘社」の創立に参加している。この年、前田の作品が二科展・帝展に入選し、これに力を得た彼はフランスへの留学を決意し、同年末渡欧しているが、これを援助したのも中井であった。

大正十四年に帰国した前田が、第六回帝展に出品した、滞仏中の作品「J・C嬢」は特選となり、第八回帝展でも特選、第九回帝展の「裸婦」は推選になった。昭和四年に、彼は不起の病氣にかかったが、病をおして大作「海」を制作し、第一〇回帝展で帝国美術院賞を受け、帝展審査員にも推されたが、翌年四月若くして死去した。



前田 寛治

京に前田寛治写真実研究所を創設して新写真主義を提唱するとともに、郷里の「砂丘社」とも提携し、地方画壇の振興に寄与するところも大きかった。西部の香田、中部の前

田に続いて、東部に伊谷賢蔵（明治三五—昭和四五）が現われた。彼は鳥取市の出身で、大正十二年、京都高等工芸学校卒業後、関西美術院で黒田重太郎に師事した。大正十五年には二科展に入選して以来、二科会を中心に活躍し、関西の二科系作家による白亜会を組織した。また終戦後、同志とともに行動美術協会を創設している。戦時中はしばしば華北に渡り、大同石仏や、中国の庶民生活を描いているが、そうしたことから、晩年には東洋的油彩ともいべき画壇を拓いて、関西画壇の重鎮となった。

現在活躍中の洋画家も多く、米子市出身の笹鹿彪（明治三四—一九〇一）は日展評議員、光風会評議員・審査員として活躍している。もと鳥取大学教授であった浜田宣伴（明治三三—一九〇三）は独立会友で、入選三十数回に及んでいる。鳥取市出身で鳥取市在住の尾崎悌之助（明治四三—一九〇一）は、伊谷賢蔵の徒弟で、画風もその影響を受け、行動美術協会会員として個展開催も数十回に及び、行動美術派の俊英とされている。

洋画界の盛況に比べて、日本画はやや不振といえる。その中であって異彩を放っているのは、大阪市の名蒼市民となつた菅橋彦（明治二一—昭和三九）であろう。彼は鳥取市に生まれ、幼時を倉吉市に過ごしたが、五歳のとき大阪に移り、終生をここに暮らした。絵は独学といわれるが、父盛南も画家であったと伝えるから、その影響は当然考えられる。画風は古土佐、大和絵の格調の高いもので、昭和二十四年以來、日展に招待出品を続け、三十三年には芸術院恩賜賞を受けている。

彫刻家として知られる人に、仏像彫刻の國米泰石（明治二一—昭和五七）がある。彼は八頭郡智頭町の出身で、明治三十六年、日本美術院

に入り、三十八年には国宝修理技師となった。彼が関係したのは、奈良の法隆寺・興福寺・東大寺を始め、近畿・中四国・九州の各地寺院の仏像修理で、また東京湯島の靈雲寺・大阪四天王寺をはじめ各地に仏像・肖像彫刻の作品も多い。

大正・昭和期に入つて、本県でも「彫塑」界は大いに活気を帯びてきた。

鳥取市出身の長谷川塊記（明治三一—一九〇八）は、朝倉文夫について学び、日本彫塑会会員、日展審査員で、その作品で郷土に飾られているものも多い。

倉吉市出身の早川巍一郎（明治三八—一九〇五）は、新制作会員、多摩美術大学教授で、代表作に「女の顔」がある。

日野郡出身の辻晋堂（明治四三—一九〇一）は京都市立美術大学教授で、二紀会員・院展同人であり、代表作「詩人」がある。

数少ない建築家に、東伯郡北条町出身の岸田日出刀（明治三二—一九〇九）がある。前東京大学工学部建築科教授で、東大安田講堂、同図書館、ニューヨーク万国博日本館等を設計し、倉吉市庁舎は、彼の郷土に残した代表作である。

工芸界には、明治から大正初年にかけて活躍した刀士宮本包則（天保一—大正五）がある。かれは東伯郡三朝大柿の人で、二二歳のときから備前の祐包についてその技を学び、明治年間には再度の神宮式年祭に御宝刀を鍛えた。また明治・大正・今上三天皇をはじめ、宮家の守刀も奉納している。明治三十九年には、帝室技芸員に任ぜられている。

鳥取県の工芸を語る時、忘れてならない人物が吉田璋也（明治三一—一九〇九）

「昭和四七」である。かれの本業は医学博士の耳鼻咽喉科医であるが、

ある意味では民芸運動がその本業であったといえるのかも知れない。日本の民芸運動は、民芸という言葉とともに柳宗悦によって始められ、その第一歩は昭和元年の「日本民芸美術館設立趣意書」の発表と「工芸の道」の刊行であったといわれるが、吉田璋也が柳宗悦に師事したのは、これより数年前の大正九年であったと彼が語っている。

地方の民芸品の復興運動・新作運動が生まれるのは、昭和六年以降であるが、この年たまたま大阪から帰郷して医務を開設した吉田は、鳥取県の民芸運動の開拓者となった。彼の帰郷早々、鳥取民芸協団がつくられて新作運動が展開され、昭和二十四年には日本初の東洋の民芸品を陳列する鳥取民芸美術館もつくられて、鳥取県の民芸の名を全国的に高らしめている。

文 芸

文芸・社会・宗教の各分野で活躍した特異な人物に生田長江（明治一五—大正二二）がある。日野郡日野町の人で、東京帝国大学哲学科に美学を学んだ。在学中、上田敏・馬場孤蝶らが創刊した雑誌「芸苑」の同人となり、卒業の年、明治三十九年には、評論「小栗風葉論」を同誌に掲載して注目された。四十年には与謝野晶子を中心に関秀文学会を作り、大正三年には、森田草平と雑誌「反響」を創刊した。その立場は、新理想主義から社会主義に移ったが、晩年には宗教的人間観を深めていった。著書には、評論「最近の文芸及び思ひ」、小説「哀史」、戯曲「日光」、翻訳「ニイチエ全集」などあり、未完の

遺稿「釈尊伝」がある。

詩人には、まず横瀬夜雨と並んで「文庫派」詩人の代表とされている伊良子清白（明治〇一—昭和四六）がある。八頭郡河原町曳田の出身で、本職は医師であったが、その詩風は明治のロマン主義文学の一面を代表するもので、取材の視野は甚だ広い。詩集としては、精選した詩一八編を収めた「孔雀船」一巻（明治三九）がある。

純真な魂の苦悩を歌った感傷的な詩風で世に迎えられた詩人生田春月（明治二五—昭和五五）は、米子市道笑町の出身で、家が貧しく、一家とともに朝鮮に渡り、のち一六歳のとき帰郷したが、明治四十一年、一七歳のとき上京して、生田長江のもとに寄寮してその厚意を受け、文学と語学とを独学した。詩集に、「靈魂の秋」・「感傷の春」・小説に長編の「相寄る魂」があり、ハイン・ゲーテ・ドストエフスキーなどの翻訳も多い。昭和五年五月、瀬戸内海で投身自殺をとげた。

俳人坂本四方太（明治六—大正六）は岩美郡岩美町大谷の人で、東京帝国大学国文科を卒業した。二高時代に仙台で高浜虚子に親しみ、上京後は虚子の紹介で正岡子規の指導を受けた。明治三十一年九月「ホトギス」が東京で発行されるようになった時、編集同人に、子規をはじめとして、内藤鳴雪・高浜虚子・河東碧梧桐・四方太らであった。作品は物語的内容「蕎麦くふて下谷を帰る夜寒かな」「あはれる女もありし絵踏かな」といった傾向をもっている。のちに、子規が創めた写生文に力を注いで、「写生文集」「夢の如し」などの著作がある。郷土の俳壇にも尽くすところが多く、鳥取の「卯の花会」は同好者の集まりで、会の名は四方太が命名している。

自由律の俳人尾崎放哉（明治一八—大正一五）は、鳥取市立川町二丁目

の出身で、東京帝國大学法学部を卒業して約一〇年間、保険会社に勤めたが、酒の失敗で大正十二年に退社した。そこで、自ら無一物となって、京都鹿ヶ谷の一燈園に投じ、下座奉仕の生活に入ったが、長く続かず、京都知恩院常照院・兵庫須磨寺・福井常高寺等の寺男として転々とし、大正十四年になって、小豆島の札所南郷庵によく安住の地を見出した。ここで孤独な句作生活が始まるが、やがて病のためこの世を去った。かれは大正五年ごろから萩原井泉水らの「屬雲」に投句しているが秀作は晩年に多く、短期間に近代俳句史上に不滅の作品を残した。句集に「大空」がある。「咳をしても一人」、これは病中の作である。鳥取市にあるその句碑には、「春の山のうしろから煙が出だした」の一句が刻まれている。

鳥取「卯の花会」の一員で、前記の坂本四方太の影響を受けた田中寒樓（明治一〇一昭和四五）は、八頭郡河原町小畑の人で、子規の編集発行した新聞「小日本」に投句していた。

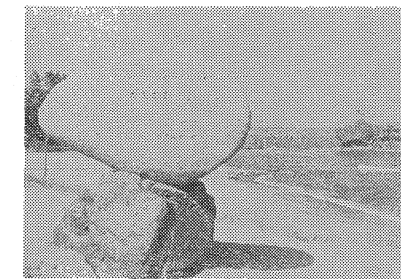
明治三十三年ごろ、四方太が寒樓に送った手紙に、子規が「近頃の『日本』の投書家の内では、寒樓が一等だ」と言ったとある。また、子規は「浪速に（松瀬）青々、因幡に寒樓あり」とも言ったと伝えられる。「草崩のいのちを人にわかつたばや」「五月雨のもるや川屋にゆく所」などの句がある。晩年には、わが在るところを「寒樓道場」と称し、天衣無縫の言行で、野人ぶりを發揮した。

小説家白井喬二（明治三二）は、本名井上義道で、父母ともに鳥取藩士族の出身。父は官吏で、各地に転勤したので、かれは横浜市に生まれたが、父が晩年郷里に帰って郡長・町長などを勤めたので、かれも少年時代を米子市に過ごした。米子市の小学校に在学中に

は、生田春月らと小回覧誌をつくり、また米子で中学校に入学した年には、一三歳で小説を執筆して地方新聞に連載するという早熟ぶりであった。大正末期に始まる大衆文学運動の自他共に許す指導者で、作品多く、中でも「富士に立つ影」は、中里介山の「大菩薩峠」と並ぶ代表的長編時代小説である。

日野郡溝口町出身の大江賢次（明治三八）は、大正末年から「一俵の米」「行け、ブラッル」などの農民小説を書いたが、昭和五年に、バルチザンを描いた「シベリヤ」が「改造」の懸賞創作に入選して有名になった。「絶唱」や、自伝「アゴ伝」などの作品がある。

多彩な音楽界



田村虎蔵碑（白兎海岸）
（大黒様の楽譜）

明治二十五年七月、当時東京音楽学校の校長であった村岡範海が帰郷したが、鳥取の音楽界に大きい刺激となったこと、その影響で林重浩らが音楽学校入学を志したことは前に記した。この年九月に音楽学校に進んだのは、林のほか田村虎蔵（明治六三昭和一八）と永井幸次（明治七一明治四〇）で、林と田村の二人は、いずれも鳥取師範学校の卒業生であった。鳥取師範学校には、上

野出身の小寺雪吉が、明治二十二年以来音楽教師として勤務していたから、村岡の帰郷以前に二人は、多少ともその感化を受けていたかも知れない。岩美郡岩美町馬場出身の田村虎蔵は、音楽学校卒業後、兵庫県師範学校に勤務し、ついで明治三十二年には、東京高等師範学校兼東京音楽学校助教諭に転じた。

明治三十年代は、言文一致運動の確立期で、文学界・教育界ともに言文一致運動が大きく取り上げられ、国定尋常小学読本に口語文教材が多くなり、尋常小学校唱歌の歌詞にも言文一致文が用いられた。音楽教育に言文一致体歌詞の必要を説いたのが田村虎蔵であり、かれはその歌詞に納所弁次郎らと共に進んで作曲した。田村の作曲は、明治・大正期生まれの人々に印象深い「大黒様」「金太郎」「花咲爺」「浦島太郎」など、その数は多い。彼は、明治四十三年、東京音楽学校教授となり、大正十一年には音楽研究のため欧米視察に赴いたが、この視察中に児童の発声法の研究、鑑賞教育の必要性を痛感し、帰国後、教育音楽の元老として多方面に活躍した。

永井幸次は、鳥取市の生まれで、幼少のころから讃美歌に親しみ、一五歳のとき鳥取に来た宣教師（アメリカ人）ローランド夫妻について音楽を学んだ。かれの音楽学校入学は、田村虎蔵に刺激されたものと伝えられる。音楽学校卒業後は静岡県師範学校・鳥取県師範学校教諭となり、鳥取には約六年いて、この地方の音楽の普及に尽した。三一歳のとき、明治三十七年に神戸に、ついで大阪に移り、ここで永井の夢であった音楽の普及と音楽教育の確立が実現することになった。音楽教科書の編さん、市民合唱団の指導がそれであり、大正四年には、大阪音楽学校の創立となった。これが、のちに昭和

二十七年には大阪音楽短期大学となり、三十三年、かれ八四歳のとき、現在の学校法人大阪音楽大学となった。彼こそは、音楽家であると共に、偉大な音楽教育事業家というべきであろう。

岡野貞一（明治一〇一昭和一六）は、鳥取市西町の生まれで、林・田村・永井より四年おくられて音楽学校に入学し、卒業後は研究所生となり、明治三十九年から昭和七年まで、同校の助教授・教授として在任した。堀内敬三氏の談によると、彼は音楽を専門としたが、ピアノやオルガンをよく奏し、またチェロもたしなみ、ことに作曲に秀でていた。楽界に残した業績は、音楽教授と作曲の面においてであり、ことにその作曲した唱歌は、歌いやすく、よく詩情をこらえてその情景を孕し、わが国小中学生は勿論、一般国民の愛唱せるものが多かった。「春が来た」「故郷」「朧月夜」などの作曲がそれである。

結 び

鳥取県は、総面積三、四九一・七〇平方キロメートル人口五六八、七七七人で、面積・人口とも四七都道府県中、下位にあり、人口は最少である。交通の便も冒頭に見た明治初年より大きく前進したとはいえず至便とはいえない。

しかし、このような悪条件の上におかれた鳥取県の近代文化史が意外に輝かしいものであることを注目したいと思う。それを支えるものは、藩政時代以来の伝統であり、風土の生んだ内省的なまた不撓不屈といえる一面をもつ県民性に由来するものといえよう。

（鳥取大学教育学部教授）

（参考）新日本人物大観鳥取県・鳥取県百傑伝・鳥取県郷土史

人物を中心とした

文化郷土史

—島根県—

枝野 茂



*

*

今から千二百余年前、若い国守として、はるばる奈良の都から意宇郡（今の八束郡）の国府に來任した門部王（かどべのおおきみ）は「奈良の都を思ふて」と題して

おうのうみ 河原の千鳥 汝が鳴けば
わが佐保川の おもほゆらくに

と詠じた。万葉の歌人の故郷を思ふ感懷は、今なお現代の人の心をもうつものがある。

同じく万葉の歌人として私達が忘れることが出来ない人に柿本人麻呂（かきのものひとまさろ・大化年間頃）がある。その本領とする相關歌に、彼の純真な生命の息吹きをじかに感じとることができるといえよう。

官位は低かったが、歌聖としてたっとばれているこの人物は島根の文化のあけぼのを告げる人物であった。

もっとも、飛鳥時代にはすでに島根の最も古い寺である鰐淵寺（うづみみづら）と清水寺は創建されているし、考古学的遺跡は他の県と同じように、縄文式文化時代はおろか、石器時代にもさかのぼることができ、やはり、この頃から文化の光がさしこんできたというべきであらう。

このように歴史のふるい島根県である。そこで、多分に羅列的なさらにはあるが、明治以後の芸術・文化の担い手であった人々を、故人を對象にしばって、ふりかえってみることにしたい。

長火鉢 苦吟の鼻を あぶりけり （羽風作）

子規の指導をうけたが、子規歿後俳壇が碧梧桐の手に帰し、新傾向の俳句が盛んだった頃に、碧門の四天王の一人として、独特の風格をもち、天下の俳人として仰がれたのが広江八重桜（ひろえやゑざくら・明治一二—昭和二〇）である。また、ホトトギスに投稿をつづけ、天下に俳名を知られた人に原石鼎（はらせきてい・明治一九—昭和二六）があった。彼はホトトギスの編集にあたり、或は東京日々新聞に入ったこともあったが、大正十年には独立して中央俳壇に活躍し、「鹿火屋」を創刊、千数百の門下をかかえて、俳壇の雄となった。

一枝の 椿を見んと ふるさに （石鼎作）

感受性のつよい俳句である。

春の山 草履をはいて 上りけり

これは虚子の俳壇復帰以来、終始一貫ホトトギスの陣營を守って奮闘し、出雲俳壇の元老として仰がれた山本村家（やまもとそんか・明治一六—昭和一九）の句である。大正年代に入ってから、後進に大きな刺激を与えた俳人に原本神桜（はらもとしんおう・明治二〇—昭和一六）がある。

鯉はうつしぬ 残るにほひに 行水す （神桜作）

その句作に熱心なことは驚くばかりで、殆んど全生活を句作に傾注したといつてよいであらう。また出雲地方に対して石見地方の俳壇とくに浜田俳壇の全盛時代をつくったのが山崎紅山（やまさきこうさん・明治九—昭和一八）である。

切りつくす 谷の雑木や 水温む （紅山作）

*

帰り来て 又あふほども 行くかたも

思へは遠し 越路の雪

と詠んで歌人に千家尊福（せんげたかとみ・弘化三—大正七）がある。彼は政治家としても名をなしたが、著書に「越の雪ふり」とか「筑紫の道ゆきふり」あるいは「まちし出でまし」などがあるように、国学和歌をよくした。

俳人として最初にあげなければならない人物に大谷繞石（おおたにぎょうせき・明治三—昭和八）がある。彼は松江中学在学中、小泉八雲に愛され、東大英文科を卒業し、教壇につとめた。二高在学中に俳句を志し、上京後は正岡子規の門に入り、日本派の新進として早くから名を成しており、島根とくに出雲地方における日本派俳壇が興隆したのも彼の誘導によるものが多く、繞石の名は永遠に歿することはできないであらう。

脚氣やゝ 怠る湯治 春暮るる

大谷繞石の一句である。

この繞石とともに島根出身の作家として天下に聞えた俳人に数藤五城（すとうごじょう・明治四—大正四）がある。

柿落葉 梢佗びつゝ 掃きにけり （五城作）

おなじく地方俳壇の興隆につとめた功績の大きかった俳人に奈倉梧月（なぐらごげつ・明治九—？）があった。

助炭おく 音に鳥立つ 池館かな （梧月作）

この梧月を終始一貫たすけて地方俳壇の開拓に尽したのが祝羽風（ほうりはふう・昭和七歿）である。

その作風は温雅軽妙、用語の練達、着想の新鮮、などによって動かしぬ地位と作品をかず多く残している。

また、漢詩の面では、山陰詩界を一九とすることに成功した横山耐雪（よこやまたいせつ・明治元——大正一二）の名があげられるべきであろう。

文壇の泰斗として仰がれ、また軍医総監として学界に重きをなした文学博士、医学博士森欧外・森林太郎（もりりんたろう・万延元——大正一一）がある。森林太郎が美術学校教官時代、坪内博士らと論戦をたたかわしたのは森林太郎の面目躍如たるものがあつた。彼はのちに帝室博物館長（今の東京国立博物館の前身）帝室美術院長（今の日本芸術院長）となるなど幅広い活躍をしたことはあまりにも有名である。ドイツ文学、ロシア文学、仏文学、英文学などに精通し、著書も多く、近代日本文学史に不滅の光をはなつた人物である。

＊



鳥村抱月

はじめ浜田の病院の医生となり、間もなく裁判所の雇に変わって、その才能を島村判事（浜田裁判所判事）に属望され、島村家に養子となつたのが島村抱月（しまむらほうげつ・明治四——大正七）である。彼が著名論文を発表したのは明治三十九年再興の早稲田文学主幹と



田畑修一郎

詩を発表し、その詩は直截な表現の中に現実味と高雅な詩境をしめした。益田市出身の作家に田畑修一郎（たばたしゅういちろう・明治三六——昭和一八）がある。彼は年上の女学校教師と周囲の反対を押

し切つて結婚し、やがて上京し死に至るまで十四年間本格的な作家生活を送つた。彼は多作のできない作家であり、その上文学活動の期間が比較的短かつたので作品の量は少ない。彼は石見が生んだ多感な作家であり、多くの夢を抱きながらわずか四十一歳で短い生涯の幕を閉じたのであつた。

同じく石見が生んだ多感な文学青年に枝野和夫（えだのかづお・大正一一——昭和二四）があつた。彼は単なる文学青年の域にとどまらず、島根のほこる作家になるであろうと周囲から大いに期待されていたのであつたが、象徴主義的なわずかの詩を発表しただけで、夭折したのは惜しまれた。

朝日新聞の「天声人語」は天下の絶品と評され、ために新聞の紙価を高らしめたが、その名筆をふるつたのが永井駒斎（ながいひょうさい・明治一五——昭和二〇）であつた。彼は昭和二十年八月六日の空襲にあつて直撃弾をうけて即死したが、県下には「天声人語」の切り抜きを保存し、あるいは得意の俳画を珍藏して、故人をしのぶ人が多い。

なつて因われたる文芸他二篇の論文であつた。以後彼は西欧文芸、新演劇の方面に一見識を持つに至り、同四十二年「文芸協会演劇部」を創立したが、大正二年には自己の革新的立場から同協会を脱退して、芸術座を起し、それ以後は芸術座の事業に没頭し、心身を打込んで新劇運動の旗をあげ一かどの成功をおさめたが、五十歳にもならず惜しくも病歿した。いま浜田市には「島村抱月顕彰碑」が栗島公園（あわしまこうえん）に建てられてあつて、若い高校生がそこに見られる。この島村抱月と共に、明治四十四年文芸協会がそこに見られる。この島村抱月と共に、明治四十四年文芸協会がそこに見られる。この島村抱月と共に、明治四十四年文芸協会がそこに見られる。

演出にあつたのが中村吉蔵（なかむらきちざう・明治一〇——昭和一六）である。島村抱月は浜田市の奥の金城村の出身であつたが、彼は島根県の小京都とよばれる津和野町出身である。大正三年文芸協会が解散し、芸術座が成立すると、抱月に招かれて、同座舞台監督となり、飯、帽子とピン、真人間その他の社会劇を執筆上演した。大正七年抱月歿後は専ら劇作にふけり、井伊大老の死、大塩平八郎、銭屋五兵衛父子等多くのものを発表し、且つ上演している。彼は島村抱月が開拓した新劇運動の実践に成功したともいえるし、又欧州演劇に関する研究及び作劇術、また舞台劇場に関する理論と実際両方面における造詣がふかく、近代演劇史など多くの著作がある。同じく、劇作家、劇評家として名声をほしいままにしたのが伊原青膏園（いばらせいせいえん・明治三——昭和一六）である。彼は健筆をふるい、その著述に日本演劇史、近世日本演劇史、明治演劇史などがある。

父を千家尊福にもつ詩人に千家元庵（せんげもとまる・明治二一——昭和二三）がある。彼は「白樺」の同人となり、人道主義的な

＊

西周（にしあまね・文政一二——明治三〇）は日本人として正式に西洋近代の人文諸科学を学んだ最初の人であつた。また「哲学」という言葉自体彼の造語にかかるものである。

松江市出身の桑原羊次郎（くわばらようじろう・明治九——昭和三〇）は美術研究家で、殊に浮世絵と彫金の研究については新界の權威として重きをなし、また郷土に関する著作をはじめとして著作が多い。

児童文学史上に大きな足跡を残した天野雉彦（あまのきじひこ・明治二二——昭和一九）も忘れることの出来ない人物である。巖谷小波、久留米武彦らと日本趣味講演会を組織し、口演、童話劇の振興につとめて新分野を開拓し、全国を巡回し、島根県にも数十回来演したが、新しい題材と独自の話術によって、「雉彦さん」と愛称され、県民に親しまれたが、昭和一九年九月の大爆撃のときに無残な焼死をとげた。

原爆の聖者として輝く人が永井隆（ながいたかし・明治四〇——昭和二六）である。彼は飯石郡三刀屋町出身で、昭和二〇年長崎の原爆にあつて妻を失い、自らも被害をうけて、かねてからかかっていた原子病が易進し、遺児二人をつれて病臥した。「長崎の鐘」「ロザリオの鐘」「この子を残して」「いとし子よ」「私は長崎にいた等の著書はすべて病床で綴られ、全日本人を泣かしたのであつた。また、病床にある数年間、毎日欠かさず日記で自己の病状を記録したが、これは原爆症状について貴重な記録となり、後世の専門医にとって大切な文献となつた。いま郷里の三刀屋屋町には永

井隆博士記念館が建てられて、永井博士に関するいろいろな資料が展示されている。

鉄鋼の研究、製鉄技術の指導に不朽の功績をあげたのが俵岡一（たわらくにいち・明治五——昭和二三）である。彼は浜田市出身、長じてドイツより金屬顕微鏡を輸入し、鉄鋼の顕微鏡組織研究を導入し、大正十年には「日本刀の科学的研究」により学士院賞を受け、のち昭和二十一年文化勲章を、さらに二十六年には文化功労者として表彰された。現在、安来市に和鋼記念館があって、そこには彼の研究資料がすべて寄贈されている。

また、現在の島根県立図書館の前身の島根県最初の図書館である「私立松江図書館」を有志とはかって松江市に開館したのが、木幡久右衛門（こはたきゅうえもん・明治元——明治四二）である。明治三十二年に閉館されたこの図書館が地方文化向上に果たした役割は大きいものがあつた。

また、得意の名筆をふるって、山陰の景勝を天下に紹介し、胸のすくようなきびきびした文章で青年を魅了したのが大町桂月（おおまちけいげつ・明治二——大正一四）であつた。桂月の文と名は渇仰の的だったのである。

*

画人として、私達の視界にとびこんでくる人達が多いが、洋画家を先ずとりあげてみると、小豆沢碧湖（あずさざわへきこ・明治二〇頃歿）を忘れることは出来ない。彼は初め日本画を学んだが、中年から油絵を研究し、油絵を松江に伝えた最初の人である。彼について洋画を学び、明治十七年には「方園舎」と称する私立画学校を

のサロンにも出品し、帰朝後も我が国名士の肖像画を数多く描いている。彼は島根が生んだ我が国肖像画の第一人者として仰がれ、数多くの奇行を残して、惜しまれながら帰郷中亡くなった。江津市出身の森脇忠（もりわきちゅう・明治二一——昭和二四）は不運の画家（洋画家）であつたといふべきであらう。黒田清輝に画才をみとめられながら、そして帝展でも数回特選賞を受けながら、家事の都合で、その画業を十分のばすことが出来なかつたのである。もし、こうした事情に災いされなかつたら、彼は官展系作家として大成したであらうと思われる。伊藤素軒（いとうそけん・明治九——昭和三一）は、はじめ日本画を学び、帝展に入選しているほどである。しかし、後には洋画に志して渡米し、かの地で美術学校に入學して苦學している。洋画を学ぶかたわら日本画を描いたが、とくに鯉の絵は好評を博したという。滞米六年で帰国し、和洋折衷ともいふべき絵を画いた。後には再び日本画に帰り、日本画とくに鯉の絵に専念した。郷土島根にも帰り、今県内にも優れた絵を残している。

島根がプロレタリア陣営に送った唯一人の洋画家として千金貫事（ちがねかんじ・明治三四——昭和四〇）がある。彼は浜田市の出身で、大正一二年浜田図書館階上で個展をひらいたが、浜田の人々は、このときはじめて油絵というものに接したわけで、油絵というものを持ちこんで紹介した最初の人物が千金貫事であつたということになる。つまり、彼が浜田に最初に洋画を持ち込んだわけである。余談になるかもしれないが、そのときの個展の絵は未来派風だつたといわれ、画用紙に髪の毛がはりつけてあつたりして、「これ

開き、子弟に洋画を教授したのが堀樺山（ほりれきさん・安政三——明治四二）である。当時のことであるから、ほとんどの子弟が各地の有力者の子弟であり、その上画業をもって身を立てようとする者はなかつたから、ある意味では、空しい感もしないでもなかつたが、しかし、彼が洋画の教授に注いだ情熱は敬すべきであり、その情熱が画才にとんだ一人の子弟と出会つた時、近代日本洋画史に名を残すことになった画家を育てることになった。石橋和訓（いしばしわくくん・明治九——昭和三）がその人である。彼はむしろ日本ではよりは、遠く海外、とくに英国で著名な画家で、ミスターインバシといへば、英国で知らないものはないといふ。彼は本田錦吉郎、今尾景年、滝和亭などに師事し、遂に、明治三十六年にイギリスに渡航し、大正七年まで十五年間イギリスに滞在している。その間帰国すること数回、文展にも作品を出したこともあり、日本美術を海外に、また海外美術を日本に紹介した功により特別に文展で永久無鑑査に推薦されたこともあるが、作品は多く世界各国の有数の美術館に保存されている。イギリスではローヤルアカデミーに数年間



石橋和訓

学び、さらに欧州諸国を漫遊して泰西美術の粋をたずねて研究につとめ、当時イギリスでは外国人としてはじめてサーの称号をもつ画家となり、英国王立肖像画家会、王立油絵協会、などのメンバーに挙げられ、パリ

が油絵というものとびくつきぎょう天」するような絵であつた。その後、日本プロレタリア文芸連盟が作られると、美術部のメンバーの一人となつて、ポスターを作り、また社会主義的な雑誌に表紙やカットをのせている。彼はまた島根にはじめて労働運動の火をつけた人でもあり、昭和四年には松江に帰つて、全国農民組合連合会島根支部の書記長となり、画をすてて、農民労働者の真只中に身を投じた。彼は昭和六年同志とともに治安維持法のために検挙投獄されたが、同九年に出獄後は再び画家として東京で活躍、春陽会、春台展などに作品を発表し、第二次世界大戦後には第二の故郷とした長野県で珠玉のような作品を数多く残した。今、彼の墓は県下の農民労働者諸君の温かい募金で浜田市に建てられているが、パレットに鎌を組み合わせた図柄が正面に見える。美術史をいくらく調べてみても千金貫事の名は見えないけれども、そして、彼の作品はごく少数しか県内にはないが、プロレタリアという言葉の存在するかぎり、彼は島根がプロレタリア陣営に送った唯一人の洋画家といふべきであらう。ごく最近亡くなった洋画家で、本県出身のうち最初に正規の美術教育を受けた人に草光信成（くさみつひさなり・明治二五——昭和四五）がある。彼は東京美術学校に西洋画科が出来てからしばらくして明治四十四年に西洋画科本科に入學したのであるが、これは本県出身の洋画家で東京美術学校で美術教育をうけた第一号であつた。彼は大正五年東京美術学校を卒業し、ひきつづいて和田三造門に入り以後死に至るまで教導をうけた。そして、彼は他の郷土出身の洋画家の中でもとりわけ孤独の画家とよばれるにふさわしいのではあるまいか。というのは、絵画を画くというのは所詮一人

ぼっちの密室での作業に外ならない」ということを誰よりもよく感じていたのではなからうかと思われるからである。この画家が他の誰れよりも深切に郷土松江を愛したことや、さまざまな機会のさまざまなエピソードなどはすべてこのことと無関係ではない。彼は
大正九年一時帰郷し、松江に松江洋画研究所が誕生すると、その講師の一人となって、島根の地に洋画を根づかせることに一役買ったこともある。また、この画家の絵画には身近かに画家をとりまいて
いるものが多い、その意味で、彼はアンチミズムの画家だったといえよう。大正十一年帝展に初入選、その帝展特選三回、そして、その後死に至るまで官展系作家として終始した。後年には、彼の作品に大作やダイナミックな迫力を求めることは意味のないことであるが、小品や水彩画には他の追従をゆるさないものがある。昭和三十年に、川島理一郎、和田三造らと共に新世紀美術協会の創立会員にもなっている。

目を転じて、日本画の方に移ってみると和田翠雲（わだすいりん・明治七——昭和三〇）がある。彼自身も絵画を好んで彩管をふるったが、明治三十七年には同志と謀って山陰画協会をつくり、毎年展覧会を開催した。これは後に土筆会（つくしかい）と改名されたが、この土筆会展覧会が島根で日本画展覧会のはじめであった。彼はまた横山大綱の来遊以来、文人墨客との往来も繁く、斯界の世話役をもって任じた。

岡興州（おかこうしゅう・明治一六——明治四五）とか野々見大雲（ののみたいうん・明治四二歿）は将来を期待されながら早く死

ある関係から、本籍が平田市にある落合朗風（おちあいらうふう・明治三〇——昭和一二）もあげるべきであろう。彼はチャキチャキの江戸っ子気質の画家であった。文展から院展に移り、そこでも容れられず再び帝展に逆もどりしたが、情実はびこる帝展に嫌気がさし、青龍社展に移り、そこも去って当時の沈滞した画壇に新風を起こそうとして明朗美術連盟を創設した。彼は天才的造型力と新色彩感覚とをもって、大胆な原色の駆使をほいままにして、品位と感情を表現する作品を発表した。これは当時としては全く驚異であった。先年島根県立博物館で落合朗風遺作展が開催され、今では彼の作品が一層高く評価されるようになった。彼はわずか四十一歳で夭折したが、彼のような画家こそうずもれた鉱脈というべきであろう。

*

島根県が生んだ書道家に井原雲涯（いばらうんがい・明治元——昭和三）がある。彼は日下部鳴鶴翁が来遊したので、その門に入り、爾来書道に専念するに至った。大正六年には鳴鶴翁を会頭として、全国各派を網羅して大同書会を結成し、満天下に書道をひろめ、書道の雑誌「書勢」の編輯に当たり、十有二年、書道雑誌の權威として、各地を巡遊し、後進の指導に当たった、そして書道の大家を郷土に多数東道したので、本県には明治大正の書家の作品が多く残っている。葉師寺弥峯（やくしじびほう・明治三八——昭和二〇）も島根書道界にとって忘れることのない人物で黎明期の島根書道の開拓者の一人であったといえよう。

*

んだ。前者は上京して堀田半古の門に入って塾長となり、江戸風俗史執筆中わずか三十歳で死去しているし、後者は上京して竹内栖鳳の門弟として絵画を学び、進境いちじるしく将来を大いに期待されたが、近衛兵に採られ日露戦争に従軍中罹病し、二十六歳で亡くなった。もっと若くして死去したのが内藤玉青（ないとうぎょくせい・明治二三——明治四四）である。彼は松江市出身で、川端玉章に学び、後東京美術学校に入り秀才の評が高かったが、卒業前に死去した、そのとき年わずか二十二歳であった。

東京美術学校卒業後は虚名を求めることなく、展覧会には一回も出品せず、帰郷後は画趣至るときキャンパスに向い、毫も世に求めることなく恬淡な生活をつづけたのが竹田雲村（たけだかそん・明治一七——昭和三〇）である。田中頼璋（たなからいしゅう・明治元——昭和一五）は文展が開催される前から中央画壇で活躍し、文展が開催されると旧派の大御所として数度も入賞している。中国に三十八年間も滞在し、帰国後は池田市に住み、南面の第一人者として、中央で活躍した西晴雲（にしせいうん・明治一五——昭和三八）そして、文展・帝展に実に連続六回入賞あるいは特選賞を受賞



雲村小
父が島根県平田市の出身で

郷土芸能の方面でとりあげねばならない人物に高山雅市（たかやまさいち・明治三九——昭和三八）がある。彼は大阪で漫才を修業して帰郷したが、安来節の鼓は音のよさと巧みな間（ま）のとり方で名人芸とうたわれ、どじょうすくい踊りの写実的な演技と独特の表情は他の追従をゆるさぬものがあった。また、安来節の名を全国にひろめたのが渡部お糸（わたなべおいと・明治九——昭和二九）で、地元の安来ではその功績をしのんで「お糸まつり」が毎年行われている。伊沢蘭馨（いざわらんしゃ・明治二二——昭和二三）は起伏の多い人生経験をへたのち女優となり、演劇や映画さらにラジオにも登場して非常に人気があった。人形芝居のなかでもっとも操法が困難で熟練を要する糸繰り人形が残っているのは全国に三か所といわれている、この稀少価値の高いものが石見の益田に残されているが、それには加藤三之丞（かとうさんのじょう・明治——大正？）の功績にもよるといえるべきであろう。また出雲の漁村に生まれて土地の芝居で役者になり、大阪に出て左団次の門に入り、さらに東京に出て明治の二大名優団十郎、菊五郎と女形として一座した人物に市川門之助（文久二——大正三）がある。おそらく島根県が生んだ俳優で、これくらい出世したものは珍しいといわねばならない。いま、生け花様式として小原流の名は全国に高いが、この小原流創始者が小原雲心（おばらうんしん・文久元——昭和五）である。彼ははじめ池坊の花を修めたが、明治四十五年に小原式国風盛花と命名して新たに一流をひらいた、これが小原流である。この独創的な「盛り花」形式の生け花は洋風建築に大いにマッチした。小原流はこうして当時の社会的風潮にのって大いに歓迎され、盛り花の基礎が築かれたのであった。また、古浦円流（こくらえん

りゅう・明治一七——昭和二九）は松江に小原流の今日の盛況を見るに至らしめた功労者である。

茶道は松平不昧以来の伝統をうけついで、現在でも盛んであるが、生涯を茶道（不昧流）に捧げた人物に海野林太郎（うんのりんたろう・明治三——昭和三六）がある。茶道に關係して、茶器において名工振りを發揮したのが染次如錦（そめじょきん・明治一八——昭和二三）で、なつめの二重張りの技法とすす竹の細工などは染次独得の名人芸として世人の目をみはらせ、大正昭和にわたって彼は名声をほいままにした。

＊

近代日本彫刻史に島根県出身ではじめてその名が見えるのが荒川亀斎（あらかわきさい・文政一〇——明治三八）である。しかし、彼はあくまでも近代日本の彫刻のあけぼのを告げる時代の一人の職人といった方が適切かもしれない。そしてこの人に見る芸道一筋の情熱が幾多の後進に刺激を与えた。

彼はまた金彫、石彫、塗物、建築、庭園、書面等すこぶる多様にわたる作品を残している。荒川嶺雲（あらかわれい云・明治元——昭和一六）は荒川亀斎の甥で松江に生まれている。はじめ亀斎の門に入ったが、のちに高村光雲など諸大家について和洋の彫刻を研究して帰郷した。

彼は松江から日本海に面したさびしい一村に移住し、世の常の如く名利や権勢を追うことなく、一心にその道に技を傾け、人格を練った。根付、木彫など彼の作品は県下の各地にあるだけであるが、それらの作品には実にこまかい細工がほどこしてあったりして、高い風趣があるものが多い。

では、橋の美観と宍道湖畔のふん囲気をこわさないために欄干を本格的な高欄造りにするとともに、擬宝珠も昔ながらの姿にすることを主張した。現在の松江大橋を渡る人々のうちでどの位の人が彼のこうした配慮を知っているであろうか。残念なことには、戦時中郷里吉田村に疎開したまま上京の機会を失い、松江に移ったもののこのことは病のため作家活動も減衰し、その上戦後の芸術的風潮が激変したために、どうかすると中央から忘れられがちな境遇にあったが、最も少ないのみ数で最も多くのことを表現する氣刀法を編み出し、日本民族固有の美を木彫に開花させようとした理想と情熱に支えられた作家としての業績は不滅のものがあるといえよう。その他、帝展で特選賞を受賞したこともある山根八春（やまねはっしゅん・明治？——昭和四八）、高村光雲の門に入り木彫を学び、高村光雲から高く評価され、光雲の一字を許されて景雲と号し、傑作も多い加藤景雲（かとうけい云・明治七——昭和一八）、はじめ木彫を研究し、後、木象がんに界に大きな進歩を与えた青山泰石（あおやまたいせき・元治元——昭和八）、青山泰石の門に入り、大正初め頃帰国して出雲市大津に住み、彫刻に専念した國山研石（そのやまけんせき・明治六——昭和一三）、郷里の先輩米原雲海に師事し、帝展入選数回、師雲海と共に長野善光寺の仁王像を製作した石本睦海（いしもとむかい・明治二——昭和一〇）叔父米原雲海の弟子となり、東京美術学校卒業後は帝展に数回入選して前途を期待されながら、晩年病氣になり、安来市の自宅で歿した木山青鳥（きやませいちょう・明治二九——昭和二三）などがある。島根の蒔絵は松江藩の蒔絵師であった小島漆壺齋（こじましつこさい）や勝軍木光英（ぬるであんみつひで）以来の伝統をはこっている鶴原

それにしても、彫刻のジャンルでの一つの巨星は米原雲海（よねはらうんかい・明治二——大正一四）であった。彼は内国勸業博覧会や東京彫工会、日本美術協会などに幾度も出品受賞し、審査員もつとめ、文展が創設されるや、そこにも出品受賞すること数回、こども審査員をつとめ、自ら日本彫刻会を組織し彫塑から木彫への新しい途をひらくとするなど、彫刻界のために尽くしたところ大であった。それは伝統的彫刻の最後の明星とよぶにふさわしかったかも知れない。郷里安来には松江の彫刻家荒川亀斎と浮彫の仁王像を左右一体ずつ製作しているしまた、長野善光寺の仁王像も米原雲海が完成したものであった。これは明治、大正を通じての木彫の大作といわれ、彼の代表作である。彼が死んだとき、師高村光雲はその告別式にのぞみ、「自分の片腕をうばわれた」といって暗涙にむせんだという。明治末年から文展の彫塑部では塑像派と木彫派との対立が次第にはげしくなり、氣刀彫りという新しい技法で古典彫刻を新しい姿で現代に生き返らせようとしていた木彫派の内藤伸（ないとうしん・明治一五——昭和四二）は平瀬田中らと共に文展を去って、横山大観、下村観山らの院展に移った。しかし彼はまもなく帝展へ帰っている。それはおそらく在野団体としての院展に失望したからであろう。彼は後年昭和二十一年には日本芸術院会員に推された。文展、院展、帝展、日展への出品三十二回、作家の意欲をもやしつづけ、その間幾多の弟子を育てている。いま日展の木彫界がかつて何らかの形で彼の指導を受けた人々たちによって盛況を見ている事実は見逃がすことは出来ないであろう。今東京音羽の護國寺には氣刀彫りの作品の代表的な作品があるが、県内に残る傑作の一つに隠岐神社にある「狛犬」がある。また松江大橋の架け替えに際し



河井寛次郎

鶴羽（つるはらかう・明治一三——昭和二〇）は蒔絵の世界に私達が見出すことの出来る人物の第一人者であろう。彼はまた招かれてシャム国王の王座をつくるために、彼の地に渡った。シャム生活六年、生涯

勤務をすすめられたが、技の衰えることを憂いて帰国し、以来製作にはげんだ。彼の作品は県下、とくに出雲地方に多い。島根は陶工の多く輩出したところである。しかし、河井寛次郎（かわいかんじろう・明治二三——昭和四一）ほど現代の陶工で個性的な釉を創り、使いこなしたものはないであろう。焼物の名手とはけだし彼にふさわしい言葉である。いま、倉敷の大原美術館には富本憲吉、バーナード・リーチ、河井寛次郎、浜田庄司の四人の陶工の作品だけを陳列した「陶器館」があり、彼の郷里にある足立美術館では「陶芸室」を設けて、彼の作品ばかりを陳列している。昭和三七年に島根県無形文化財に指定された船木道忠（ふなきみちただ・明治三三——昭和三八）もまた島根のほこるに足る陶工で、彼の窯は布志名（ふじな）窯である。古来布志名第一の名工としては雲善（うんぜん）があげられている。しかし雲善は技術に優れ、彼は独創力と心構えにまさっている。彼は布志名窯の伝統を復活すると共に、昔の布志名にもなく、彼が渡って学んだ英国にもない、現代に生きる船木道忠そのものの仕事を打ち出したのである。

（島根県立博物館学芸課長）

人物を中心とした

文化郷土史

—岡山県—

柴田



一 近代文化のあけぼの

近世もなかなばを過ぎたところから、それまでふるわなかった閑谷学校も殷盛におもむき、また私塾・寺子屋の数もこのころから爆発的に増加した。岡山県民の知的水準をたかめ、近代文化を受容し創造する素地を形成するうえで、それらの果たした役割はきわめて大きい。そのうち特に注目したいのが犬飼松窓（一八一六～一八九三）の経営した三餘塾である。

かれは都宇郡山地村（現、岡山市山地）の農家の生まれで、幼少のころ備中倉敷村（現、倉敷市）の儒者神崎小簀の門にまなんだが、深く悟るところがあつて家業に従事するかたわら独学で儒学を修め、その名声は近郷にひびき招ねかれて講筵をひらくこともたびたびであつた。そこで安政三年（一八五六）自宅の門長屋の一部屋を私塾にあて、近郷の若者たちを集め経書を講じ史書を論じた。これが三餘塾である。三餘とは、冬は春夏秋冬のあまり、雨の日は晴の日のあまり、夜は昼のあまりという意味で、その塾の名は、あくまで農耕を第一とし、勤労の余暇を利用して教育し学習する塾という意味を託したものである。農民学者であつたかれはまた近郷きつての篤農家で、耕地改良から施肥の工夫、さらに多角的経営の導入を試み、懇切に農民を指導した。この学問と労働を統一する論理がかれのいわゆる「守分躬行」である。百姓の修める儒学はあくまで百姓の生きかたの指針となる百姓の哲学でなければならぬといふのである。足守藩主で文学大名のほまれたかかった木下利玄の招きも

辞退し、ひたすら農業と教育・学問に精進したのもそのためである。陶淵明の徳をしたい田舎夫子の境遇にあまんじ、若者たちと共に芋を焼き茶をすすって学問を論じた三餘塾から、大養毅・大原孝四郎・犬飼松韻・坂本金弥ら次代を背負ってたつ多くの逸材が輩出した。

学問（教育）を労働（生産）との結びつきにおいて捉えるこの実学思想の線上に、偉大な企業家・発明家が現われるのであるが、そのひとりが花筵の考案者、織機の発明家として名高い磯崎眠亀（一八三四～一九〇八）である。かれは窪屋郡茶屋町（現、倉敷市茶屋町）の生まれで、家は小倉織の帯地をつくっていた。安政五年（一八五八）二十五歳のとき両親に死別したかれは、江戸に出て領主戸川家に奉公していたが、かれの烟暇は早くも開港後の経済界の変動を感じとり、新時代に即した地方産業の発展の必要にきづいた。江戸奉公数年にして帰郷したのもそのためである。イギリスの紡績糸がはじめて輸入されたのは文久三年（一八六三）であるが、かれは輸入紡績糸を見学するため大阪まで出むき、改めて撚糸機の改良、糸染めの工夫の必要を痛感した。かねて小倉織の粗雑さに不満を抱いていたかれは、さっそく輸入綿糸を取りよせ、改良に苦心をかさねること十年、ついに博多織と見違えるほど



磯崎眠亀

糸染めの工夫の必要を痛感した。かねて小倉織の粗雑さに不満を抱いていたかれは、さっそく輸入綿糸を取りよせ、改良に苦心をかさねること十年、ついに博多織と見違えるほど

豪華絢爛たる小倉織の生産に成功した。これに自信をえた眠亀はいよいよ花筵の製造に挑戦した。茶屋町から早島にかけての一带は江戸中期以来の蘭草どころ、畳表は農家の副業として広く作られていた。この畳表の技法に豪華絢爛たる新しい小倉織の技法を結合させようという試みである。明治五年（一八七二）家督を息子にゆづったかれは、狂人のように一部屋にひきこもり、黙々と織機機の改良に専念した。ときあたかも明治政府は殖産興業政策をかかげ、岡山県令高崎五六も地方産業の開発に情熱をそそぎ、製筵法の改良についても、政府を通してインド花筵の見本を取りよせ、業者を奮励して技術改良をすすめていた。このような風潮のなかで、眠亀は明治九年セイロン産のリウビン織の帽子にヒントを得て、蘭草筵の模様織つまり花筵の発明のいとぐちをつかんだ。研究に家産を傾けながらもまず堅織二人織機を完成し、塩基性アニリン染料を使って蘭草の染色に成功し、明治十一年ついに極彩色の錦莞筵を織りあげた。同十四年のはじめてロンドンに輸出し大変な評判になったが、これが花筵輸出の発端であつた。それはわが国の重要輸出品のひとつとなり、かれの事業も織機千台を擁するところまで発展した。同三十年事業を息子に譲って隠居し、同四十一年七十五歳でなくなった。

このような生産的な近代文化の創造とともに、政治と深いかわりをもつ情報文化がおこった。西尾吉太郎（一八五七～一九二九）が始めた『山陽新報』が、岡山県における近代的情報文化の草分けであつた。かれは岡山市新西大寺町の古着商の家に生まれたが、たまたま明治九年（一八七六）十九歳のとき上京した。かれもまた、

わずかに月ばかりの滞在の間に新聞の意義と将来性をみぬき、岡山においても新聞事業を起そうと決心した。ところが、そのころすでに新聞発刊を計画していたひとがあった。岡山師範学校・岡山中学校の教師であった野崎又六がそれである。かれは県令高崎五六の後援で発刊を企てていたが、西尾青年にあり、その意気に感したかれは、その企画を快く西尾に譲ったうえ、新聞刊行に必要な編集長に小松原英太郎（一八五二—一九一九）を迎えたがよからうと親切に助言した。小松原は後年ドイツに留学し、そのころから長州閥と結びつき、桂内閣の文部大臣、枢密顧問官にもなった人物であるが、当時は自由民権の論客で『東京評論』という新聞に「圧制政府頹覆すべし」という激越な調子の論文を発表し投獄されたこともある猛者であった。小松原は野崎の紹介で西尾にあった。「新聞紙を発行して普通官利の業となさんと欲せば、よろしくこれを断念すべし。もしよいよ発行せんと欲せば、祖先伝来の資産を挙げてこれを失うことあるも悔いざる覚悟なかるべからず」と決意のほどをたしかめたが、西尾も負けず「たとえこの事業のため資産を挙げてこれを失うも、悔めるところあらず」と答え、二人の意気は投合し小松原は編集長におさまった。こうして明治十二年『山陽新報』は発足したが、ときは自由民権運動の全盛時代、岡山県でも両備作三国親睦会という民権団体が組織され、さかんに政府を批判し国会開設の要求運動を展開したが、それを熱心に支援し指導していたのが西尾・小松原の『山陽新報』であった。県令高崎五六は、強迫と懐柔の両面から『山陽新報』の廃刊を迫ったが、西尾は頑としてその圧迫をはねつけ言論・出版の自由をまもりぬいた。かれが生命・財産を賭し

れた。その指導者が日蓮宗不受不施派の僧日正（一八二九—一九〇八）である。かれは津高郡九谷村（現、御津郡御津町）の貧しい農家に生まれた。この地方は不受不施派の篤信者の多いところであるが、かれも八歳のときから撰津衆妙庵の僧日照や高槻の本行寺の僧日暹らについて修業を重ね、安政五年（一八五八）和氣郡益原村（現、和氣町益原）に大樹庵（おおくま）を結びその庵主になった。その後、不受不施派の僧侶・信徒はたびたび宗派再興の直訴を繰り返したが、日正が運動の前面にたつようになったのは明治元年（一八六七）大政奉還の直後からである。最初は京都二条城の新政府に訴えたが許されず、その後、不受不施派解禁の訴状をたずさえ、東京・岡山間を往来すること数回に及んだ。しかし、岡山県権令石部誠中の弾圧や日蓮宗他派の妨害にあつて、目的の達成は容易でなかったが、政府のキリスト教解禁、県令高崎五六の好意的な斡旋など局面の転換するなかで、明治九年ついにその宿願を達成した。その年、日正は益原の大樹庵から金川に移り不受不施派の本山として妙覚寺を建てた。こうして信徒の尊信を一身にあつめた日正も、明治四十一年八十八歳で大往生をとげた。

二 欧米文化の影響

明治維新以後ほうはいとして高まった革新的思想は、斬新な欧米文化を積極的に取り容れようとする衝動にかりたてた。そのことは封建教学のメッカであった岡山藩学校においてさえ、明治三年（一八七〇）皇学・漢学と並んで洋学の講座を設け、英国人ベシワル・

て育てた『山陽新報』こそ、今日の『山陽新聞』の前身であった。

この自由民権の思想は、一時的であるにせよ文学・演劇にまで影響を及ぼした。角藤定憲（一八六五—一九〇七）の壮士芝居がそれである。かれは現在の御津郡御津町野々口の生まれで、十六歳の春、青雲の志を抱いて上京し、いちど郷里へもどつたが再び大阪へ飛び出し、郵便配達夫や巡査になったが、このころから民権思想に共鳴するようになり、上司と争い敵になったが、かれはそれを機に『東雲新聞』の記者になった。これは中江兆民の主筆する民権論の立場にたつ新聞であるが、この新聞に定憲が連載した政治小説が『剛胆の書生』である。そのころ末広鉄腸が『雪中梅』という政治小説を書いて評判になり、それを中村雁治郎が上演した。その演劇を観た中江兆民は定憲に「新聞や演説で主義主張を宣伝すると、その筋の取締りがつきものだが、芝居の筋のなかでやれば、自然でもあるし観衆に及ぼす影響も大きい。ひとつ一座を組織して芝居をやってみないか」と勧めたという。こうしたことが動機になって角藤定憲の壮士芝居をはじめたのであるが、その最初の出し物が『剛胆の書生』。自作自演の素人芝居で稽古には大変骨が折れたが、民権運動のムードの中では東京でも結構評判になった。しかし民権熱がさめればそこは素人芝居の悲しき、評判はがた落ちである。明治二十八年東京市村座の興業に失敗し、これを機に地方巡業の旅に出たが、明治四十年神戸大黒座の楽屋でたおれ、四十三歳の短い生涯をおえた。

これら民権運動の系譜とは別に、信仰の自由の獲得運動が展開さ



中川 横太郎

オスボン（オスボン）を招き英仏学を教授させ、また同年医学館を開設しオランダ医士ロイトルを招いていることなどからも窺われる。このような風潮のなかで近代的教育は政府の上からの指導だけではなく、民間の有志によっても進められていった。とりわけキリスト教の果たした役割は大きい。これを岡山県に導入した人物として中川横太郎（一八三六—一九〇三）の存在を見落すことはできない。かれは岡山藩士の息子であるが、明治四年断髮令が出るとさっそく頭髪をきり断髮礼讃の街頭演説をやり、また解放令が發布されると、未解放部落のひとつと積極的に関わり、部落の子弟の教育や衛生思想の普及のために奔走したという進歩的な思想家であった。そのかれがいち早くキリスト教に深い関心をよせたのも不思議ではない。明治八年四月かれは当時日本に來ていた宣教師ティラー博士を自宅に招き説教会をひらいたが、これがキリスト教師の岡山伝道の最初とされている。これを機に横太郎とその家族は熱心な信者となったが、最初はこれを邪教として妨害・悪口するものも少なくなかった。しかし横太郎の信仰は固くティラー・アッキンソンらを招き伝道にあたらせたが、同十一年にはベリー博士を神戸に訪ね、来岡して定住するよう促した。その結果、翌年ベリー・ケリー・ペターの三宣教師とウィルソン女史が来岡した。ときの県令

高崎五六も大歓迎で、東山の宣教師の住居ができるまで県令官舎をその宿舎に提供したほどであった。ペリーは岡山県立病院の医師、ウィルソンは同病院の看護婦、ケリーとベターは旧藩主池田家の設けた源泉学舎の教師に迎えられ、それぞれ医療・教育に尽くしたが、ペリーはまた安息日学校（後の日曜学校）を開設し、また高崎県令も同十三年県令官舎を仮教会堂として岡山基督教会をつくった。

こうして中川・高崎らの尽力でキリスト教は岡山の知識層を信者にしてひろまったが、その女子教育の発展に及ぼした影響はきわめて大きい。

岡山県ではじめて設けられた私立女学校は、明治十九年に創立された私立岡山女学校と私立山陽英和女学校で、今日の清心学園と山陽学園の前身である。前者は時の県知事千阪高雅の娘が社会事業のひとつとして始めたものであるが、その後ノートルダム会のシスターに経営をゆだねて今日に至っている。それに対し、後者は小野田伊之吉がアメリカ人宣教師オーチス・ケリーの協力を得て設立したものであるが、以後一貫して日本人の手で経営されてきた。なかでも見落すことができないのは上代淑（一七九一―一九五九）の影響である。



大原孫三郎

淑は愛媛県松山市に生まれ、明治二十二年大阪の梅花女学校を卒業するとともに、創立

後まもない山陽英和女学校に赴任した。同二十六年アメリカ合衆国に渡りマウント・ホーリヨーク女子大学に入学し、同三十年パチエラー・オブ・サイエンスの学位を得て卒業、ふたたび山陽英和女学校の教壇にたった。洋行帰りの新知識上代淑は、同四十一年わずか三十八歳で同校の校長に挙げられ、昭和三十四年他界するまでその職にあつて学校経営と教育にその情熱を注いだ。彼女は熱心なキリスト教徒で、そのキリスト教的な人間尊重の教育は、山陽英和女学校創立の精神と完全に合致するもので、教育によって女性の人格をたかめようとする理念はたしかに素晴らしいものであった。しかし、家族制度をそのまま認め、良妻賢母主義の域を一步も出なかったこともいえない。

キリスト教の影響のもとですぐれた実業家となったものに大原孫三郎（一八八〇―一九四三）がある。かれは倉敷紡績所・倉敷銀行の創設者大原考四郎の子で、閑谷黉から東京専門学校（早稲田大学の前身）に進み、近代的経営者としての教養を身につけた。明治三十七年（一九〇四）二十五歳で家督を相続したかれは、倉敷紡績社長、倉敷銀行頭取、県下最大の地主として大原財閥を築いた。しかし、かれは決してエゴノミックアニマルではなかった。大正時代といえど地主と小作、資本家と労働者の階級対立はげしく、至るところで小作争議・労働争議が起つていた時代である。かれはその対立を緩和し共存共栄をはかるために、大正十年（一九二一）大原家小作人親睦会をひらき、それよりさき同八年には、かれの提案で労資協会を東京でひらいた。また、労働問題・社会問題の究明のため、同九年大阪に大原社会問題研究所を開設したが、ここでは労働

者を昼夜交代で就業させた場合の生理的心理的な影響などについて研究させている。またその翌年には倉敷労働科学研究所を設け、同十二年には労働者の健康管理のために倉敷中央病院を設立した。

これらにみられる孫三郎の一貫した労資協調主義が、地主資本家的な発想にもとづくものであることはもちろんであるが、決してそれだけではなく、その発想はかれの強固なキリスト教的博愛主義にうらづけられたものであった。かれは明治三十二年（一八九九）二十歳のとき、岡山孤児院に石井十次（一八六五―一九一四）を訪ねた。十次は宮崎県のひとで医学を修めるため岡山に来ていたが、健康を害し邑久郡大宮村上阿知（現、岡山市西大寺上阿知）に転地療養していた。そのとき乞食の子供の面倒をみたのが縁となり、熱心なキリスト教徒であったかれは、明治二十年（一八八七）固い決心をもって岡山市門田の三友寺に孤児院を開設していたものである。孫三郎は十次の人柄に傾倒すると共にキリスト教の教えに深く心酔し、ついに二十六歳のとき倉敷キリスト教会で洗礼をうけクリスチャンになった。

かれは何んげん自由のない身でありながら、キリスト教的禁欲主義をもって生活の節度をまもり、またキリスト教的博愛主義の立場から十次の孤児院経営を物心両面からたすけ、十次の没後はみづから孤児院長となりその経営に努力した。かれの偉さは、資本家としての利潤追求と、労働者・農民の幸福、文化の発展との調和にたえず心を砕いたところにある。とりわけ注目されることは、明治三十五年のころ倉敷教育懇談会というものを組織し、その年から日曜講演会という開放講座をひらき、志賀重昂・大隈重信・菊地大麓・幸田露

伴・桑木厳翼など当代一流の学者・文化人を招き、時事問題や教育問題などを論じさせた。多くの研究機関を設立したことはさきに述べたとおりであるが、フランスの当代一流の名画をあつめ美術展をひらいて地域住民に開放したが、今日の大原美術館がつくられたのは昭和五年（一九三〇）のことである。こうして社会・経済・教育・文化あらゆる面に多大の業績を残した孫三郎も、敗戦の色、日まに濃くなる昭和十八年、倉敷の自宅で六十四歳の生涯を閉じた。

三 近代文化の全盛

明治末期から大正、昭和の初期は、岡山県のカ文化活動の飛躍的な発展の時期ではないかと考えられるが、その背景には明治期の中等教育の充実がある。明治十二年岡山藩学校以来の伝統をもつ岡山中学校（朝日高校の前身）が設立され、同二十八年津山・高梁中学校がつくられ県立中学校も三校になったが、私立中学校も関西・閑谷・金光・興譲館・矢掛・金川・天城などの中学校が設立され、教育熱にあふれた個性的な教育で多くの人材を輩出したが、県民の教育の関心をたかめたものは第六高等学校の存在であろう。

明治三十三年、広島県との烈しい学校誘致競争のすえ、県民・市民の熱狂的な支持を得て、第六高等学校を岡山に誘致することに成功した。学校には県内外の俊秀が雲集し、卒業後は大学に進んで有為の人材となったが、そのなから優れた学者も輩出した。そのひとりが近藤万太郎（一八八二―一九四六）である。かれは邑久郡豊

村五明（現、岡山市西大寺五明）の生まれで、第六高等学校を卒業して東京帝国大学（東京大学の前身）農科に進み種子学を専攻したが、明治四十四年ドイツに留学し、帰国すると大原孫三郎にむかえられ大原農芸会農業研究所の所長となった。かれは米麦の発芽力の研究や、稲・蘭草などの品種の改良につとめ、『日本農林種子学』『穀物講義』『米穀の貯蔵』などの名著をあらわした。種子学の世界の權威として学界に重きをなし、昭和二十一年学士院会員にえられたが、その年六十四歳で死んだ。かれが育てた研究所は、現在岡山大学農学部の大原農業研究所として存続している。

近藤万太郎より三年先輩に理論物理学の權威仁科芳雄（一八八〇～一九五一）がいた。かれは明治二十三年浅口郡里庄町に生まれ、第六高等学校から東京帝国大学理化学部の電気工学科に進んだ。子供のころから秀才のほまれがたかかったが、大正七年大学を首席で卒業し、そのまま長岡半太郎の理化学研究所にはいった。三年後に海外留学を命ぜられ、ケンブリッジ大学のラザーフォードのもとでX光線の研究に従事し、ついでコペンハーゲン大学のボーアのもとで量子力学を研究した。昭和三年八年間の留学をおえて帰朝し、やがて理化学研究所に量子力学研究室を設け、その主任として原子物理学や宇宙線の研究とともに後輩の指導にあたった。



仁科芳雄

三年八年間の留学をおえて帰朝し、やがて理化学研究所に量子力学研究室を設け、その主任として原子物理学や宇宙線の研究とともに後輩の指導にあたった。

落田泣置（一八七七～一九四五）竹久夢二（一八八四～一九三四）正富旺洋（一八八一～一九六七）がそれである。柴舟は津山市椿高下の出身で北郷姓を名乗っていたが、兵庫県電野の尾上家に養子にいった。東京府立第一中学校から第一高等学校、そして東京帝国大学へと秀才コースを歩んだが、早くから文学にあこがれ、一高時代に落合直文の指導をうけ、東大在学中に新年お歌会の選にはいった。『大君のちとせをよばふ田鶴がねに、松の風は静まりにけり』がそれである。大学卒業後、お茶の水女子高等師範学校の教授になり、また学習院でも教鞭を執ったが、かれは若くして詩人として一家をなし、「車前草社」を組織したが、その社中には若山牧水、前田夕暮・三木露風・正富旺洋・有本芳水ら、次代の文壇を背負うすぐれた詩人がひしめいていた。牧水は柴舟の歌風を批判して、「先生はお茶の水の良家の子女どもや、学習院の連中など相手にしているから歌が微温的なんです」といったそうであるが、たしかにかれは清新気鋭の歌人とはいえないし、また社会の矛盾に目をむけたものでもない。しかし柴舟のわが国歌壇に残した功績は、黒崎秀明も指摘しているように、その豊かな抱擁力で多くの人材を育て、個性を伸ばさせたことであろう。昭和三十一年八十歳でなくなったが、かれの歌碑が生れ故郷津山市の鶴山公園の片隅、桜のもとに建てられている。

小説では、近松秋江（一八七六～一九四四）正宗白鳥（一八七九～一九六二）内田百閒（一八八九～一九七二）片岡鉄兵（一八九四～一九四四）らが大正の文壇に登場した。白鳥は明治二十二年和氣郡伊里村穂浪（現、備前中穂浪）に生まれ、近くの閑谷塾に入學し

た。研究生や門下生はかれのことを「親方」と呼んでいたそうであるが、これはかれの門下生おもしろい人柄をよくあらわしている。湯川秀樹は「先生は偉大な指導者としてわが国の理論物理学の隆盛をもたらし、また戦後のわが国の科学の再建のために一身を犠牲にして努力された」とその功績をたたえているが、湯川・朝永の両氏がノーベル賞を獲得できた学問的基礎をつくったのもかれである。戦後文化勲章を授けられ学士院会員にえられたが、昭和二十六年業なかばにして死去した。

近藤・仁科より少しおくれて現われたのが経済史学の泰斗黒正巖（一八九五～一九四九）である。かれは上道郡可部村（現、岡山市）の中山家に生まれ、第一岡山中学校から第六高等学校を経て京都帝国大学経済学科に進んだが、その間、黒正家の養子となった。経済史を専攻し、卒業後欧米に遊学、帰国して京都帝国大学の教授となった。著書に『経済史論考』『封建社会の統制と闘争』『百姓一揆史談』その他があるが、かれの百姓一揆研究の業績は戦後の社会経済史学の発展に大きな影響を与えた。学問的業績もさることながら、岡山県教育の発展に果たした役割も見落すことができない。

昭和十年大阪経済大学の学長になったが、ついで第六高等学校長を兼ね、校舎の再建その他の苦難を克服し、また戦後の新制大学の発足にあたっては岡山大学の誘致・設立に奔走し、優秀な教授陣をそろえたが大学の発足した昭和二十四年病のため五十五歳の生涯をおえた。

ここで目を文学界に転ずると、詩歌・小説に名作を残し人物が大正期の文壇に登場する。詩歌では尾上柴舟（一八七六～一九五七）

た。そのころから徳富蘇峰が主宰した雑誌『国民の友』などを愛読し文学への情熱をそそられたが、同二十九年東京専門学校に進み、坪内逍遙のシェクスピアの講義に感奮し、その影響をうけて歌舞伎に熱中したこともあったという。同三十六年読売新聞社にはいり、文学・演劇・教育についての評論を担当しながら、創作にも情熱をそそいだ。入社翌年かれは処女作『寂寞』を雑誌『新小説』に発表し作家としての地歩を築いたが、数年にして新聞記者生活をやめ作家ひと筋の道に入った。ころは浪漫主義文学から自然主義文学への転換期で、かれは岩野泡鳴・田山花袋・島崎藤村・徳田秋声らとともに、自然主義を代表する作家として活躍した。かれの作品は黒崎秀明の指摘するように、「人生の平凡・倦怠、無為、虚無、幻滅が一見無難な筆致で描かれている」が、キリスト教の信者であったかれは、私生活を律するには厳しく、八十三歳で他界するまで、小説に戯曲に評論に随筆に幅ひろい活躍をし、実に二千五百篇の作品を残した。世間づきあいを好まず、ひたすら作家の目を通して人生を深く見つめつづけた。

かれらの文壇での花々しい活躍に対し、画壇とくに洋画界への進出もまためざましいものがあつた。幕末のころ都宇郡水江村（現、倉敷市）に、京都四条派の絵をよくする岡本豊彦（一七七八～一八四五）があらわれ多くの門弟を育てたこと、また狩野永朝（一八三一～一九〇〇）が弘化年間（一八四四～一八四七）岡山藩の筆頭家老伊木三猿齋（忠澄）にまねかれて虫明に留まり虫明焼の絵付けをしたり、西大寺や岡山で画塾をひらいて門弟を教育したことなどの事情もあって、明治のころにはすぐれた日本画家が現われた。古市

金峨（一八〇五―一八八〇）はその代表的人物である。かれは児島郡尾原村（現、倉敷市児島尾原）のひとで紺屋の家にうまれたが、十七、八歳のころ京都に出て岡本豊彦の門を叩き、その内弟子として技を磨き、天保（一八三〇―一八四三）のころ尾原に帰り、画房をかまえて創作に情熱を注いだ。吉備津神社の本殿内陣の扉絵「松鷹図」はかれの比較的初期の作品であるが、そのほか尾原慈眼堂の「龍虎の図」、倉敷市由加山蓮台寺の「蘭亭曲水」その他多くの作品を残し、明治十三年七十六歳で死んだ。倉敷村（現、倉敷市白楽町）の衣笠藁谷（一八五〇―一八九七）もこの時代のひとで、豪溪（その他景勝の地を訪ね、風韻ゆたかな作品を残した）。

幕末ごろから培われた日本画の伝統はその後とも絶えることはなかったが、やはり時代の動きて明治・大正期になると洋画を志すものが多くなった。早くから洋学の洗礼をうけた松岡寿（一八六二―一九四四）、原田直次郎（一八六三―一八九九）は岡山県洋画界の草分けであった。

松岡寿は伊木長門の家来松岡隣（の次男として、岡山市国富でうまれた。十歳のとき岡山藩学校の英人教師オスボンに英語をまなび、その翌年には東京に移り川上冬瀝の門にはいり洋画家を志したが、明治九年工部大学附属の美術学校に移り、ここで日本洋画の育ての親ともいべきイタリア人教師フォンタネージの指導をうけた。同十三年イタリアに留学八年間の研究ののち帰朝し、陸軍砲工学校の教官となり、図画、イタリア語を教授するかたわら洋画の振興につとめた。そのころ国家主義が台頭し洋画は画壇の片隅に追いやられていた調があったが、同二十二年かれは浅井忠・小山正太郎らと共に

に全国の洋画家に呼びかけ、明治美術会を創設した。また同二十七年明治美術学校が設立されると、かれは同校の教授となり、また東京高等工芸学校の設立に力を尽しその校長になった。このように洋画教育の振興に尽すかたわら、「コンスタンチン凱旋門」その他多くの名作をのこした。

原田直次郎（一八六三―一八九九）も松岡と同時代のひとで、備中鴨方藩士原田一進の子である。一進は文久三年（一八六三）遣欧使節としてヨーロッパに渡った鴨方藩主池田長発に随行し、かきねて明治四年山田顕義に従って渡欧した新知識である。その影響を受けてか直次郎も、八歳で大阪開成所、十一歳のとき東京外国語学校に入学してフランス語を学んだ。父一進はかれが外交官になることを期待したのかもしれないが、かれはこのころから洋画に興味を抱き、高橋由一について学んだが、明治十七年二十二歳で洋画研修のためドイツに留学した。そのころちょうどドイツにいた森鷗外と親交があった。鷗外の初期の小説「うたかたの記」の主人公は、当時ドイツの女性と恋愛していた直次郎だといわれている。その後フランスに移り同二十二年帰朝し、鍾美館という画塾をひらいたが、男爵・陸軍少将の息子で金銭に恬淡（てんたん）としていたかれは、月謝もとらずひたすら門弟を育てたが、そのひとりが洋画界の鬼才和田英作である。また多くの力作を描いたが、今日に残る作品は護国寺の「騎龍観音」と東京芸術大学の「靴屋のおやじ」など数点にすぎない。

それから少しおくられて鹿子木孟郎（一八七四―一九四一）満谷國四郎（一八七〇―一九三六）があらわれ、ついで児島虎次郎が登場する。虎次郎は川上郡成羽町のうまれで、二十二歳のとき大原孫三郎

の後援を得て東京美術学校に入学し、卒業するとベルギーに渡りガソンの美術学校にまなんだ。かれは画家としても数多くの秀作を残したが、かれの名を不朽ならしめたのはフランス名画の蒐集の仕事である。かれの被護者であった孫三郎は、第一次世界大戦でフランスの貨幣価値が暴落したのを機に、フランス名画の蒐集を思いたち、大正八年虎次郎をフランスに送った。かれは孫三郎の資金で当代一流画家の名作を買いあつめた。再度の渡欧によって集められた多くの名画は、のちに大原美術館に収蔵され、多くの美術愛好家の足をひきつけている。大正十五年明治神宮の壁画の制作に没頭したが、

中途にして精魂つきはて病氣にかかって昭和四年に他界した。このように洋画を志す若者たちは、東京やヨーロッパに遊学し、洋画教育の発展に尽すとともに多くの名作を残し、後世に多くの影響を与えたが、その反面、伝統芸術の存続と発展に尽したひとびともあった。備前焼の名声をたかめた金重陶陽（一八九六―一九六七）がそのひとりである。

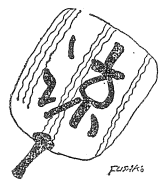
陶陽は明治二十九年備前焼陶工の名門金重家に生まれたが、素朴な土の匂を特徴とする備前焼の評価は決してたかいものではなかった。しかし芸術家肌の陶陽はなんとか古備前の風格を再現しようと、土を吟味し窯の構造に工夫をこらし、三十五歳のころには桃風の色調・気品を加えることに成功した。その作品は茶道界や陶芸界の評判になり、備前焼・金重陶陽の名声はにわかにたかまった。その業績は高く評価せられ、昭和二十七年には国の無形文化財の指定をうけたが、さらに備前焼の真価を海外に宣伝するため、ハワイ、アメリカ、オーストラリア・ニュージーランドを巡回して陶器展を

ひらいた、こうして若き日の夢を実現した陶陽は、昭和四十二年なお惜まれながらこの世を去った。行年七十一歳。

維新以後政治的には立ち遅れをとった岡山県も、文化的にはいはゆる欧米先進文化を取り入れ、教育水準をたかめながら多くの人材を中央に送り、また地方文化の担い手とし、日本近代文化の発展に幅のひろい貢献をしてきたといえる。今日活躍されているひと多いし、また書きもらしたひとで忘れがたいひとと少なくないが、紙幅の都合で割愛させていただいた。

なお小論の執筆にあたっては、黒崎秀明『岡山の人物』、秋山和夫『岡山の教育』、長光徳和『釈日正聖人伝』、厳津政右衛門『黎明期における四人の洋画家』（日本文教）おかもと風土記・統（所収）、脇田秀太郎・厳津政右衛門『岡山の絵画』、岡山市教育委員会編『岡山市史』（宗教・教育編）等を参考にした。あつくお礼を申しあげたい。

（岡山市立岡山商業高校教諭）

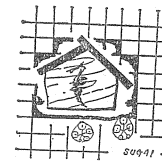


人物を中心とした

文化郷土史

—広島県—

佐藤良男



一 はじめに

広島県は美術的に育成さるべき土壌が無かった訳ではあるまいが、戦前の広島市は大陸進出の重要な軍都、呉市は海軍々港として、不幸な時代の花形となり、世界初の原爆の洗礼を受けて、多くの貴重な作品をなくした。

美術・工芸に絞って紹介するのであるが、調査不十分のまま筆をおこす事を不安に思う。

二 明治期の日本画家

初期は江戸期からある四条派、田山派、南画がもてはやされ、床の間芸術が主軸をなした。

安芸藩の絵師で狩野派の山野峻峰斎の弟子小林月峰（一八三三～一八八八）、笠間桃圃（一八二二～一八九二）、橋本峻嶂（一八二九～一八九二）がいる。四条派では熊谷直彦（一八二八～一九一三）、田中鷲郡（一八七二）、山県二承（一八七九）がおり、南画では村上菊田（一八一～一八八一）がいた。このうち熊谷直彦は広島藩士として幕末の動乱期大いに国事に奔走したが、廃藩の後かねてから修業していた画道に活躍した。明治十年代に始まった内外の博覧会に出品、賞状を受け、明治三十七年帝室技芸員となり、活躍の舞台は東京であった。山県二承は俳諧をもよくし、もと足輕

として藩に仕えた。二承の号は耳が遠かったため、人から物を聞くたびにもう一度承ることを頼むゆえに自分から二承といったという。はじめ絵を山田雪塘に学び、後岸駒に教えを受けた。殊に俳画に巧みで、好んで庶民生活を題材とした。性行も常人と異なったところがあり、筆硯を友として名所旧跡をたずね、いたるところに俳句と画を残している。

また、紀伊国名草郡の人で京に上り、苦学精励の傍ら絵画を修め国事に奔走、明治初年竹原、同四年広島に来て南画をかき、同十四年第二回内閣勸業博に出品し褒状を受け名声をあげた者に名草逸峰がいた。

一方備後では藤井松林（一八二四～一八九四）や吉田東里、倉田雪舫、杉野怡雲、高田杏塲らが輩出して彩管をふるった。藤井松林は藩士の長子として福山に生まれ、幼にして画を同藩の士高田杏塲、吉田東里に学び、後京に上り中島来章に従いて田山派を学び、同門川端玉章、幸野樸嶺を凌駕するまでになったと記録されている。数年にして帰郷し藩主に仕え絵師となり、長州征伐には軍用図を描くため出征している。明治十年上京、第一回勸業博に出品、また宮中に「藤花・雀・鰐図」を献上したり、御前揮毫などして中央でも認められたが、同二十七年七十歳で没した。

ところで、江戸時代からの画家が多く没して、明治以後に成長した人々の時代となった明治二、三十年代以後も、日本画の風潮はあ

三 明治初期の洋画

まり変わらない。当時の指導的な人は里見雲嶺（四条派）、古川秋蓬（南画）、和田華岳、藤井松山（一八八〇～一九六七 四条派）らで、画会もしだいに頻繁になったが、その出品の様式など従来とあまり変わるところはなく、弟子たちに守られながら大きな流れとなっていた。

洋画を彼の地に渡って自ら研鑽した先駆者に小林花吉（号千古 一八七〇～一九一一）がいる。佐伯郡五日市町地御前に明治三年に生まれ、幼きより画をよくし、労働者とともにアメリカに渡り語学を修め、同二十四年カリフォルニア州大学画学院に入学、刻苦勉強、同二十九年展覧会に出品、クラウン金牌を受賞、また翌年「裸婦」を出品し最優等賞を受ける。いったん帰国後再度東部諸州及び英仏を漫遊し、さらにフランスのアカデミー・デルクロースに在学した。そのとき岡田三郎助、中村不折等と一緒にであった。後イタリーその他を巡歴し帰国、学習院の教授の職につく傍ら白馬会を結成するなど洋画の発展後進の指導に尽力したが、明治四十四年四十一歳で逝去。

四 展覧会と美術教育の始まり

洋画が広島に紹介されたのは明治四十年代に入ってからのこと

で、明治四十一年四月広島県立師範学校の教諭として昭和三年まで勤めた米山利助（号竹亭 一八八五～一九六九 山梨県出身 東京高等師範学校卒）がその先駆的役割を果たした。

広島県の画界が活気を帯びてきたのは、大正四年広島県物産陳列館、後の産業奨励館が元安川河畔にモダンな姿を現し、翌年からそこを会場として広島県美術展が開かれたところからである。

明治末から大正にかけての指導的な日本画家は広島高等師範学校の教授として来任した原貫之助（号白山）で、彼は東京美術学校創立まもない明治二十七年卒業の日本画科出身であった。また広島県立高等女学校の築瀬由太郎（号楓洋 一八八五～一九六九 奈良出身 東京美術学校図画師範科卒）、広島高等師範学校付属中学校の石谷辰次郎（号柑圃 一八八五～一九四二 和歌山出身 東京高等師範学校卒）なども広島土着の画人とともに活動した。

また大正末広島に来住した田中頼璋（一八六八～一九四〇）はこの地の画壇の大御所として重きをなした。田中頼璋は島根県生まれ。十六歳のとき山口県萩で森寛斎に学び、旅絵師となった。後上京し川端玉章の門に入り写生風の山水画が得意で日本美術協会や文展に出品して入賞、官展作家として活躍したたびたび御前揮毫の栄に浴した。大正十三年第五回帝展委員になり、日本美術協会日本画部評議員、巽画会の審査員を勤めた。昭和十五年七十二歳で没した。

作品は印象派的画風で、代表作として「果園の隅」「五境」「楽器を持てる二人の男」「冬」「夏」「広島大本營（明治神宮絵画館）」「鶴渡る」「練習曲」「窓際」「甘藍畑」「さくら」「鯨遊」などがある。

昭和十九年郷里に疎開し、戦後広島画壇の指導にも力を入れたが、同二十五年脳溢血のため六十七歳で没した。

小林徳三郎（一八八四～一九四九）は福山に生まれ、幼時上京、明治四十二年東京美術学校西洋画科卒業。大正元年一時大阪帝國新聞社に入社したが、すぐ辞し上京、洋画史上で一つのエポックをなす運動のフューザーの創立に参加、同二年島村抱月、松井須磨子によって創立された劇団「芸術座」の舞台装飾主任を同六年まで続けた。大正八年院展洋画部に「鱈」出品、同十二年以後は春陽会に出品。昭和元年春陽会会員となった。代表作として「金魚を見る子供」「江の浦残照」「海」「郊外落日」などがある。

戦災のため主要作を失い昭和二十四年心臓マヒのため六十五歳で急逝。日本フォープの草分けの一人であった。

田中万吉（一八九五～一九四五）は香川県丸亀に生まれたが、明治四十五年来広、大正二年修道中学卒業後、修業のため上京、日本水彩画研究所に入る。二科展出品、大正十三年渡仏、水彩の三宅克己、油絵の林俊衛・青山義雄・裕伊之助・鬼頭鑒二郎・酒井精一らと交友。アカデミー・コロロッシュ洋画研究所に二年、後二年は南仏マルセイユ付近サンシャマ村でプロバンスの老大家ルネサイソー氏

五 大正——昭和前期（終戦まで）

洋画家たち

南 薫造（一八八三～一九五〇）は賀茂郡内海町（現在豊田郡安浦町）に医師の長男として生まれ、県立第一中学（現国泰寺高校）を卒業後上京、明治四十年東京美術学校西洋画科を卒業。この年イギリスに留学。ポーロ・ジョーンソンにつきヨーロッパを巡遊して同四



南 薫 造
「座せる女」を出品
十三年第四回文展に
を発表した。明治四
十三年第四回文展に
「座せる女」を出品
し三等賞になり、同

四十四年第五回文展の「瓦焼」が二等賞を受けた。大正元年第六回文展の「六月の日」が二等賞で文部省買い上げとなり、第七回文展出品の「春さき」と第九回同展出品の「葡萄棚」が二等賞を受賞、同五年から同十四年まで文・帝展の審査員を勤めた。大正七年に光風会々員、昭和四年東京工業大学講師、同七年東京美術学校の教授になり同十八年まで勤めた。昭和四年帝國美術院の会員に推され同十九年帝室技芸員を拝命した。

に師事、風景画の研究を深めた。昭和二年帰朝、印象派風の作品を春陽会に出品していたが、脱会し帰広、在広画家のリーダーとして広島洋画協会を組織、指導した。昭和十七年中央画壇復帰を志すも、同二十年十月脳溢血のため五十歳で急逝。

國盛義篤（一八九七～一九五一）は山県郡の生まれ、大正十二年京都市立絵画専門学校卒業。在学中関西美術院でデッサンを学ぶ。大正十三年春陽会に「橋」初入選、同十四年と翌年と続いて春陽会賞受賞、会員に推挙された。昭和二十二年京都市立美術専門学校助教授、同二十四年教授。学制改革により京都市立美術大学助教授となり没するまで後進の指導に当たった。昭和二十六年五十四歳で没した。

作風は終始写実に立脚、初期には卒直素朴、深い色調ながら温くふくやかであり、後期に至り漸次温雅な淡い美しさをたたえ静かで重厚な画面を作った。

山路 商（一九〇三～一九四四）は新潟県長岡市に鉄道員の長男として生まれる。満鉄勤務の父に従い渡満したが、大正九年十七歳で広島に来住。そのころから作画、野村守夫、檜山武夫らと広土社展開催、二科展、全関西展に出品。昭和五年写真実派展をおこすも、翌年思想問題で内部分裂し自然解消、同十三年広島フォルム美術協会を創立（会員 山路商、坂本寿、灰谷正夫、岩岡貞美、木村武夫、実本仙、龜田伏見、紺野耕一）、第三回展から観光も参加、同十四

年中央で超現実主義的団体「美術文化協会」創立に当たり鬚光から入会の勧誘があつて出品したが、官憲の取り締まりきびしく展示されなかった。

昭和十六年特別高等警察により検査、身柄を拘留され、結核におかされた。昭和十九年六月喉頭結核のため四十歳で没した。

鬚光（一九〇七～一九四六）は山形郡千代田町生まれ、本名石村日郎。大正十三年広島から大阪に出て天彩画塾に学ぶ。このころから



光

鬚

鬚川光郎と名乗る。それを略して鬚光と呼んだ。上京後太平洋画研究所に学び、井上長三郎、麻生三郎らと知友となる。二科展、独立展、美術文化展などに出品、しばしば受賞。昭和十八年麻生三郎、鶴岡正男、松本竣介らと新人画会を結成するなど前衛的な創作活動を推し進めたが、同十九年応召、上海兵站病院で終戦の翌年、アミバー赤痢により三十九歳で病死。

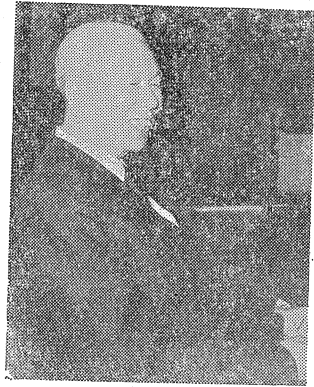
作風は初め多くの画風を試み、ゴッホ、ルオー風であったが、後宋元画の写実をとり入れて次第にシュール・レアリスムに傾斜して

ゆき冷厳な造形を追求、特異なスタイルを作りあげた。代表作に「目のある風景」「鳥」「馬」「シシ」などがある。

池田快造（一九一～一九四四）は三原市に生まれ、昭和三年府中中学校卒業後大阪赤松絵画研究所に入り、さらに東京川端画学校に学ぶ。昭和六年東京美術学校油絵科に入学、藤島武二教室に学び在学中光風会展に「壇輪」を出品しF氏賞受賞、同十四年卒業。光風会展に「昇天」を出品し光風賞受賞、光風会会友。第三回文展に「セロをならす」を出品。昭和十五年「運河」が光風特賞を受賞するなど若くして囑望されていたが、病を得て同十九年三十三歳で没した。

日本画家

金島桂華（一九二～一九七四）は深安郡神辺町生まれ、本名政太。幼きとき郷里を離れ兵庫県尼崎に移住。大阪の平井直水に師事、日本画の手ほどきを受けた。その後小学校の教員をしながら巽画会に「花芭蕉」（六曲屏風）が一等褒状になり、これから本格的な画業に専念、大正三年京都の竹内栖鳳門に入る。同七年文展に「叢」が初入選し、とくに「芥子」「鳴子九皋」「牡丹」の三作は特選を得て、一躍画壇に出た。昭和二十七年日展出品の「鯉」は文部大臣賞、翌年「冬田」が日本芸術院賞を受け、同三十四年芸術院会員となり、手堅い写生に基づく自然的自然観照による花鳥画の大家となった。昭和四十九年八十二歳で没した。



児玉希望

児玉希望（一九八八～一九七二）は高田郡来原村（現在高宮町）生まれ、本名省三。二十一歳のとき画家志望で上京。独学で油絵を試みたが悟って川合玉堂門

に入り日本画に専心した。大正十一年第三回帝展に「夏山」入選、昭和三年第六回帝展に「盛秋」、同九年同展に「暮春」がともに特選、同七年審査員となって以来脚光をあび、風景・人物・静物画とあらゆる画材を試み、常に新画法への研鑽を積み、そのエネルギーシな制作欲には定評があった。花鳥画では「枯野」「波濤群鶴」、人物画では「十六夜」「刑罰」「木村重成夫妻」。

戦後は近代感覚に富んだ色彩画と心象画に在来の写実的基盤を生かした画法をとり入れ、「室内」（第八回日展）は日本芸術院賞を受け、近代的感覚と東洋の伝統的手法をかね備えた画の幅を持つ画家として注目された。

また、かつて川合玉堂門の大世帯を結集、塾展を開いて後進の指導に当たった。昭和三十四年日本芸術院会員、日展理事、同四十六年七十三歳で没した。

楠 瓊州（一九九二～一九五六）は尾道市の裕福な呉服商の生まれ、本名善次郎。幼少にして南画の手ほどきを受け、高等小学校卒業後、京都に出て田能村直入門下の服部五老の内弟子となった。十八歳のとき郷里で画家として出発したが、生活が立たないため二十二歳のとき札幌へ移住、四年後二十六歳のとき上京、以後四十年近く東京北区の借家でその日暮らしの生活を送りながら画興のおもむくまま絵を描き続け、昭和三十一年不遇のうちに六十四歳の生涯を

とした。

作風は若いころ富岡鉄齋に傾倒し鉄齋ばりの絵を描いたほか、玉堂に私淑したり、梅原龍三郎・中川一政を学ぶなど自己の画境を求めて模索しつつ自由奔放な佳作を数多く残した。常に文人画家の正道を歩むことを念願し、清貧孤高の生涯を送り、死後に認められてきた。

工芸作家

本県には見るべき工芸は少ないが、出身者で名をなした者が二人いる。

六角紫水（一九六七～一九五〇）は佐伯郡大柿町能美島大原に生まれ、幼名仲太郎、後注多良と改名。明治十六年広島師範学校初等師範科卒業後一時郷里の小学校訓導をしたが、同二十二年東京美術学校開校されるや美術科に入学、同二十六年第一回生として卒業、同校助教となり、岡倉天心とともに国内各地を回って古美術の研究

をした。後欧米を視察、明治三十七年米國ボストン美術博物館東洋部勤務、大正十三年母校教授。大正十五年朝鮮平壤樂浪古墳發掘調査に携わり、古来からの漆技及び塗料を研究、漆工界に貢献するところ大であった。

昭和五年帝展出品作「曉獅子吼手箱」に美術院賞を受け、同十六年帝國美術院會員、同二十五年八十三歳で没した。

清水南山（一八七五～一九四八）は三原市幸崎町に生まれ、本名龜藏。明治二十九年東京美術学校彫金科卒業、研究科に入って加納夏雄、海野勝珉につき、さらに同三十二年造形科に入學、藤田丈蔵に師事した。明治四十二年から約六年香川県立工芸学校に勤めたが、大正四年病のため教職を退き、しばらく大和にあって古美術研究にふけたが、法隆寺佐伯定胤に認められ、上京、大正天皇御即位記念に司法省より猷納の太刀は、南山の作である。大正八年東京美術学校教授となり、昭和二十年まで勤めた。その間昭和九年帝室技芸員、翌十年日本彫金会々長、帝國美術院會員にあげられた。展覧会には昭和二年帝展第四科の設置以来逝去の年にいたるまで、審査員あるいは無鑑査として毎年かかさず出品、多くの秀作を残している。昭和二十三年七十三歳で没した。

六 戦 後

原爆画家

出来、以来同四十七年までに第十四部が完成した。

戦後画壇は色彩感覚による裝飾的傾向がますます人気が得ると同時に、フランス近代絵画の影響として超現実主義絵画や抽象絵画が流行し、写實的な絵を描いていた作家まで、われもわれもその方向に転向したのたいていして、前衛形式の集団に所属しつつ逆に写実主義の方向に新しい道を切り開くべく努力をはじめた最初の成果であった。

朝鮮戦争の始まった昭和二十五年から同三十年にかけて、国内展を次々に開き、三百五十会場、九百万人の観覧者を集めた後、同三十一年から同三十八年までの八年間はヨーロッパ、中国、ソ連、モンゴル、朝鮮など二十か国を回った。さらに昭和四十五年にはアメリカ国内の八会場で展覧会を開いたが、必ず「原爆の図」が——ゴヤの「戦争の悲劇」、ピカソの「ゲルニカ」、ジェリコの「メジューサ号の物語」などの一線上にある世界的な傑作である。——と絶賛された。その「原爆の図」は、昭和二十七年国際平和文化賞の金メダルを受けている。彼は伝統的な墨絵の世界に近代的感覚を盛り込み、壮大なスケールで展開しようとする数少ない作家である。

丸木 俊（旧姓赤松、一九二二～）は北海道生まれ、女子美術専門学校西洋画部卒業、力づよい素描力にひいていた。昭和十六年当時画壇で戦争批判をしていた美術文化協会に加入、同年位里と結婚して、彼とともに作画をしたのである。昭和四十二年に埼玉県

広島における原爆投下は今世紀の大事事件であり、この惨状をかけた作家に丸木位里・俊夫妻がある。

丸木位里（一九〇一～）は広島市安佐町飯室の農家の生まれ。若いころ一時田中頼璋に師事したこともあるが、これを除けばほとんど独習で過ごした。昭和九年上京、日本南画院、日本画会、明朗美術会などに出品していた。昭和十一年青電社展に「池」が初入選する。しかしまもなく脱退。その後豊光や福沢一郎とも親しく交わって歷程美術協会、自由美術協会、美術文化協会などに参加しシュールレアリスムを中心とする前衛日本画を開拓していった。そして四十四歳のとき、肉親の被爆を聞き、来広、その凄惨な真相をつかんだのである。妻俊との共作「原爆の図」第一部が昭和二十五年に



原爆の図（第5部=少年少女・部分）
昭和26年(1951年)丸木美術館蔵

東松山市に「原爆の図丸木美術館」を建て公開している。

また、「おばあさん画家」として一時有名になった丸木スマ（一八七五～一九五六）は位里の母親に当たる。明治八年安佐郡伴村（現広島市沼田町）に生まれ、丸木家に嫁し、農業家事に従い、終戦後はじめて位里、俊夫妻に絵の手ほどきを受け、昭和二十五年七十五歳のとき女流展入選、以後毎年出品、翌昭和二十六年院展に入選するなどしたが、同三十一年不慮の死にあった。作品は彼女の生活からにじみ出た純粋な感動によって童画のような素朴さと楽しさがあった。

洋画家

岡部繁夫（一九二二～一九六九）は呉市の海運業を営む家庭に、六人兄弟の三男として生まれる。十八歳のころ上京、兄弟で鉄工所を経営する傍ら油絵を独学。独立展出品、昭和三十四年會員となった。特に五十歳以後の活躍はめざましく、内外での個展開催のほか秀作展、国際展にしばしば選出されたり、優秀賞の受賞、政府買上げ、日本芸術祭招待出品と代表使節団員としての渡米等々数々の荣誉に輝いた。

作品は、主としてモノクロームのパートの厚い抽象画で、殊にブルシャンプルーの作品に独自の画風を創立、その展開と発展を期待されているとき、惜しくも昭和四十四年三月五十七歳で急逝。

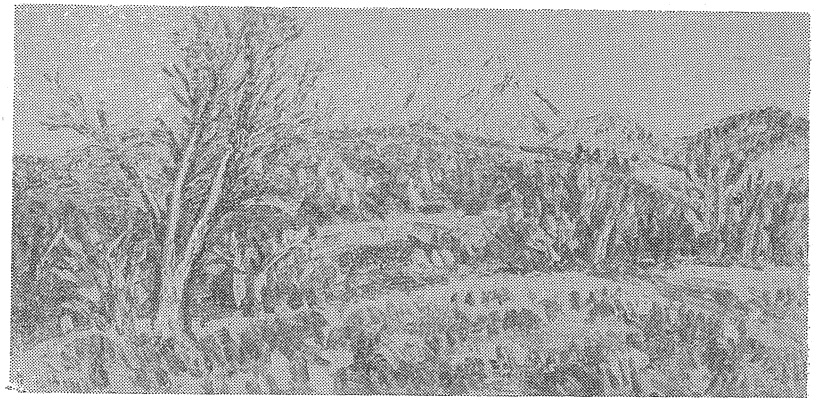
太田 忠（一九〇八～一九七二）は広島市生まれ。国鉄機関士と

して勤める傍ら画業に精進、中西利雄、小磯良平などに師事、昭和十三年から新制作協会展に出品を続け、同十八年同会会友、戦後は三次市に居をかまえ、同二十三年から始まった美術団体連合展に五回展まで出品、また昭和二十三年新制作展に新作家賞受賞、同二十六年同展十五周年賞受賞、翌年から会員となり、同二十八年から始まった毎日新聞主催の日本国際展現代展にも出品する等活躍。

昭和三十八年主にフランスを中心に渡欧、さらに同四十三年にも渡欧したが、同四十六年急性心不全のため六十三歳で急逝。

作品は市街や工場風景を強い色調とフォルムで描き、天衣無縫な庶民感情を発想の基盤にしていた。

小林和作（一八八八～一九七四）は山口県吉敷郡秋穂町に生まれ、明治三十七年京都市立美術工芸学校に入学、同校卒業後日本画家川北霞峰の門に入り、霞村と号した。つづいて京都市立絵画専門学校に進学、在学中第四回文展に出品した「椿」が初入選となり、第七回文展では「志摩の波切村」が褒状を受けた。しかしその後は落選が続いたため洋画への転向を決意、鹿子木孟郎の画塾へ通ったが、アカデミックな画風になじまず、大正十一年に上京。梅原龍三郎、中川一政、林武らの知遇を得て画技を磨いた。その後は春陽会展に出品し、大正十四年の第四回展と翌年の第五回展で春陽会賞を連続受賞。昭和二年には早くも会員に推された。つづいて昭和三年から同四年にかけて約一年間渡欧、イタリアとフランスに滞在し



小林和作 伯耆大山の秋 昭和31年(1956年)51.4×99.8cm

た。同九年春陽会を辞して創立間もない独立美術協会に須田国太郎とともに会員として参加、同時に尾道市に移った。以後亡くなるまで尾道にあって作画活動を続ける一方、戦後における本県美術界の指導的役割を果たすとともに文化振興にも意を注ぎ、物心両面から援助した。これらの功績によって昭和二十六年山陽新聞賞、同二十七年

中国文化賞、同二十八年芸能選奨文部大臣賞を受賞。同四十九年十一月四日スケッチ遊行中三次市において八十六歳で逝去。

代表作に「ゆく春」「秋晴」「秋山」「佐田岬風景」「海」等があり、作風は戦後国際交流の活発化に伴って、具象、抽象と揺れ動いたが、その流れに立ち入ることなく、自然とのふれ合いの中に作画の境地を求めて、東洋画の一式である南面的構成と、西洋画の技法を巧みに融合させている。わが国の柔らかな単調な色調を、油彩の顔料のうえにじっくり生かそうとする努力がみえ、かなり厚塗りで筆触の盛りあげがそのまま効果を示して、整った調子にためられた一種の色彩効果をもっている。

日本画家

奥田元栄（一九一二～）は双三郡吉舎に生まれ、本名蔵三。昭和六年上京、児玉希望に師事。昭和十一年文展に「三人の女」初入選、同十三年第二回文展に「盲女と花」で特選。

戦後から風景画の世界に入り重厚味を加え、昭和三十七年第五回日展に「磐梯」で文部大臣賞受賞、同三十七年度の日本芸術院賞を受け、同四十八年日本芸術院会員となり、同三十八年日展評議員、同四十四年日展理事、同四十九年日展常務理事と活躍を続けている。

彫刻家

円鐔勝三（一九〇五～）は御調町に生まれる。昭和七年日本美

術学校卒業、沢田政広に師事。第十二回帝展に出品以後官展に出品を続け、同十四年第三回新文展から特選四回を重ねている。

戦後昭和二十六年日展審査員、同三十三年第一回新日展の審査員、同四十五年芸術院会員、日本彫塑会委員、多摩美大教授として活躍している。代表作に「しろうさぎ」「幻想」など。

七 県立美術館の創立

明治百年記念事業の一環として広島市上蔵町に建設され、昭和四十三年九月開館。

収蔵品は本県ゆかりの作家の日本画、洋画、彫刻、工芸、書など各分野にわたり、所蔵品の常設展示、年間約六回の企画展および貸し館による団体展が開催され、《美の殿堂》としてひろく県民をはじめ多くの人びとに親しまれている。

八 おわりに

以上、原則として本県出身者で我が国近代美術史に、あるいは広島島の文化に大きな影響を与えた人物を選び、また本県の生まれではないが、広島県と深い関係があり美術的に影響の大きかった者も加えた。なお、研究と資料不足のため、かなり割愛した人もある。

また時代区分を一応はしたが、前と後の期間にも活躍があったもののある事を了解してもらいたい。（広島県立美術館副館長）

人物を中心とした

文化郷土史

—山口県—

中野真琴



はじめに

それぞれ捨身の行動によって、討幕という破壊作業を終えた青年群像は、維新が到来すると、それまで「志士」と呼ばれ、唱えていた離合集散体の内部から、自らを「知識を世界に求める」——建設作業体へ合流するよう迫られた。

「志士」の誇りを整理できない心情や環境に停滞したものは、尊王攘夷の「攘夷」を除ぞいた新政府の要路者を裏切者と見た。そこで、そうした志士群の外縁からのっそりと新政府に登場した長州人大村益次郎を、まず明治二年九月に刺した。大村は十一月に亡くなった。刺客の中に大村の隣村の大楽源太郎の門下神代直人がいた。年が明けて三年になるとすぐ、脱隊兵騒動が、大村、大楽の生地周辺で起こった。

騒動の首魁の一人富永有隣はとらえられ、明治十七年に刑余の身となって出獄した。その有隣は國木田独歩の「富岡先生」のモデルとなった。有隣はかつて吉田松陰に野山獄中で相知り、松下村塾の助教師もしたことがある。

騒動の背後の重要人物として、山口藩府から呼び出しを受けた大楽源太郎は、出頭の途次、脱走して九州へ渡った。翌四年三月潜伏先で久留米藩士に暗殺された。尊王攘夷を唱えて迫った源太郎は、一時、久留米藩論を掌中に入れてさえた。

梅田雲浜、頼三樹三郎に兄事し、冷泉為恭を暗殺したテロリスト源太郎は、慶応二年から騒動の直前までは、故郷の地で「西山書屋」という私塾を開き多くの人材を教育していた。寺内正毅はその

門下の一入である。

下関の作家古川薫は、その直木賞候補作品「走狗」（昭和四十四年）に、源太郎を描き、彼を夷狄を忌む漢学者の魂の持主としているが、山口市教育委員会勤務の郷土史家内田伸は、その著「大楽源太郎」（昭和四十六年）の付録として、源太郎の漢詩百三十七篇を蒐集し、彼に漢詩人の位置を与えようとしている。

脱隊兵騒動のあと、征韓論の分裂、佐賀の乱、熊本、神風連、秋月の乱、そして明治九年十月に前原一誠の萩の乱が起り、翌十年西南戦争がはじまった。これらは全て不平士族を中核とした人々が、攘夷の行方を新政府に問うために献身破壊した行爲であったが、山口県、騒動と乱の底流には、地下の吉田松陰にどう答えるかという思いがくすぶっていた。大楽源太郎も松陰没後における門中達の「一燈銭申合」に参加していた。萩の乱には松陰の近親者が数多く結びついている。

下関の詩人・作家富永博は「萩の乱と前原一誠」（昭和四十四年）に次のように書いています。

「前原一誠をたたくと吉田松陰の音がする。前原の悲劇は、世の中がどう変化していても、吉田松陰の音色しか発しなかったところにおこった」。

昭和四十四年に萩の郷土史家松本二郎は「萩の乱真相」を書き、松陰や乃木希典の師でもあり、希典の弟正誼の養父である玉木文之進が前原の背後にあったことをいっている。正誼はこの乱で、兄希典に参加を頼み、態度不鮮明な兄に訣別して、乱戦の中心に突入し悲壮な死をとげた。養父文之進も自殺した。

乃木は翌年西南戦争で苦戦し、自殺しかけた。乃木は日露戦争で愛児二人を失い、後年「山川草木」の詩に戦争の悲傷をうたっているが、実感が荒涼として立ちこめている。明治三十八年一月、防長新聞に佐間鴻東（昭和十七年七七歳没）が「三典歌」を発表している。三典歌は後年谷川徹三や三好達治によって注目された。討幕維新戦争の勝利者の内部にあつては、永い間血の死臭が漂っていて、明治天皇に殉じた乃木希典の死まで、それは続いている。その乃木を世代的にさしはさむような祖父と孫があつた。難波軍菴と作之進である。軍菴は知名の志士であつたが、生涯名利を拒絶しつづけた。孫の作之進は衆議院議員となった。その作之進の子大作家が皇太子を狙撃した。絞首刑の露と消えた大作の体質のどこかにあつたあの血の匂いは風土の志士の血の匂いという関係のものだったのだろうか。

津和野生まれの森鷗外（父静男は防府市植松の大庄屋吉次家から森家へ入った人）が乃木の殉死に衝撃を受け一気に「興津彌五右エ門の遺書」を書き、更に「阿部一族」を書いたことは、そうした維新前後からの山口県人の実存に対するアプローチだったのでなかろうか。夏目漱石にも「こころ」があり、芥川竜之介にも「將軍」があるが、鷗外の文が風土的な近親感を最も色濃くしている。芥川の父母のどちらかだったか、山口県人といわれているが、芥川の「將軍」の素材は山口県を主体として出版された「乃木式」という雑誌によっているようである。それらの意味で、芥川の乃木に対する態度にも何か近親的な心情があつたかもわからない。

明治維新をかちとった風土に生まれたためにすぐれた芸術文化を

開花させ得る可能性が断たれた例が幾つあるかも知れない。県人の多くの才能が政治に傾注し、軍事や実業に没入している。

もし大染や乃木が生まれた時間をずらしていたら、彼等とともにすぐれた詩人として大成したかも知れない。すでに二人は特異な教育者であった。日露戦争の中核といわれる児玉源太郎にもその可能性が見られる。山口県の芸術文化が、明治以後不毛であったとするなら、そんなところに原因が求められるであろう。明治からの山口県人は、とにかく国づくりの渦中に身を投じることに生涯をかける風潮を主とし、文化の花園づくりは後事に托するという精神であったようだ。これから書かねばならない山口県の文化的人物像は、どうしたことが、苛烈な悲慘な、不要領な、極端に地味な、しかし一途な魂の告白を吐露しつづける人々によって彩られている。今日までのところ円寂味を充滿させるような芸術文化人は極めて少ない。今日もなお、一方に岸信介、佐藤栄作という政界の指導者をおき、他方に日本共産党議長野坂参三、書記長宮本顕治を配している。さらに志賀義雄、神山茂夫という人々を加えて考えるとき、それらの人材を培うこの風土を等閑視することはできない。

若き日「敗北の文学」で小林秀雄と文芸評論賞を争い、後に作家宮本百合子と結婚した顕治……志賀義雄の生家は、すぐ隣に木戸孝充、筋向いに高杉晋作の生家がある。岸信介は「途上」の私小説作家嘉村礒多と同じ時期に山口中学で学んでいる。

この風土の人間は、時流に密着し、叫びながらひた走るか、時流を横目で見て、³⁵36³⁷とことこ歩いて行くか、何れにしても、一筋の道が、多くの県人の辿った生きようであった。

にはお国誉など一度もなかったのである。

大正に入ってから末松謙澄（大正十年六五歳没）の「防長回天史」、馬屋原二郎（大正四年七〇歳没）の「防長十五年史」が出され、末年には郡制廃止に伴って郡治を記念する郡誌の編纂が多くなされた。このころから御園生翁甫（昭和四十二年九二歳没）の「防長地名淵鑑」「防長造紙史研究」、三坂圭治（明治三十八年生）の「周防国府の研究」などが刊行された。馬屋原も御園生もほとんどその老軀が終息する直前まで執筆しつづけている。その歴史に対する執念の熱っぽさは一体どこから来たものか。特に御園生の業績を埋めておくのは惜しみても余りがある。何れ全集刊行が企てられるだろう。研究のグループとしては、昭和四年に防長史談会が設立され、五年から機関誌「防長史学」が刊行されたが、これは現在も「山口県地方史学会」としてなお継承されている。

この間、中央では西洋史の瀬川秀雄（明治二十九年東大卒、岩国出身）、日本史の渡辺世祐（明治三十三年東大卒、萩出身）、古文書学の伊木寿一（明治三十九年東大卒、三隅出身）があり、郷土にあっては、山口高等学校教授であった小川五郎（昭和四十四年六七歳没）の業績が著しかった。小川には没後「防長文化史雑考」（昭和四十五年）がある。彼の筆は考古学、民俗学にわたり、短歌にもおよんでいる。

現在活躍している史家には、日本史の三坂圭治、藤井貞文、奈良本辰也等があるが、奈良本の才能はマスコミに迎えられて華々しく、修史的なこの県の史家の中で異彩を放っている。

評論家には横山健堂（昭和十九年七二歳没）がある。明治から大正

歴史と評論

明治以後の山口県の史家の営為は毛利忠正公の修史事業を継承し、更に維新における郷土人士の輝かしい活躍の足跡を明らかにするという目的で開始された。硯学近藤芳樹（明治十三年八〇歳没）が主軸となった。しかし明治八年に芳樹が木戸孝充の推せんで宮内省出仕として中央に登用されてからは、近藤清石（大正五年八四歳没）がその事業を継いだ。そして、明治二十年までに「周防長門地誌提要案」其他の編纂書を完成した。

明治十四年末から各支藩の旧記編集事業が始められた。私撰事業も起り、藤田葆、吉田嘉疏などが後に残る仕事をした。清石は独力で「山口県史略」「大内実録」などのすぐれた業績をあげたが、明治三十四年に「山口県風土誌」の編纂にかかり三十八年に至り三百五巻を成稿した。一方、私撰事業として明治二十三年以降、貴重な古書の複刻を企て「長周叢書」として刊行した村田峰次郎（昭和二十年八九歳没）が忘れられない。

これ等の成果は、元来、毛利家においては、元就以来の歴史に対する藩の姿勢があつて、その伝統に立ったものというべきである。たとえば、天保十二年に藩内全域を草の根を分けるようにして蒐録された「防長風土注進案」（三九五冊）という、膨大な地誌が藩の事業として完成されていることは、その一つのあかしである。

このことはまた、山口県が実質的に鎌倉時代から大内氏、それにつながる毛利氏と、二氏に一貫として統治されていた事実と思ひあわせて考えねばならない。少なくとも江戸二百八十年間、この土地

初年にかけて「新入国記」「旧藩と新人物」などを書いた。黒頭巾のペンネームでその独得のきびきびした文体が中央論壇を賑わした。経済学者であるかたわら「千山万水楼主人」のペンネームで読売新聞に執筆して名声を博した河上肇（昭和二十一年六九歳没）は、大正五年の秋から大阪朝日新聞に「貧乏物語」を書いて数十万の読者を魅了した。

河上肇が山口高校の生徒であった頃、山口中学の生徒として、山口市後河原の下宿に同宿していた中川仲之進は、その晩年、次の述懐をしている。

「明治二十九年の夏に河上先輩が私の家に避暑に来た。漢学者であった私の父の部屋で、河上さんは、観潮楼主人という扁額の文字を見て、父に△△楼主人の使用法を質問した。父は一時間ばかり種々説明した。そのうち父は私に、お前も河上さんのようなものを宛める人間になれといった。私が東大に入った時は、河上さんは千山万水楼主人のペンネームで人気のある文章を発表していた。

同宿の頃、或日河上さんは明治天皇の写真を街で求めて来て、それを部屋にかけ、天皇の写真に足を向けるように床を敷いて寝た。しかし私はどうしてもその真似が出来ず、写真の下に頭を向けて、つまり馬前に寝た。河上さんは夜半ふと目覚めても、陛下の視線に自分の目がピタリと対う、天皇への敬愛の心がおのずから湧く、といった。幾日か経った或晩、河上さんは寝床の位置を変更して云った。僕も随分考えたが、やはり君と同じ方向で寝る方がよいと思ひ着いた。」

昭和の戦争の末頃、「松下村塾の人々」で岡不可止が名声を得

た。草莽のころをうたい、屈原の心情を唱えたが、戦後は不遇裡に亡くなった。岡と対象的に戦後、左翼評論家として岩上順一（昭和三十三年五一歳没）が登場して一時名を得たが、業績半ばで倒れた。

他に日独戦争の従軍記者で名を馳せたジャーナリストとして活躍した後、劇作などの翻訳をし、戦後の晩年に古浄瑠璃の研究をした若月紫蘭（明治三十六年東大卒、防府出身）がいた。山口高校で小川五郎の教えを受けた荒正人は東京で健在。郷土では村嘉禧多、中原中也に関する調査的評論で名を得た太田静一（山口女子短大教授）と詩人であり国文学者である佐藤泰生（梅光女学院大学長）がいる。評論の杉本春生も着実な仕事をしている。

昭和四十七年の文化功勞者になった河上徹太郎（明治三十五年生）は、「小林秀雄とならび、わが国の近代批評の創始者といわれ、とくにフランス象徴詩の中心思想をわが国に紹介、東西の古典を通じて、西洋文明とその影響下にあるわが国の近代文明への批判を展開した」と受賞当日の新聞に書かれていたが、彼は山口県の文人としては異色の円寂型の人といふべきである。父が東大工学部卒の明治の実業家であり、その教養期間および半生をほとんど県外で過した人で、音楽評論から出発している。しかし彼が、その母の看病のため近年故郷岩国に遇した期間に、彼の眼は吉田松陰に注目し、評価の高い評論を書きあげている。河上のごときを、県人二世といふべきだろう。二世が父祖の地に住んでみて「山口県のアウトサイダー」を書いたとでもいふべきか、それとも父祖達の血の匂ひをかぐ晩歌の中に、今日を顧じ明日を想ったのだろうか。いずれにしてもこれ

からの若い県人はだんだん河上型の人間像に目標を置くようになると考えられる。こうして維新も、明治も遠くなり、山口県人が日本人の水準の中へ定着し、個人としての自己に主体を持つようになるのであろう。

絵画と音楽

明治初年の画家には朝倉豊隆（明治四年没）、羽榛西嶺（明治十年没）があったが、狩野芳崖（明治二十一年六一歳没）、森寛斎（明治二十七年八一歳没）の兩人が出て、明治の新画壇に大きい影響を与えた。

芳崖は文政十一年、長府藩のお抱え絵師晴卓の子として生まれた。十九歳で上京、狩野画所に入ったが、ゆくりなくも橋本雅邦と同日入門をした。十数年の研鑽を経て數頭となったが、藩主より許された修業年限が来て、老父と病姉のいる長府の家へ帰った。老父のすすめる嫁をもらったが、間もなく父の許を得て単身上京、藩主よりの学資の給与はなく、窮乏し、信州人の後援者の紹介で佐久間象山



狩野 芳崖

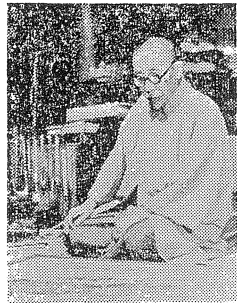
の大砲等の製図などを画いたが帰郷。文久元治の頃から藩内で国事に尽し、維新後は富国論に熱中し、養蚕機業、山林開墾、を行なったが、常に失敗し極貧をきわめた。明治十年妻と病姉を連れて再

々度上京。しかし狩野派は当時顧みられず、生計のため陶器の絵などを描いた。明治十七年第二回共進会に出品した彼の作品は最劣等の三等賞に入った。しかしこの作品がフェノロサに認められ、岡倉天心と知り東京美術学校創立に加わったが、開校前三か月で不如意な生計の中に病没した。描きかけの「悲母観音」が絶筆であった。

寛斎は芳崖にくらべて円寂型である。文化十一年秋に生まれ、京都に出て森徹山に学び、のち養子となった、江戸時代の円山派四糸派の画風を明治時代に伝えた。代表作「松間瀑布」。だが寛斎も幕末には一時期、京都にあって国事に奔走したといわれている。

明治中期まで大庭学遷（明治三十二年八〇歳没）が活躍したが、晩年は故郷に帰り、閑日月を楽しんだ。

高島北海（昭和六年八二歳没）は嘉永三年秋に生まれた。天性画を好んだが、地質地形の学に志し、明治初年但馬生野鉦山に至り仏人コニエーに従って学んだ。その後官界に入り仏国に留学して林



松林 桂月

学、地質学を研究し、帰国後農商務省の山林技師となったが、明治三十六年官を辞して画業に専念した。文展審査委員。日本美術協会委員として画壇にあらわれ、南北派を折衷ししゃくした山水画は、稜々たる風格をもって、時流にぬきん出たものがあつた。彼は伊藤博文について韓国に渡っている。米

国にも行き、中国には二回行っている。そうした外国の旅も深山幽谷を探勝している。山口県内で秋吉台の大理石を発見し、長門峡の開発に尽力している。円寂型である。

大正以来活躍した画家には四条派、狩野派を学んだ中倉玉翠（明治七年生）、南宗画の山水から花鳥に向って新天地を拓いた松尾晚翠（明治十年生、仙崎）があったが、南宗画の松林桂月（昭和三十三年八七歳没）と田中柏陰（昭和九年六十三歳没）が著名である。桂月は秋に生まれ二十歳で上京。野口幽谷の門に入り、研鑽して新機軸を出し、「春溪図」で画壇に地位を獲得。芸術院会員となり、昭和三十三年文化勲章を受けられた。

柏陰は静岡県人で防府の田中家に入った人である。田能村直入の門下で、南宗画の巨匠と仰がれた。他に山口出身の女流画家として兼重暗香（昭和二十一年七四歳没）があった。現役では宇部出身の西野新州がいる。

以上の画家の生涯の周辺には、常に、県出身の政治家が、何等かの形影を帯びてテラついていることが見過ごせない。これと対蹠的な存在に田布施町出身の小野具定がいる。現代社会のひずみをえぐり出し、荒廃した漁村風景を描きつづける現代日本画壇の特異な存在として注目を浴びている。

洋画家としては山口出身の永地秀太（昭和十七年六九歳没）、岩国出身の桑重儀一（昭和十九年八八歳没）があった。現役では秋穂出身で尾道在住の小林和作、三隅町の香月泰男につづいて、若手では中本達也、宮崎進、田中稔之、山本文彦等が中央で活躍しており、彫刻では宇部在住の河内山賢作、東京在住の長嶺武四郎、特異な存

在では山口在住の田中米吉がいる。

音楽と宗教

明治以後、風土が音楽を敬遠する雰囲気を持っていたので、その方面の人物が極めて少ない。このことは明治からの日本の政治に、義太夫や浪曲のさわりを貴ぶ風潮があったこともあわせて考えられる。また日本軍国主義が陸軍を主流として、この風土に陸軍軍人が多数輩出して、音楽に向う若い芽を環境的にはぐくまなかったのかも知れない。それからあらぬか、岩国出身の田中穂積（明治三十七年四八歳没）の名をあげるのみである。田中が陸軍でなく海軍楽長であったことも象徴的である。彼の作曲では「美しき天然」が人口に膾炙され、「勇敢なる水兵」も国民的に親しまれた。しかしその田中にしても郷土では永い間無視されていた。大正十四年になってやっと岩国で追悼音楽演奏会が開かれ、昭和二十九年誕生地岩国市横山に記念碑が建立された。

だが県人に音楽への求心性がなかったとはいえない。音楽研究家として、兼常清佐、森本寛丹が出ている。森本は「カレワラ」の訳者としてフィンランド国家の文化勲章を授賞されている。

現在の県音楽のレベルアップに尽した人としては宇部サイコン社長徳田寛夫の終戦前後からの絶えざる指導、後援があつた大きい。戦前戦後にかけて、山口師範、山大教育学部に教鞭をとり、県内の小中学校の音楽担当教師の育成指導を通じて果たした故鶴岡義雄の功績が高く評価されている。また現山口芸術短大の石井洋之助の高校教師としての、永年にわたる音楽指導も見捨てがたい。吹奏

楽育成の山大教授森豊幸、作曲の岡田昌夫の地道な指導は音楽文化の向上に貢献した。その他、現役で活躍している楽人としては、下関出身の岡村梨江と山口出身の宏中孝、ピアノ、バイオリニストの三木好子、石井志都子の活躍がめざましい。志都子は洋之助の令嬢。他に山口女子短大の響部文江があり、箏曲に宇部出身の伊藤敦子がいるが、日本の古典的な音楽を、現代的感覚でとらえて表現する特異な奏者として、米国でも好評を博している。また合唱の福岡淳・宮崎清子そして「ママさんコーラス」の指導者岡田隆の努力も音楽の家庭化という点で見逃せない。

洋舞では宇部の石井好美と山口の加藤耀子が県下を二つの流派に分けて健闘している。

明治の山口県の宗教家としては、維新発祥の地に起こった廃仏毀釈の運動の中で、かつて尊王攘夷に挺身した身が今度は護仏に傾注しなければならなくなった仏教界に、傑僧が現れた。大洲鉄然（明治三十五年六八歳没）と島地黙雷（明治四十四年七四歳没）である。

他方、ザヴィエルの故地に新しくキリスト教に目覚めた人も現われた。長州征伐の時、小瀬川口に向った長州軍に沢山馬之進という一人の少年鼓手がいた。これが山口出身の沢山保羅（明治二十年三六歳没）である。維新後の明治五年に官吏を志望して神戸に赴き米人の宣教師について学び、ついで渡米したが、日本におけるキリスト教伝導に生涯を捧げることを決意して、使徒パウロの名を慕って改名した。帰朝後大阪に浪華教会を創立し、新島襄等と共に明治初期の教界開拓者として仰がれ、梅花女学校を創設して、宗教と教育に尽精したが、病と貧困の不遇裡に病没した。

している。

文学

保羅の同郷に成瀬仁蔵（大正九年六一歳没）と服部章蔵がいた。章蔵は維新後海軍兵学校の教授となっていたが、熱烈なキリスト教信者となり、明治十三年郷里に帰り、生涯を県内の布教伝導に捧げた。

後年日本女子大学を創設した成瀬仁蔵は保羅より七歳年少であった。明治九年山口県教員養成所を卒業した校長であったが、帰郷した沢山保羅に会い、たちまち入信し、大阪へ同行し保羅の援け人となったことから、後年の、「寄宿舎生活に訓育の重点をおく女子教育」者としての出発をした。

ザヴィエルを憧れて山口に来て、天主教の伝導に従事したフランス人にピリオン神父があった。彼はリヨンに生まれ二十三歳で祖国を出発。明治元年長崎に渡来。神戸、京都と布教して、二十三年に山口来た。晩年、奈良に転じ、昭和七年九十一歳で没した。著書に「鮮血遺書」「日本宣教五十年」がある。

越後の弥彦山の麓に生まれた本間俊平は、建築技術をもって宮内省の役人になっていたが、明治三十五年、感じるところがあつて職をなげうち秋芳町に来た。そこで大理石を採掘して美術建築の彫刻を始めた。人生に絶望、挫折した多くの人を集めて、共に働きながら、彼等のため、時には命をかけた友となり、師となった。秋芳の聖者と呼ばれている。

戦後、北村サヨによって、熊毛郡田布施町に創始された新興宗教「天照皇大神官教」である。この教えは終戦虚脱の国民心理にマッチし、たちまち内外に多数の信者を獲得した。いわゆる「踊る神様」として、全国的に有名になり、ハワイその他海外に教勢を伸ば

山口県人ではないが、その学齢期を維新後の山口県の風土に送った国木田独歩（明治四十一年三七歳没）の生涯を見ると、吉田松陰や高杉晋作にどこか通じる、あわたたしく、時にせっかちで、自己の一身をかえりみる余裕とない、それでいて時代を先取りする進取の気性がうかがえる。独歩の本来の個性が、風土の環境がしからしめたものか。

独歩はその短い生涯に、新しい詩を興し、従軍によりルポルタージュのジャンルを開いた。更に自然主義文学の先駆的作品を書き、それに思想的なエスプリを導入したリアリズム文学を創り出そうとした。すなわち明治文学の開拓者の一人として仰がれる所以である。

独歩没年のあとさきの頃から二人の文学者が現れた。明治二十二年生まれの吉田常夏（昭和六年四二歳没）と新南陽出身の青木健作である。



国木田 独歩

常夏は十四歳で河井醉茗にみとめられ、新進詩人として活躍したが、明治四十二年来、ジャーナリストに身を転じ、大正十二年関東大震災後父の郷里に帰り、翌十三年関

門日新聞の編集長に迎えられたが、昭和二年、脳出血に倒れ、生計に苦しむ状態となった。この時友人知己が彼に「燭台」という雑誌編集の仕事を与え、この雑誌が彼の晩年の事業となった。「燭台」は今日にいたるまで、山口県の地方誌で、これをしのぐものがないほどの豪放なもので、その読者は北九州におよび、火野葦平の初期の作品なども発表された。

青木健作は「帝國文学」によって登場した作家で、生地の瀬戸内海、海濱の海や山を舞台に、かすりの織物を手織るようにな作一作を書きつづけた。自己経験、自己観察の範囲内の事象のみを終始黙々と書いて、夏目漱石から注目を受けた。その作品集は大正二年から発行している。学校の教壇に立ちながら、文学執筆をつづけ、昭和三年に春陽堂から発行した「青木健作短篇集」に彼の主軸的な作品を収録した。その後昭和十九年に随筆「椎の実」を刊行している。目立たない地味な作家である。国文学者井本巖は彼の長男で、エニ、商三の弟があるそうである。静かな彼が士農工商の士をさけて、おそらく彼が作家として出発したところに、その長男に農一と命名していることは、彼がシンには何かを持っていたことがうかがえる。



山頭火 種田

青木健作とともに山口中学を明治三十四年に卒業した生徒の中に防府市の大地主の子、種田正一がいた。二人の郷里は余



中也 中原

身の体を実験台上にかけた姿勢、およそみやびとか洒落とかとは遠い余裕のない土着の人生である。

磯多より十年遅れて中原中也（昭和十二年三〇歳没）が山口に生まれている。中也もまた生存中は一部の人にのみ囁目され、その平担でない人生行路に、時にすばらしい光線と良彩を落した詩人であった。死後に問題を多く残している。

風土と女流作家は結縁が強い。男ならお槍かついでお仲間になって……の伝統ではなからうが、岩国出身の宇野千代（明治三十年生）と島田準子。それに下関で明治三十六年か七年の十二月三十一日に生まれたという林芙美子は「私は本当は五月に生れたのだそうです」とか「私が生れたのはその下関の町である」などとその作品に書いてある。吉屋信子の血にも風土の地があるという噂がある。宇部在住の上田芳江もいる。どの女流もなりふり構わない人生を書くのが風土の特徴なのだろうか。

鷗外と同じ津和野で生まれ山口中学を出た伊藤佐喜雄がいた。生

り遠くない。正一寸なわち山頭火はその生涯を一部の知友にのみ愛され、護られ、囁目された、行乞漂泊の俳人であった。昭和十五年秋、四国松山で五十八年の生涯を閉じた。死後県内五か所に句碑が建立され、三十年も経った今日、彼の文が国立大学の入試問題に出題され、週間誌の漫画に彼の生涯が描かれ、春陽堂から「定本山頭火全集」七巻が刊行中である。脱社会ムードでテレビのコーナーまで彼を偲ばす雲水姿が登場しているありさまである。

山頭火の生地から北の山なみを越えた山口市の奥に、その中流地主の子として生まれた喜村磯多（昭和八年三十七歳没）がいた。無に帰するため、酒と水を受した山頭火に對し、自己の魂への執着を怨念のように書きつづけて果てた磯多の業苦の人生は、不思議に一脈相通うものをもっている。

「ゆきゆき倒れるまでの道の草」とつぶやき、「分け入っても分け入っても青い山」とうたった山頭火が、マラソンのランナーであるなら、彼よりひとまわり山口中学の後輩であった磯多は、短距離ランナーだった。しかし彼は一筋の道を、下ばかり見て、こせこせと走った。大正以後の日本の心境小説、身辺小説、私小説といわれる系譜の中で、志賀直哉と葛西善蔵が従来両極視されていたが、最近では直哉と磯多が対比されはじめた。直哉と善蔵の人生態度は、やはり前方を向いて真直ぐに歩いている。他の宇野浩二、尾崎一雄、上林曉にしてもほとんど素直に歩いている。その中で磯多の歩き方だけは、ひねこびている。それが直哉と対比される主な要因だろうか。磯多のいんぎんさ、我執の強さの中には、風土の地主百姓の血が流れている。山口県の明治初年の土地放出は、大地主や極貧

後間もなく父の家を出て新劇女優として名を得た、実の母を慕うて追っかける青年を「海峽行」に描いて、第一回井川賞候補になった、日本浪漫派の作家である。

同じ山口線沿線の長門峡に近い地に戦争作家として現れ、児童文学者として業績を終えた氏原大作（昭和三十一年五二歳没）がいた。彼もまた生みの母に生別し、母を恋う人間の哀しさを胸奥に秘めた作家であった。風土の現役の作家群には前記の古川、富永以外に井上孝、長谷川修、赤江瀑、豊田行二と下関関係者が多い。歌人としては明治二十二年に兄赤松照曜の学校を援助するために徳山に来て、三か年間その女学校の教壇に立ち、地域の作歌熱をかきた与謝野鉄幹がいた。その他としては生田藤介が有名であった。昭和に入ってから、故岩松文彌が光り、現役に小島経彦、竹内八郎、橋本武子、友広保一、前田喜代人、山中鉄三の郷土歌人がいる。俳人には先に土居南園城、久保白船、兼崎地権孫、有馬草々子、水田のぶほ、西尾其桃があり、現役として、西尾桃支、山崎青鐘、大中青塔子など多数の人が積極的に活動している。

詩人としては、長門市出身の児玉花外（昭和十八年六九歳没）がいた。明治大学の校歌の作詩者として名が残っているが、彼が明治三十年代の社会主義詩人グループの中心人物であったことは忘れられ勝ちである。晩年は養老院で送り不遇であった。他に、昭和初期のモダニズム詩人の上田敏雄があり、郷土詩人としては「こだま」の和田健、「駱駝」の磯村秀雄が活動している。

最後になったが明治から大正にかけて、日本の川柳の革新を行なうため活躍した萩出身の井上剣花坊（昭和九年六四歳没）の名をあげておきたい。（山口県立豊浦養護学校長）

人物を中心とした

文化郷土史

— 徳 島 県 —



藤 井 喬

一 風土と県民性

十郎兵衛と阿波踊りと鳴門の渦潮とを以て聞こえる本県は、中央に四国山脈が東西に走り、中に四国山地を作り、その中に祖谷・木頭などの別天地を抱き、北には讃岐山脈があり、その間に大河吉野川が蜿蜒数十里を東流して海に注ぎ、流域に広大な平野を形成する。他に、四国山脈中から流れ出る勝浦、那賀、海部の諸川もあり、改修工事が今のように整備されない以前は、河川が氾濫し、流路の変更や田畑の荒廢により、沿岸住民は泣かされた。四国山脈の主峰剣山は、高さ二千米に近く、それ故南方海岸地帯は比較的温暖であるが、吉野川流域は冬は寒冷で、積雪を見るのも稀ではない。それで徳島を中心に、南方、北方に県が二分され、自然、この南北両地方は、人情と風習に差があり、南方は温和、北方は、気性が激しいといわれる。

その昔、吉野川沿岸の板野、阿波、麻植の地に、天富命あまのとみのみことの率いる忌部族が来て、粟と麻とを植え、郡名にその名残りを止め、その頃、北方を粟の国、南方を長の国と称した。奈良、平安時代は国司の来任があり平穩、後豪族が所々に割拠して城を構え、南北朝時代には、平野部武士は北朝につき、山岳武士は南朝に尽し、軍功状を貰っている。細川、三好氏四国を制覇した時代を経て、土佐の長曾我部元親の侵攻があり、阿波武士は中富川の合戦に脆くも敗北を喫し、後豊臣秀吉の長曾我部征伐に戦功を立てた三河武士蜂須賀家政が播州龍野から阿波に転封、二代至鎮しちしんは関ヶ原の戦功で、徳川氏に

より淡路六万石を加増され、二十五万石の大名となった、初代家政は入国すると、祖谷などの豪族を鎮撫し、渭の津（徳島）に新しく城を築き、城下町を造り、藩の制度を確立すると共に、吉野川流域の沃野に藍を植えさせ、徳島や撫養の海浜に塩田を開かせ、十五代三百年に亘る藩体制の基礎を固めた。

このような本県の自然環境と歴史的な伝統により、培われた県民性は保守的傾向が強く、事大主義的であり、数理に長じ、打算的であるとの評もあり、史上に異彩を放つ人物はあまり出ていないが、学問、文学、芸術などの分野では、中央に進出して活躍した人物が多くあり、本県の文化史は又それなりに特色がある。

二 宗教、教育界の人々

キリスト教的立場から社会運動に尽した人に、著名な賀川豊彦（明治二一～昭和三五）がある。鳴門市大麻町の人。父の神戸在住時代に神戸市で生まれ、後徳島に帰り、ローガン牧師により洗礼を受け、明治学院、神戸神学校を出た。後米国に渡り、



賀川豊彦

プリストン神学校に学び、帰国後神戸市の新川の貧民窟に住み伝道に従事。労働運動、農民運動に挺身、その時の体験記「死線を越えて」はベストセラーとなった。

た。震災後東京に移り、キリスト教産業青年会を起こした後、大阪に帰り、大戦後は大衆伝道や平和運動に努力し、七十三歳で歿した。「貧民心理の研究」など多数の著がある。

仏教界では、真言宗に高僧を多く出した。佐伯旭雅（文政二～明治二四）は、三好郡三野町の人。旧姓は内田氏。早く仏門に入り、京都に出て、仏教学を究めた。安政五年普通寺の住職となり、弘法大師の生家佐伯氏を継いだ。維新後、廃仏論の起きた際、存続に奔走し、明治九年泉涌寺、小野随心院などの門跡となり、大僧正に進んだ。泉智等（嘉永二～昭和三）は麻植郡鴨島町の人。十二歳で仏門に入り、大僧正となり、仁和寺門跡、高野山派管長、金剛峰寺座主を経て、三派合同古義真言宗管長となった。物外と号し、詩書画をよくした。又徳島市の人小川光義（嘉永六～昭和三）は晩年大覚寺門跡、大僧正となり、小松島市立江寺住職野琳真（明治一二～昭和四三）は那賀郡那賀川町の人、昭和二十七年金剛峰寺座主高野派管長となった、天台宗の碩学上田照遍（文政一～明治四〇）は徳島市の人。河内の延命寺の住職となり、大僧正に進んだ。学識が卓絶し、天台宗の第一人者といわれ、著書百余部がある。

儒仏二道を折衷し、修正講社の別派管長となった新田邦光（文政一二～明治三五）は、美馬郡脇町江原の人。漢学、国学、武芸を学び、経世に志があり、海防を論じ、藩主、朝廷に建策した。「教道大意」「軍備経略」などの著がある。

明治二十三年十月、時の文部大臣として教育勅語を頒布した芳川顕正（天保一二～大正九）は、麻植郡山川町川田の人。医師を志

し、長崎に行き、伊藤博文に英語を教えた縁で引き立てられ、後年伯爵に昇り、枢密院副議長となった。教育界には岡本斯文（天保一四～大正八）があり、徳島市の人。那波鶴峰に学び、上京して安井息軒、林鶴梁に教えを受け、帰国して徳島師範学校などの校長を勤め、功により藍綬褒章を受けた。又儒学に長じ、南海の儒宗と崇められた。女婿岡本対南（明治三～昭和三〇）も大阪の藤沢南岳に学び、長年徳島中学校に教え、文部大臣の表彰を受けた。退官後は逍遙会を作り、詩文の指導に尽した。

東大史学科を出て、大阪府立図書館長となった今井貫一（明治三～昭和一五）は那賀郡羽の浦町の出身。県立光慶図書館長として、長年本県の社会教育に尽した坂本章三（明治九～昭和二一）は徳島市の人。館長就任以来図書館の経営に腐心し、光説会、精説会を作って読書法を指導し、蜂須賀家の阿波国文庫を光慶図書館に移し、整理して活用を計り、ポルトガルの文豪モラエスの遺品、遺著を集めてモラエス文庫を館内に作った。又童話会吟詠会、阿波郷土会を作り、郷土文化の振興にも貢献する所大であった。盲啞教育の父五宝翁太郎（文久三～昭和一一）は徳島市の人。徳島師範学校を出て、盲啞教育に志し、明治三十四年独力で徳島盲啞学校を起こし、後にそれを師範学校の附属小学校の学級に組み入れ、一訓導となり教えた。後これを母体として、県立盲啞学校が設立された際、選ばれて初代校長となった。傍ら盲啞啞保護院、徳島盲人会、徳島鍼灸会を起こし、盲啞啞教育と事業に、その一生を捧げた。

三 言論、報道界の人々

明治初年、自由民権思想を鼓吹した土佐の立志社に刺激され、本県でも、自助社、後に普通社ができ、これから出た新聞人に伊坂柳処（弘化四～明治一四）益田永武（嘉永三～明治三六）吉田喜六（万延元～明治二四）らがある。高木貞衡（安政六～昭和一五）は徳島市の人。藩士真蔵の長子。明治初年、徳島の自助社社員となり活躍したが、後大阪に出て、大阪日報の記者となり、後広告取次業万年社を創立した。竹亭福良虎雄（明治三～昭和一六）は徳島市の人。徳島中学校を出て、明治二十六年上京、報知新聞に入り、後大阪毎日にて転じて、二十余年勤め、内田通信部長から編集顧問となり、後大阪新聞の主幹となった。北海道実業界の重鎮阿部興人の養子阿部宇之八（文久元～大一一三）は徳島市の人。明治五年大阪新報に入り、大阪毎朝などを経て渡道、明治二十年札幌の北海道新聞を主宰し、二十一年社長となり、他紙を併合して北海タイムスとし、理事となった山根文雄（明治一五～昭和一一）は麻植郡川島町学の人。明治四十三年神戸新聞に入り、その後京都新聞主幹、昭和八年京都日々新聞社長となった。大正十三年、我が国放送事業開始の際、大阪放送局常務理事となり、十五年日本放送協会理事となった。福井市出身で、徳島毎日新聞の主筆となり、多年本県の言論、文化に尽した人に井上一（明治四～昭和二二）がある。上京して大洲学会に学び、徳島毎日新聞に迎えられ、後主筆、編集局長となった。戦時中新聞の統合により退社。羽城と号し、漢詩、和歌をよくし、「宜南峰」

などの著がある。前川静夫（明治三〇～昭和四四）は広島県出身。東京外語を中退し、初め国民新聞に入り、神戸新聞等を経て読売新聞に転じ、昭和十九年統合後の徳島新聞の主筆、編集局長を経て、昭和二十一年社長となり、今日の徳島新聞に発展させた。

四 学術界の人々

井上十吉（文久二～昭和四）は徳島市の人。自助社の発起者高格の二男。明治六年十二歳で、主家峰須賀氏より英国に留学を命ぜられ、ラグビー校、鉱山専門学校に学んだ。明治十五年帰朝、外務省翻訳官となり、後諸国の日本公使館に勤め、退官後多くの英語辞典の編纂や英語通信教育に当たり、英文により日本事情を外国に紹介した。井上勤（嘉永三～昭和三）は徳島市の人。幕末七歳で、徳島に來たドンクル・クルチウスに英語を学び、鹿兒島、長崎に留学して、英仏独露及びエスペラントの諸語に熟達、電信寮を始め、各省に歴任、役所の仕事の傍ら、西洋文学を次々に翻訳、出版した。「女権論」「西洋珍説人肉質入裁判」など多数の訳書がある。

国語、国文学では、文法学者として知られた谷千生（天保三～明治二二）は徳島市の人。元藩士。数理的理論的頭脳の持主で、幕末湯浅春緒に和歌、国文学を学び、明治となり、徳島師範学校の教員となり、著述を刊行した。後退職上京して、学究生活に入ろうとし、上京の途次、大阪で赤痢に罹り、帰国療養したが病後。「言語構造式」「詞の組立」などがある。林森太郎（明治五～昭和一二）は徳島市の人。東大国文科を出て、三高教授を久しく勤め、「日本文学

史」などの著を残した。阿南市樺泊町出身の古川左京（明治二二～昭和四五）は神宮皇学館を出て、最後に日光東照宮宮司となった。人類学、考古学、歴史学では、多数の人材を出した。徳島市の人小杉楓郁（天保五～明治四三）は池辺真樸、本居内述に国学、和歌を学び、明治六年上京して教務省に勤めた。有職故実、正倉院文書に通曉、推薦で東大から学位を受け後に帝室博物館鑑査員、東京美術学校教授、東大講師、宮内省御歌所参候となった。「阿波国徴古雜抄」など多数の著がある。喜田貞吉（明治四～昭和一二）は小松島市柳瀬町の人。東大史学科と大学院を出て、文部省に入り、国定教科書編集官となり、後学位を受けたが、明治四十四年、国史の教科中の南北朝の記事が帝国議會で問題となり、責を負うて辞任。後京大講師から教授となったが退職。その後東大講師となり仙台に行き、奥羽、蝦夷などの研究を行った。我が国古代史の權威で、「平城京の研究」「南北朝論」など多数の著がある。人類学の鳥居龍蔵（明治三～昭和二八）は徳島市の人。小学校中退後独学で人類学の研究に入り、二十歳で上京、東



鳥居龍蔵

大の人類学教室の助手となり、坪井正五郎博士の指導を受け、同大学の講師に進んだ。明治三十九年蒙古王府の学堂の教師に赴任、蒙古、満州、朝鮮を調査した。大正十年学位を受け、



岡本章造 顕彰碑

治二七～昭和四八）一言松二（明治三〇～昭和四七）らがある。

漢学では、有井進斎（天保元年～明治二二）は岩本警庵に学び、藩校長久館の助教となったが、明治となり、上京、東京師範学校に教えた。軍人勅諭の起草者として知られ、多数の著がある。儒家で樺太開拓の急務を力説した岡本章造（天保一〇～明治三七）は美馬郡穴吹町三谷の人。藤川三溪や藤沢南岳の塾に学び、四方の士と交わり、逸早く北辺に注目し、文久三年函館に行き、後樺太に渡り、シルトタンナイに至り、標識を立てた。後二度も樺太に行き、黒龍江をさかのぼった。明治元年太政官に出頭、大久保利通に北辺の事情を述べ、樺太全島の事務を委任され、画策する所があったが、後政府の方針が樺太放棄に変わったので、その後は教育と著述に専念して、六十六歳で病歿した。「北蝦夷新志」など五十二部の著を残し、阿波の偉人とうたわれた。

翌年東大助教に進んだが、辞任、昭和三年上智大学の文学部長となった。十四年北京の燕京大学に招かれ、一家を挙げ赴任、満州、蒙古の研究に従った。戦後二十六年退職、東京に帰り、八十四歳で歿した。その晩年、徳島市はこの老学者に名誉市民の称号を贈り慰め、その歿後、徳島県は鳴門市に鳥居記念館を設立し、博士の遺品、遺著を収め、その一部を公開している。我が国中世史を専攻した藤直幹（明治三六～昭和四〇）は徳島市出身の文学博士。京大史学科を出て、阪大教授となり、「中世文化研究」などがある。東洋史学者藤田豊八（明治二～昭和四）は美馬郡美馬町の人。東大漢学科を出て、明治三十年上海に行き、東文学社教授となり、在支十六年、帰国して、大正七年学位を受け、早大教授、東大教授を経て、昭和三年台北大学文政学部長となった。「東西交渉史の研究」など多数の著がある。東北大名舊教授菅我部静雄も東洋史家豊八の甥に当たる。那波利貞（明治二三～昭和四五）は徳島市の人。幕末の儒家那波鶴峰の孫。京大文科を出て、唐代史を専攻、三高教授から京大教授に進んだ。その他、考古学、上代史の研究家で、「耶馬台国の研究」を残した笠井新也（明治一七～昭和三一）は美馬郡脇町の人。古文書、書誌学に精通した猪熊信男（明治一五～昭和二八）の峰須賀意心の子で、香川県の猪熊家を継いだ。聖徳太子の研究で注目された黒上正一郎（明治三三～昭和五）は上京活躍したが、三十一歳で惜しくも病歿した。なお郷土史研究で業績を残した人に神河庚蔵（嘉永三～大正一五）田所眉東（明治五～昭和一六）島田泉山（明治七～昭和二二）森敬介（明治二一～昭和二三）飯田義資（明

漢詩人大江敬香（安政四～大正五）は官吏を退職後、漢詩の研究と制作に没頭し、詩誌を刊行して漢詩の鼓吹に努め、有名な「桜花詞」の詩は彼の作にかかる。本田種竹（文久二～明治四〇）は徳島市の人。東京に出て伊藤聴秋、成島柳北らと交わり、全国を吟遊し、明治三十九年「自然吟社」を創立、漢詩を世に広めた。また橋

本晩翠(文化九〇明治二〇)は淡路の人。藩の儒官となり、詩をよくし、柴野碧海以後晩翠あるのみといわれたほど、優れた詩人であった。美馬郡木屋平村の出身山田貢郁(安政五〇昭和一六)も東京に出て、国学院大学などに教え、明治天皇紀編纂に携わった学者で、詩文に秀れていた。

五 文学界の人々

女流詩人生田花世(明治二一〇昭和四五)は板野郡上板町泉谷の人。本名は西崎花世。文学に志し、小学校教員を退職して上京、河井醉茗、水野葉舟らに詩文を学び、「青踏」「女人藝術」などで活躍、「青踏」で知り合った生田春月と結婚したが、昭和初年春月が瀬戸内海に身を投じた後も、詩、小説、隨筆を各誌に発表、戦後は生田源氏の会を起し、源氏物語を婦人に講じた。詩集「春の土」などがある。「オリビック讃歌」を作詞した詩人野上彰(明治四二〇昭和四二)は徳島市の人。本名は藤本登。京大法学部に進んだが、退学。困窮の手段で、上京して「困窮春秋」の編集長となり、川端康成らの知遇を得て、文壇に出た。戦後は藝術前衛運動「火の会」を起し、詩、小説、ドラマを制作した。「野上彰詩集」など多数の著がある。三好郡井川町の人内田彌八(万延元年〇明治二四)は、上京して慶応義塾に入り、英学を学び、塾長福沢諭吉に愛された。在学中に書いた「義経再興記」は、義経が衣川から蝦夷地を経て蒙古に入り、ジンギスカンとなったと述べたもので、行文が流麗であったのと時好に投じ、ベストセラーとなり、数千金を得て、

中国・印度・暹羅・濠州を巡り、病を得て帰国、療養に努めたが、三十二歳で歿した。恩師諭吉は彌八の死を悼み、その碑文に「不幸短命にして逝く。その人の為に悲しむのみならず、国の為に之を惜しむ。」と記した。鳴門市高島の出身貴司山治(明治三二〇昭和四八)は本名は伊藤好市。大阪新報に入り、処女作「新恋愛行」が同紙の懸賞小説に入選、上京して作家生活に入り、プロレタリア大衆小説家となった。晩年は文学誌「暖流」を発刊、郷土の後進作家の育成に努めた。「新篇維新前夜」「ゴーストアップ」などがある。佃実夫は阿南市新野町の人。本県から横浜市に転出して歴史小説家として活躍、既に「わがモラエス伝」「阿波国自由党始末記」などの著がある。推理小説家の海野十三(明治三〇〇昭和二四)は徳島市の人。本名は佐野昌一。早大電氣科を出て、通信省電氣試験場に勤めた。昭和三年「電氣風呂怪死事件」の処女作で文壇に出、江戸川乱歩、大下宇陀児らと共に、科学、探偵、推理小説家の先駆となった。「振動魔」「浮囚」などがある。評論家新居格(明治二一〇昭和二六)は鳴門市大津町の人。東大法科を出て、読売、東京朝日などの記者を経て東京毎夕の文芸部長となり、後社会評論家として独立、文芸、思想など幅広い評論を試み、高く評価された。戦後一年間杉並区長を勤めた。「左傾思想」「区長日記」など多数の著がある。佐古純一郎は名西郡神山町の産。日本大学宗教科を出て、日本聖書神学校に学んだ。昭和十六年「文藝」の懸賞評論に入選、評論家となったキリスト教的立場から宗教と文学を論じ、「純粹の探求」などがある。小説家富士正晴は三好郡山城町の人。三高を中退し、



晩年のモラエス

モラエス(一八五四〇一九二九)がある。ポルトガルのリスボンに生まれ、海軍兵学校を出て、士官となり、その後外交官となった。明治三十一年神戸の同国総領事となり、後辞職した。大正二年七月、亡妻ヨネの郷里徳島に來り住み、ヨネの妹の娘斎藤小春を妻とし、文筆生活を送り、徳島の風物により日本を祖国に紹介した、小春の歿後、昭

和四年七月、孤独の生涯を徳島で閉じた。「おヨネと小春」など多数の著がポルトガルで出版されたが、後邦訳され、最近その全集も刊行された。モラエスは徳島の小泉八雲であった。

和歌は次の俳句と同じく、日本に名を知られるほどの人は出ていない。細井菊枝(嘉永三〇大正二)は阿波郡阿波町の人。明治の頃、岩津の淵の畔に枕流亭を結び、詩歌、俳句、絵画、彫刻などの風流生活を送り、歌集「枕流集」を残した。与謝野鉄幹・晶子の新詩社の歌風が全国を風びした頃、歌誌「明星」に参加した人に、美馬郡半田町の逢坂藍水(明治一二〇昭和二四)、徳島市の松永清乱(明治一七〇昭和四七)、鳴門市の吉岡春琴(明治二〇〇大正一四)がある。藍水は医師で、町長や県議となり、短歌から離れたが、清乱は周二の本名に帰り、長く与謝野一家との交遊を保ち、晩年歌集「天地一馬」を残した。春琴は早世したが「吉岡春琴歌集」がある。アララギ派の藤屋嬌一(明治一二〇大正一五)は徳島市の人、万葉調の優れた「藤屋嬌一遺詠集」がある。板野郡上板町高志出身の小西英夫(明治二五〇昭和三〇)は新聞人、潮音派で長く作歌して同人、選者となり、「小西英夫遺歌集」などがある。美馬郡一宇村の西内瀧三郎(明治二〇〇昭和四五)は吾妹派で、歌集「樹に射す光」があり、小野克子(明治二九〇昭和三八)は霸王派で、歌集「鮎となれ」などがあり、同派の古い同人佐沢波絃は大阪市に健在、今も作品を発表している。現在徳島には、「徳島歌人」「徳島短歌」などの歌誌が刊行され、旧新歌人がこれらに拠り、作歌に励んでいる。

俳句では、木太刀派の木下眉城（明治五〇昭和三）は麻植郡美郷村出身で専売局官吏、木太刀の同人、選者となり、「亀の跡」などを残した。美馬郡半田町の杉山虹泉（明治二七昭和四五）は専売局官吏、晩年「俳人吉分大魯」の著がある。石楠派の森邊日（明治二七昭和四三）は同派の幹部となり、句集「泉」がある。ホトトギス派の山尾白兎（明治三四昭和一三）は鳴門市瀬戸町の人。早世したが、小鳴門の海を愛し、秀句を残し、虚子の歳時記に句が載せられた。徳島派の宇山老谷（明治二〇昭和四三）は美馬郡半田町の医師、昭和七年松瀬青々を半田に迎え、句集「桐の花」を残した。現在本県では、句誌「祖谷」「松苗」「航標」「向日葵」などが刊行され、句作に精進する者が多数ある。

六 芸術界の人々

絵画では、日本画の土佐派守住貫魚（文化五〇明治二五）は徳島市の人。十六歳で渡辺広輝に入門、後に江戸に行き、住吉広定に学び、藩の絵師となった。明治十三年大阪に出て、各絵画共進会に出品、入選、後審査員となり、画壇の重鎮となった。二十三年帝室技藝員に選ばれた。野口小瀧（弘化四〇大正六）は名は親子。麻植郡鳴島町出身の



野口小瀧

治十三年大阪に出て、各絵画共進会に出品、入選、後審査員となり、画壇の重鎮となった。二十三年帝室技藝員に選ばれた。野口小瀧（弘化四〇大正六）は名は親子。麻植郡鳴島町出身の

医家松村春岱の女、大阪で生まれた。南画家日根対山に師事し、野口正章に嫁した。後上京、明治六年昭憲皇太后の屏障を置き、明治十五年華族女学校教授、内国勸業博覧会等に出品、受賞した。明治三十五年常宮、周宮両内親王の御用係、後帝室技藝員に選ばれた。子小薫も絵をよくした。広島晃甫（明治二一昭和二六）は徳島市の人。東京美術学校日本画科を出て、大正八年第一回帝展に特選となり、大正三年推薦、昭和二年審査員、昭和十一年文展の審査員となった。那賀郡羽の浦町出身の目下八光は東京芸大教授を長く勤めた日本画家。古墳内壁画の研究を以て知られる。

洋画では、先輩の三宅克己（明治七〇昭和二五）は鳴門市出身。松本民治らに学び、後に米国のエル大学附属美術学校に学んだ。特に水彩画に長じ、帝展の審査員となり、昭和二十五年恩賜賞を受けた。石川真五郎（明治二六昭和四七）は板野郡板野町の人。印象派の画家で一水会員、風景画で知られ、戦後郷里に帰り、郷里の風物を画いた。阿南市大野町出身の清原重以知（明治二二昭和四六）も美校出で光風会員。文展に入選、戦後日展の無鑑査となった。伊原宇三郎に徳島市の人。大正十年美校を出て渡仏、六年間留学、昭和四年帝展に特選となり、後美校助教授を長く勤め、帝展、文展の審査員となり、今も活躍中。

版画の伊上凡骨（明治八〇昭和八）は徳島市の人。上京して、日本橋の木版彫刻師の徒弟となり、明治三十二年頃木版技術で洋刻に応用し、新印刷技術を発明した。「白樺」「明星」の表紙画やカットを彫って有名になった。「凡骨

版画集」がある。

書道の都郷鐸堂（安政五〇昭和一九）は美馬郡一字村の人。小学校教員、校長退職後、八十七歳で東京で歿するまで書道の鼓吹と革新を全国の遊説した。特に草書をよくし、「草訣百韻歌刪修」などがある。

彫刻では、日展鑑査員服部仁郎（明治二八昭和四一）は鳴門市大津町の人。家職の瓦焼の職工より始め、苦学して美校彫刻科を大正十五年卒業。後帝展、文展、日展に特選となり、後鑑査員となった。

阿波人形、操り人形の首は江戸期からの伝統をもち、明治以後の名匠は天狗屋久吉（安政五〇昭和一八）は徳島市国府町の人。本名は吉岡久吉。川島富五郎に師事し、後名人となった。弟子天狗井（明治六〇昭和四四）は、本名は近藤浅吉。近松座、文楽座の座付作者となり、昭和三十七年県の人間文化財となった。

七 芸能界の人々

林鼓浪（明治二〇昭和四〇）は徳島市の人。若年画を森魚淵に学び、青年時代神戸市に出て、映画、演劇に携わり、後帰郷、絵画、芸能、音曲に通じ、徳島の花街で芸妓の指導に当たった。県文化財保護委員に選ばれ、県知事の表彰を受け、徳島市の人間文化財となった。

幾太夫は阿波の伝統的芸術で県立城北高校にこのクラブが出来て

久しい。淡路の三原高校との交歓が行われている。竹本綱恵太夫（明治三六昭和三九）は徳島市国府町の人。二代豊竹上総太夫の門人。昭和三十八年県知事の表彰を受けた。人間国宝となった豊竹若太夫（明治二一昭和四二）は徳島市の人。本名は林英雄。明治三十五年二代豊竹呂太夫に入門、文楽座に入り、精進を重ね、昭和二十六年十世豊竹若太夫を襲名した。命がけの浄瑠璃と称され、昭和四十年勲四等瑞宝章を受けた。

新派劇の俳優山口定雄（文久元〇明治四〇）は徳島市の人。明治二十三年上京、片岡仁右衛門に入門、片岡我若として出発、後川上らの新派劇に加わり、山口定雄と改名、座長となった。喜劇俳優として名を成した曾我廻家五九郎（明治九〇昭和一六）は麻植郡鳴島町の人。本名は武智故平。十四歳で上京して壮士仲間に入り、沢村訥子らを知り、一座に加入。後に大阪の曾我廻家五郎、十郎の喜劇一座に投じたが、明治四十三年同志と東京に奔り、浅草の金龍館に抛り、「復活」などに出演、以後浅草を根城として、諧謔を以て社会悪を諷刺し、観客を笑わせた。

（徳島文理大学教授）

人物を中心とした

文化郷土史

—香川県—

松浦正一



はじめに

香川県は四国の東北部にあり、瀬戸内海に面していて、中国や朝鮮の古代文化が、瀬戸内海を通過してわが国の中心地近畿地方に伝わったのを早く受け入れた所で、四国地方では古墳や上代寺院跡などが、最も多い地方である。

また朝鮮半島の文化を、山陰地方から岡山県を経て、受け入れている。中世以後も南海道では、政治経済文化などが、近畿地方についてすぐれていた地方の一つであった。近世江戸時代には、藩主松平家が幕府の親藩として、江戸文化を早く伝えたほか、讃岐三白といわれた、米・塩・綿（後には砂糖）の特産物があり、経済的にもすぐれていたもので、裕福な藩であり、明治時代に入っても、漆芸彫刻などの独特の文化を生んだ県であった。本稿では、香川県の文化の中心ともいえる美術工芸に絞って紹介することにする。

讃岐漆器と玉楮象谷

讃岐漆器の発展は江戸時代の後期に、高松に玉楮象谷^{たまきじやうこく}が出て、藩主松平家のために、高級な漆器の作成に努力したことに始まり、それが明治時代に入り一時衰えたが、その後復興して一そう進歩し、手工業的な地場産業に発展し、昭和時代には本県の特産品にまで発展した。特に蒔^き留^{りゅう}（和名「キンマ」）、存清^{ぞんせい}（通称「存星」、香川県では存清と書く）など、鎌倉時代から室町時代に中国や東南アジア地

方から輸入されて珍重されていたものが、象谷の苦心によって、彼の地に行かず実物を見ただけで、その技法を会得し作成するようになって以来、次第に発展した。現在では座卓、飾り棚、盆以下小物漆器などにこの技術が使われ、年産額約七十七億円（昭和四十九年度）に達し、地場産業の第七位となっている。

玉椿象谷ははじめ姓は藤川、名は為造と呼び、通称を敬造また正直ともいい、象谷（蔵谷とも書く）と号した人。高松市の郊外香川郡西山崎村（今の高松市西山崎町）に生まれたが、青年のころ高松城下町の外磨屋町の、藤川家の養子となった人である。藤川家は先代から、刀の鞘を塗ることを職業とし、漆を売って



玉 椿 象 谷

山崎町）に生まれたが、青年のころ高松城下町の外磨屋町の、藤川家の養子となった人である。藤川家は先代から、刀の鞘を塗ることを職業とし、漆を売って

象谷は養父について鞘塗りの方法を習い、なお彫刻も練習した。そのほか盆などの日用雑器に花や果実、文字などを彫り、それに漆を塗ることも始めていた。二十五歳の文政十三年ごろ、その名が近郊に知られ、藩主から菊唐草置上げの菓子盆、存清を模した食籠や軸盆などの高級品の御下命があるようになった。天保三年には「讃岐彫」「讃岐塗」の名を許され、その作品に用いる印を藩主から下された。天保六年三十歳のころには、キンマ塗も作るようになり、

帯刀が許され、天保九年には、お目見えを許され、玉椿の姓を賜った。

蒔、鑿とはタイ北部チェンマイを主産地とした漆器で、竹を編んだ素地すなわち籃胎に、漆を何回も塗り、これに模様を線彫りしたうえ、朱漆あるいは色漆を塗りこみ、それを研ぎ模様の部分だけをあらわしたもので中国の沈金の法が地方化した技法である。その名称はタイ語のキンマークから出たもので、この地方では古くからキンマ（こしょう科の常緑蔓性の灌木）の葉で、ビンロウの実に石灰を塗って巻いたものをおかむ風習があって、これをキンマークというところから、これを入れておく漆塗りの容器、さらに同じ手法の漆器もふくめて、キンマと呼ぶようになったものである。存清は中国漆芸の一種で、鎗彩または填漆といい、その名の由来は中国の元時代の彫漆の名工、張成の子張源の婿の名といい、また存星彫に星のようなものがあるので、存星とも呼ばれたという。中国の鎗金（沈金）の法で、文様の輪郭線を描き、その内を色漆で埋め、あるいは文様を彫りくぼめ、色漆を充填してとき出すなど、各種の色漆を使い、はなやかな色彩効果を出した漆芸である。蒔、鑿、存星とも日本の茶人がつけた名である。

玉椿象谷とその子供

象谷は三十四歳の天保十年には、一角（北極海あたりに住むクジラ類の海獣で、雄には二メートル以上に及ぶキバがあり、象牙質な

ので細工物に使われた）で印籠を作り、池に蓮の生えた図を彫り、それに亀やカニ、鳥、昆虫など、九百九十九匹を、ケシ粒ほどの大きさに彫り、藩主に献上した。また四十六歳のときには、堆朱の忘れ貝の香合、四十八歳のときには、堆朱の数箱、安政元年には、キンマの料紙箱・硯箱を作って献上した。（それらは今、重要美術品に認定されている）それらのことで、三人扶持を賜り、父理右衛門にも、苗字・帯刀が許された。このようにして当時、中国や東南アジアから輸入の堆朱・堆黒・キンマ・存清など、高級漆芸品が象谷の苦心によって、わが国で作られるに至ったが、明治二年二月一日象谷は六十四歳で病没した。

象谷には四人の男の子があり、長男理吉は父の名を継ぎ蔵谷と号し家を継いだ。その子倅太は早く卒し家業は断絶した。次男勇造（磐石と号した）三男良吉（雪堂と号した）四男藤造（藤樹と号した）は、中年のころ没し、業を継ぐ子孫がなかった。象谷の弟の舜造（黒斎と号した）は、藤川姓を名乗り、文綺堂といって古新町で、漆器商を営み、その次子新造（蘭斎と号した）は文綺堂を継いだ。新造の弟米造は分家して文賞堂といい、漆器商を営んだが、その家は繁栄しなかった。しかし漆芸作品は特産品となって現在に及んでいる。

明治以後の漆芸と工芸学校

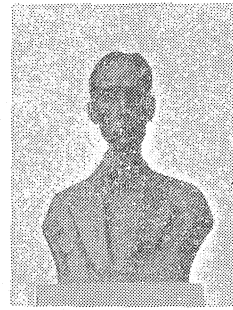
玉椿象谷の子四人は、叔父の舜造（黒斎）その子新造（蘭斎）らと

家業を続けたが、明治維新の政変や乱世で世情は騒然としており、またこれまでの土族が商工業に転じるものが多かったため景気は悪く、漆器の製産も売れ行きも停滞した。しかし明治十五年ごろまでは、何とか従来の仕事を続けた。ところが象谷の三男良吉（雪堂）のほかは、明治十三年から十五年までに病死し、良吉だけが象谷の技法を伝え、重箱・盆など高級品の製作を続けた。明治中期には国内産業が次第に発展し、外国からの新しい文化が伝わるのと同時に、従来の伝統ある漆芸のほかに、旧藩時代からの絵画、彫刻、金工、書道など、美術工芸の作家も次第に養成されるようになった。特に香川県では県立工芸学校が設立され、急速に各方面の技術が発達し名声を博するに至った。

明治二十八年に、富山県から徳久恒徳知事が来任すると、県会で「今後はこれまでのように、一家の生活が何反何畝という、田を持って生活に必要な米を作るだけの時代は過ぎた。四畳半一室でも一家を支えることのできる仕事に、切り換えるべきである。スイスの時計製造は、そのよい例である。今後は手工業、特に工芸に進むべきである。」と説いて、石川県立工芸学校から納富介次郎氏を校長に迎えて工芸学校を創立した。

納富校長は肥前（佐賀県）小城藩士柴田花守の二男で、弘化元年（一八四四）に生まれ、納富家の養子となった人。早く長崎に遊学して南画を学び、明治四年横浜で油絵を学んだ。明治六年ボヘミヤのエルボーゲン製陶所で陶器のことを習い、フランスのセーブル製

陶所でも陶器の研究をし、一八七五年帰国。陶器、銅器、漆器の研究を続けた。徳久知事は香川県に前任前の石川県知事、富山県知事時代に、それぞれの県にも工芸学校を建てている。また九州佐賀県



郎次郎 富納

には納富先生の建てた工芸学校がある。明治四十年に文部省は、美術展覧会、即ち文展を開いたが、それが後に帝展となり、終戦後には文部省を離れ、独立して日展となったが、これら長

い間の展覧会には、前記四工芸学校及び東京美術学校（現在の東京芸術大学）の卒業生がいかに多く活躍したかは驚く程である。

続出した漆芸家

香川県には玉楮象谷の漆芸技術を継いだ人々に、象谷の四人の子と弟舜造（黒斎）のほかに、数多くの名手が出た。

後藤太平（一八八四～一九二三）最も早く、出た人である。太平は高松藩士後藤健太郎の二男で嘉永二年高松に生まれた。明治維新の変革で、士族も職を持たねばならなくなり、象谷塗を学んでそれに変化を求め、独特の技法をもって実用的な朱色を塗った煎茶用具や、松材を用いた彫り抜き盆など、一新機軸を開いた塗物を作り、後藤塗・後藤盆の名で呼ばれるものを作り、現在も子孫がその製作



真如 井磯

試験場に兼務となり、昭和十一年には帝展に特選となった。以後無鑑査出品、招待出品となり、昭和二十八年母校を退職、岡山大学教育学部美術科工芸主任教授となり、香川県漆芸研究所

技術指導員を務めた。昭和三十一年四月重要無形文化財技術保持者に認定され、昭和三十二年には、香川県文化功労者として表彰され、昭和三十六年十一月には、紫綬褒章を受章した。昭和三十九年八月二十三日死去し、従五位勲四等旭日小綬章を授けられた。

香川宗石（一八九一～）本名は勇。明治二十四年十一月高松市福田町に生まれた。十六歳のころから、父に従って風の絵付を手伝い、次いで座卓の下絵を習い、長じて座卓の漆塗りに従事、二十七八歳のころから存清塗の漆芸に専念するようになった。昭和二十八年三月、文化財保護委員会から無形文化財存清漆器の記録作成を依頼され、実物標本の作成と記録を作成した。現在香川県漆芸研究所工芸指導員として、後継者の養成に勤務している。昭和四十一年十一月十二日紫綬褒章を受章、昭和四十五年四月二十九日には勲四等瑞宝章を受章した。

明石朴景（一九一一～）本名は聖一。明治四十四年高松市に生まれ、東京美術学校図案科を卒業、高松工芸研究所長、京都美術大

を続けている。大正十二年六月七十五歳で没した。

石井馨堂（一八七七～一九四四）本名は清治。明治十年高松市北亀井町に生まれた。若いころ父に就いて彫刻を学び、のち象谷の彫りや塗りを研究し、一般大衆用の盆、茶托等を作った。昭和十九年七月六十八歳で没した。門下に音丸耕堂、鎌田稼堂、齊藤淋谷などが出た。

音丸耕堂（一八九八～）本名は芳雄。明治三十一年六月高松市古馬場町に生まれた。大正二年から石井馨堂に師事して、彫刻を学び、堆朱、堆黒をも学んだ。昭和七年以来帝展、文展に出品して入選し、昭和二十七年からは日展審査員となり、昭和三十年依囑出品となった。その間に象谷のキンマ・存清の技法をさらに発展させ、多数の色漆を数十回ないし数百回重ね塗り、それを彫り削って彫漆にまでひろげ、昭和三十年五月国の重要無形文化財技術保持者に認定され、東京に在住活躍している。

磯井如真（一八八三～一九六四）本名は雪枝。明治十六年三月高松市宮脇町に生まれた。紫山高等小学校のころ、絵が好きだったので、玉水塾に通って絵を学び、明治三十六年香川県立工芸学校を卒業した。最初刑務所に勤め囚人の漆塗り作業の指導をしていたが、同年末大阪の山中商会に入社した。中国や東南アジア製の漆器類の修理補修や、陶器や書画類の取り扱いや引きの知識を得た。大正五年帰国し、母校に勤務するかたわら、漆芸作品の製作をはじめた。昭和四年帝展にキンマ手箱を出品初入選、昭和九年香川県工業

学助教授を経て現在高松短期大学教授である。日展で漆芸の特選となり、無鑑査出品依囑、現代美術展の審査員をも勤めた。現在高松市で作家として活躍中である。

大西忠夫（一九一八～）大正七年普通寺市に生まれ、香川県立工芸学校を卒業、その後上京して故堆朱陽成氏に師事して漆芸を研究し、昭和二十一年日展に初出品、昭和三十年には特選、昭和三十一年には無鑑査となり、昭和三十四年から出品依囑となる。その間香川県漆芸研究所の指導員となり、昭和三十六日日展審査員となり日本現代工芸美術展の審査員ともなる。昭和四十五年香川短大教授となり、大型の作品製作に専念し、新機軸の開拓に邁進している。

音丸 寛（一九二七～）音丸耕堂氏の長男で、昭和二年東京で生まれ、文化学院美術科を卒業。昭和三十二年より第一美術展で受賞三回、昭和三十六年以来日本伝統工芸展に入選、昭和四十一年優秀賞受賞、昭和四十二年日本工芸会総裁賞などを受賞した。

音丸 淳（一九二九～）昭和四年音丸耕堂氏の二男として高松市に生まれ、昭和二十七年東京美術学校を卒業。作家として活躍し、昭和三十二年イタリアのブレラ美術大学に留学、日本伝統工芸展では優秀賞を二回受賞した。

彫刻家

小倉右一郎（一八八一～一九六二）明治十四年大川郡白鳥町に生まれ、香川県工芸学校から、東京美術学校に進み、彫刻を学び明治

四十年卒業。大正九年からフランス・イクリア・イギリスなどを訪れて研究。文展の特選審査員をも勤めた。昭和二十一年母校香川県立工芸学校長となり、昭和二十七年まで在任、同校の戦災後の復興に努め、昭和三十一年第一回香川県文化功労者として表彰された。昭和三十七年八十一歳で没した。

藤川勇三（一八八三～一九三五）明治十六年十月高松市古新町に生まれた。漆芸で有名な玉椿象谷の孫である。香川県立工芸学校を卒業。明治四十一年東京美術学校彫刻科を終え、二十六歳で農商務省の海外留学生としてフランスに渡航、ジュリアン研究所で腕を磨き、のちロダンに師事してその助手となるなどして、大正四年に帰国、近代フランス彫刻の精神を正しく伝えた。帰国後二科技藝ができ、製作のかたわら後進の育成に尽くした。昭和十年五月帝國美術院会員にあげられ、わが国近代彫刻史に、大きな足跡を残した。昭和十年六月五十三歳で東京で死去。

國方林三（一八八二～一九六七）明治十六年大川郡寒川町に生まれ、いまだ香川県立工芸学校がなかったので、富山県立工芸学校で学び、卒業後上京して、大正元年まで太平洋画会研究所で、木炭画および塑像を修業、のちに彫刻の本道に進み、明治四十一年第二回文展以後毎回入選、帝展は推薦無鑑査を経て、第四回帝展以後新文展、日展の審査員、無鑑査となった。昭和二十七年以来日展参事となつて出品していた。作品の多くは人体彫刻が主で、新しい洋風彫刻の流れをくみ、写実に出發し、流麗で氣品のある傑作を残した。

昭和三十年ごろ視力障害、のち両眼失明に至り、昭和四十二年十月八十四歳で没した。

矢野誠一（一八八五～一九二九）明治十八年五月観音寺市に生まれ、香川県立工芸学校彫刻科を卒業。新田藤太郎氏と同期で、木彫を多く作つた。四十歳と四十一歳のとき、帝展で連続特選になり、無鑑査となり、その後審査員と進んだが、昭和四年十二月四十四歳で没した。

池田勇八（一八八六～一九六三）明治十九年八月綾歌郡綾南町に生まれ、翠平工業徒弟学校に学んだ後、東京美術学校に進み、同校彫刻科を卒業。二十二歳で文展に初入選、のち無鑑査となり、審査員にも選ばれた。作品は種々の動物の生體に題材を求め、特に馬の作品が多く、また傑作が多い。

新田藤太郎（一八八八～）明治二十一年三豊郡詫間町に生まれ明治四十年香川県立工芸学校を卒業。明治四十五年東京美術学校彫刻科を終え、同校研究科に二年間在学した。明治四十三年美術学校



新田藤太郎

在学中に、文部省美術展覧会（文展）第三回に初入選、その後昭和十八年まで文展、帝展、新文展に毎年入選を続け、その後無鑑査昭和七年審査員となった。昭和二十年東京で戦災にあ

い、郷里香川県に疎開、高松市に在住している。昭和九年以来香川県美術展覧会開催の世話をし後進の養成に努められ、昭和三十四年には香川県文化功労者として表彰され、昭和四十二年には日本彫刻会から功労賞を受け、昭和四十五年勲五等瑞宝章を受章した。現在八十七歳でなお高松市立美術館の専門職員として活躍している。

渡辺弘行（一九〇一～）明治三十四年大川郡志度町に生まれ、昭和二年東京美術学校を卒業。彫刻家として大正十四年帝展に初入選、昭和九年には文展無鑑査となり、昭和二十九年には日展に特選となり、昭和三十一年より依囑出品となっている。現在東京で製作に励んでいる。

横山文夫（一九一六～）大正五年綾歌郡岡田村に生まれる。昭和十四年東京美術学校彫刻科を卒業。同年文展に初入選、昭和三十九年文展に特選となり、昭和四十一年より日展依囑出品となっている。

洋画家

小林万吾（一八七〇～一九四七）明治三年三豊郡詫間町に生まれる。明治二十年愛媛県松山で、堀越喜三郎氏に絵を学び、明治二十一年には上京して、原田直次郎氏に師事し、ついで東京美術学校に入学、フランスから帰国したばかりの黒田清輝氏について洋画を学び、同校卒業後は白馬会の主力作家として画壇に登場した。明治三十六年東京美術学校助教教授となり、その後、官展系作家の重鎮とし

て、文展、帝展に多くの力作を発表したほか、明治四十四年にはドイツ、フランス、イタリヤに三か年間留学、帰国後は東京高等師範

学校教授、東京美術学校教授となり、美術教育に尽くした功績は大い。昭和十六年には帝國芸術院会員を命ぜられたが、昭和二十二年十二月、七十七歳で没した。

柏原寛太郎（一九〇一～）明治三十四年高松市屋島町に生まれ香川県師範学校から東京美術学校に進んだ。昭和三年以来二科展に連続出陳。昭和七、八年と昭和三十九年には、ヨーロッパ諸國に留学。昭和二十年行動美術協会の創立以来、その委員となり、東京で現在も活躍中である。

白川一郎（一九〇八～）明治四十一年仲多度郡琴平町に生まれ昭和七年東京美術学校洋画科を卒業。同校講師となった。昭和十七年文展に特選で、政府賞上げとなり、昭和十八年文展に無鑑査、のち依囑出品となる。外遊三回。昭和二十八年伊勢神宮式年遷宮の記録画を描き、また最後の御前會議の図を描いた。

熊野俊一（一九〇八～）明治四十一年香川郡塩江町に生まれ、正宗得三氏に師事し、昭和九年から二科展に出品し九回入選、同十七年會友となる。終戦後二紀会に出品、同人受賞、昭和三十一年委員となる。昭和三十八年から外遊二回、東京で活躍中である。

猪熊弦一郎（一九〇二～）明治三十五年十二月、高松市中野町に生まれ、丸龜中学校から東京美術学校洋画家に進み、藤島武二画伯に師事した。大正十五年第七回帝展に初入選し、昭和四年から昭

和八年に特選となったが、昭和十年新帝展に反対し、不出品の盟友らと旧帝展派で第二部会を組織し、新製作派協会を作り、新方向に進んだ。昭和十三年外遊しフランス・イタリア・スイスなどを巡り、マチスを訪れるなどして帰国、昭和三十年からアメリカに渡りニューヨークに滞在、新しい方向に活躍している。

金 工 家

北原千鹿（一八八七～一九五二）本名は千禄。明治二十年五月、高松市旅籠町に生まれた。明治三十九年香川県立工芸学校を卒業、



北 原 千 鹿

明治四十四年東京美術学校彫金科を卒業。大正五年から大正十年まで、東京府立工芸学校教諭を勤め、その後新工芸研究会、無人同人として活躍、昭和二年第八回帝展から、手がたい作風で連続特選となり、のち無鑑査、昭和二十一年第一回日展以後は審査員、昭和二十四年から二十六年まで参事となった。晩年は郷里の香川県立工芸学校の講師も勤めた。昭和二十六年十二月六十四歳で高松市で死去した。

鴨幸太郎（一九〇一～一九五七）明治三十四年高松市五番町に生まれ、香川県立工芸学校を卒業。大正十四年東京美術学校金工科を

終え、文展、帝展、日展にそれぞれ入選。昭和二十六年には日展で特選となり、のち無鑑査、ついで招待依頼出品となり、昭和二十七年には審査員となったが、昭和三十二年十一月若くして死去した。鴨政雄（一九〇六～）前記鴨幸郎の令弟で、明治三十九年高松市に生まれた。香川県立工芸学校を卒業、昭和五年東京美術学校を終え、なお研究科に学んだ。昭和五年から昭和二十七年まで、文展・帝展・日展に入選十七回に及んだ。昭和十年には日展で特選となり、以後審査員となった。現在高松市立美術館学芸員を勤めている。後藤学（一九〇七～）明治四十年二月高松市昭和町に生まれ、大正十四年香川県立工芸学校を終え、昭和六年三月、東京美術学校彫金科を卒業。昭和七年以来母校で実習助手、昭和十五年同校教諭となり、昭和三十三年四月、同校々長となる。昭和四十二年十一月同校退職。その間帝展・日展・日本伝統工芸展に出品、奨励賞を受け、特選について無鑑査となった。

日 本 画 家

野生司香雪 明治十八年（一八八五）今の高松市檀紙町に生まれる。東京美術学校日本画科を卒業。仏教方面の研究に進み、明治四十年には仏画を東京博覧会に出品、大正六年には文部省から印度に派遣され、アジャンタの石窟寺院の壁画の模写のほか、信州善光寺の大壁画など、寺院に関係の作品が多い。

広島晃甫（一八八九～一九五二）本名は新太郎。明治二十二年十

授与された。

陶 芸 家

一月徳島市に生まれた。父が高松に来て高等女学校の教師であったので、香川県立工芸学校に入学、漆芸の時絵を学んだ。ついで東京美術学校に入学、日本画科を修めて卒業。第一回帝国美術院展に「青衣の女」を出品して特選、第二回に「夕暮の春」を出し、続けて特選となり、大正十四年帝展の審査員となり、さらに無鑑査となり、昭和五年ドイツ・イタリア・オランダ・ベルギー・スペイン等を巡歴帰国し、主として人物画、晩年には花鳥を描いた。昭和二十六年十二月、六十二歳で死去した。

馬場不二（一九〇六～一九五六）本名は和夫。明治三十九年高松市に生まれた。香川県立工芸学校から東京美術学校日本画科を経て作家生活に入った。昭和九年明朗展、歷程美術展、院展等に出品、院展では大観賞、院賞等を受賞、昭和三十一年日本美術同人に推せんされた。長い不遇時代に続く、闘病生活を強い製作意欲で克服し独自の大きい形象を把握し、おだやかな色調で気韻のある描出に成功したが、昭和三十一年十月五十歳で他界した。

書 道 家

炭山南木（一八九二～）明治二十八年小豆郡内海町に生まれた書道家で、特に漢字にすぐれた作家である。京都市芸術大学を出て谷川尚亭に学び、日展に入選、のち同展審査員となり文部大臣賞を受け、毎日展審査員にもなり、昭和三十六年度芸術院賞を受けた。大阪に住し樟蔭女子大学教授で、勲三等瑞宝章を受け、紺綬褒賞を

大森照成（一九一〇～）明治四十三年三豊郡高瀬町に生まれ、大正八年ハワイに渡航、国画会々員山下品蔵氏に師事、絵を習った。昭和二十年陶芸研究に着手し、ハワイ大学陶芸部で釉薬を研究、昭和三十四年帰国し郷里高瀬町に南山窯を築き、なおハワイ大学研究室で二か年研究を積み帰国、作陶に精進されている。昭和四十九年香川県文化功労賞を受賞した。

染 織 家

鎌倉芳太郎（一八九八～）明治三十一年十月香川県に生まれ、香川県師範学校から、東京美術学校図画師範科に進み、大正十年卒業。沖縄県で教育に従事のかたわら、財団法人啓明会の補助により琉球独特の紅型の資料収集、研究を重ね、古典的様式をきわめて型絵染に独自の作家活動を続け、昭和三十八年四月、無形文化財技術保持者に認定された。その間昭和十七年には、東京美術学校助教教授となり、社団法人日本工芸会会員、のち同会理事となり、昭和三十一年には伝統工芸展奨励賞、昭和四十七年には総裁賞を受賞した。

（香川県文化財審議委員）

人物を中心とした

文化郷土史

—愛媛県—



今村三郎

はじめに

明治・大正期における愛媛の先覚者として役割を果たした人は数多く他方面にわたっている。その中でも文芸特に俳壇においては正岡子規を中心として多くの俳人が輩出し、全国的に活躍している。

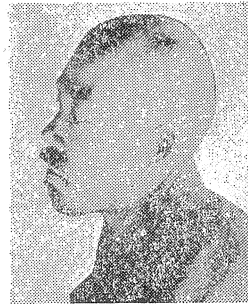
これ等は豊かな気候風土にめぐまれ、こまやかな人情によって受け継がれた県民性によるところ大きいものがあると思うのである。

それと共に当時中央に出てそれぞれ研鑽を積み、なみなみならぬ努力をほらっていることがうかがえるのであるが、当時の藩主は東京に学生寮をかまえこれらの有為の子弟の育英に努められており、全国的に有名な人物の輩出にあたり意義深いものがある。

特に愛媛の文化郷土史を考える時、俳句をぬきにして考えることはできないであろう。このたびの人物を中心にした文化郷土史も俳句を中心にして述べることにした。

正岡子規 慶応三年松山藩士の子として生まれ本名は常規・幼名は升のぼるといった。幼少から外祖父大原頼山らについて素読を学び十二歳にして漢詩を作り十三歳の時学友と回覧詩誌を編集した。松山中学を中退後上京し、大学予備門に入學したが明治十七年十八歳であった。二十年松山中学に帰り、三津の大原基戎について俳諧の教えをうけた。当時野球に熱中し、松山にはじめて野球を伝えたのは子規といわれる。二十二年同郷の新海非風、五百木飄亭、藤野古白ら、のち内藤鳴雪も加わって、俳句の研究をはじめた。近代俳句の黎明である。夏目漱石とも交わりを結んだが俳句革新を生涯の事業として決意し明治二十五年東京帝国大学文科を中退して、日本新聞社に

入社した。まず旧派、月並派との戦いである。日清戦役には病弱の身を挺して従軍記者となり、帰途喀血して重態に陥り、小康を得て明治二十八年八月、松山中学教師であった漱石の寓居愚陀仏庵に入って十月まで滞在、松山の新派俳句はこの時に勃興し、後年の文豪漱石はこの関子規によって生み出された。明治二十九年東京に帰ったが以後はほとんど歩行の自由を欠き病床に親しんだが、新聞「日本」紙上ならびに雑誌「ホトギス」の創刊もあって、日本新派俳句は全国に普及した。この後しばしば病勢悪化した、三十二年には「歌よみに与ふる誓」を発表して和歌の革新を叫び、歌壇に大きな反響をまき起こした。三十三年には文章革新を企て、叙事文、写生文を提唱、小説作家らに大きい影響を与えた。三十四、五年は病いよいよ重く、写生画に病苦を慰めるとともに、新聞「日本」紙上に「墨汁一滴」ついで「病状六尺」の執筆を怠らず、死の二日前まで続いた。絶筆三句は死の前日であった。子規は一生清貧であり「病臥漫録」に明治三十三年ようやく月収五十円となり、昔の妄想が実現したとよろこんでいるほどである。文士は貧乏なれという神



子規の活路を死路の中に――

が岩村の意に投じ、信任を得て十一等出仕に拔擢され学務課勤務、のち課長になり小学校教育の普及につとめ、師範学校創設を提議して実現せしめた。英学所長草間時福らと学生雄弁会で演説したり、自由民権を唱えたり、創刊早々の愛媛新聞に執筆したり、大いに新人ぶりを発揮した。同時に南郷と号として漢詩をよくし、地方詩壇に重きをなした。岩村県令が十三年内務省に転じ、鳴雪は後任の関新平と相容れず、上京して文部省に勤めた。ここでもその識見手腕を認められ二十三年参事官に昇任した。これにより先、久松家が東京遊学の旧藩子弟のために設けた常盤会寄宿舎の監督を委嘱されていたが、二十四年四月文部省を退いて監督に専任した。当時同寄宿舎には正岡子規、五百木飄亭、勝田主計(のち大蔵大臣・文部大臣)らがいた。漢詩人としてかねて敬慕した内藤先生を迎えて舎内の文学活動は盛んになったが、子規らが俳句に熱中するようになり、鳴雪もその影響をうけてそのグループに加わった。時四十六歳。郷党の大先輩が二十歳も年少の子規の指導を仰ぐ、恬淡洒脱、拘泥せぬ人柄がうかがえる。明治四十年末、監督を当時陸軍中将の秋山好古に譲って常盤舎と別れ俳句専念の生活に入った。流派を超越し、諸所の句会にも元気に気軽く出席、一流の諧謔をとばして、だからからも慈父のごとく慕われた。全国の新聞雑誌俳句欄の選者をたのまれていたもの三十余の多きに及び、みずからも俳句小学校の先生をもって任じた。俳句に関する著書もすこぶる多い。俳画にも巧みで、頼まれればこころよく描いた。「ただだのむ湯婆一つの寒さかな」を辞世に、大正十五年二月二十日、東京麻布弁町の自宅で没した。享年八十歳。道後公園の寿碑は旧常盤会寄宿生が古稀を祝して建立

求め、禅宗の悟りは平気で死ぬることなく平気で生きていることと道破している。叔父加藤拓川らの援助や、母八重、妹律の献身的奉仕、師友門下らのあたたかい協力はあったが、三十六年の短い生涯に、貧困病苦に屈せず、文学史上不朽の大業をなしたとげたのは、みずからの勉学研鑽はもとよりその異常なまでの情熱、意志力、闘志によるものといわなければならない。年少の碧梧桐、虚子はもとより、極堂また二十歳も年長の大先輩鳴雪まで欣然傘下に参じ、内外幾多の有力門下グループによって、その遺業が継承大成された。寒川風骨のごときは神のごとく尊敬した。子規はそうした天賦の魅力と才能を備えていた。生誕百年、死後六十余年、子規はいまなお生きつづけている。

内藤鳴雪 弘化四年松山藩士内藤同人の長男として江戸三田の松山藩邸で生まれた。名は助之進のも素行、十一歳のとき父に従って松山に帰住、藩校明教館に学び、別に書を武智五友、漢詩を大原颯山、軍学を野沢象水に、武芸にもはげんだ。久松家藩主定昭の小姓役となり長州征伐の軍に従い、また京都に遊学、東京の昌平校にも学んだ。明治三年藩制改革により松山藩権少参事に任ぜられ、学政を主管することになり、明教館の大改革を試み、漢学のほかに洋典、医療、算数の各科を設け少壮教官を採用して新知識の流入をはかった。みずから「当時はハイカラであった」といっている。明治四年廃藩とともに再び上京して英学を修業し、五年帰国して石鉄県学区取締を命ぜられ、小学校の創設に力を尽くした。この年、名を素行と改めた。明治八年愛媛県権令になった岩村高俊は普通教育に熱心で、学区取締の鳴雪はしばしば諮問をうけ、その進歩的な意見

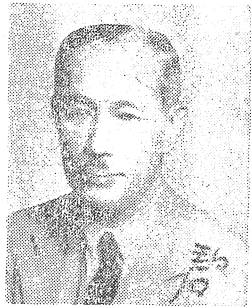
したもので碑文はつぎの文句で結ばれている。「郷党育英ノ功没ス可ラズ、世人其人格ノ崇キヲ嘆称セザルハナシ」。

河東碧梧桐 明治六年旧藩士、儒学者静溪の第八男として生まれ、本名兼五郎、六歳のころから父静溪から漢学の素読を受けた、京都三高、仙台二高を退学して東京に居住する俳聖子規の双壁として虚子とともに子規を助け優れた門下生であった。東京に来て、子規の居た陸羯南の日本新聞に入社、子規没後は新聞「日本」の俳句選者、新聞「日本」廃刊後は三宅雪領の雑誌「日本及日本人」の同人として俳句の選を続け、明治三十九年から全国行脚をし「三千里」「続三千里」を連載し、明治末期から大正初期にかけては新傾向俳句で俳壇を風靡した。書は画人中村不折の勧めで「六朝」の書体を学び碧門下並びに新傾向派の俳人争って「六朝」の書風に傾倒した。今も虚子門下は虚子の文学、碧門下は碧の文学を継承する者が多いが「碧は六朝」の書も碧の「六朝」たらしめた。

少青年時代互いに「へいさん」「きよさん」と呼び合った二人は、碧の新傾向俳句、虚子の伝統俳句で対立してから激しく相争ったが、碧梧桐逝去の時は、虚子もこれを哀しむ

碧梧桐とはよく親しみよく又争うたり
たとふれば独樂のはじける如くなり

の追悼句を贈った。六十五歳で逝去したことは子規門下の人々を一驚せしめた。子規門下中最も長寿を保つは碧であろうというのが定評であったから。虚子の円みを帯びた円熟味に対し、碧は貴公子然たる風貌にかかわらず、肩をそびやかせ剛健を誇っていた。好んで山を歩き「日本の山水」「南アルプス縦走記」等の著書がある。晩



河東碧梧桐

従来の定型伝統俳句から新傾向派の樹立となったが、しかし止まるところを知らず終わりには難解句となつて自ら俳句を絶つた。大正四年創刊の「海紅」は一碧楼にゆずり、欧米より帰来後の個人雑誌「碧」「三昧」も魔刊、晩年は「子規言行録」「子規を語る」等の著書はあったが淋しい不遇時代、昭和十一年友人、門下などから安住の家屋を贈られ非常に喜んでゐたが、その喜びは一年に過ぎなかった。

明るくて桃の花に菜種さしそふる

今宵泊らん脚いたはりつもみぢぬれあつ

汐のよい船脚を瀬戸のかもめは鷗づれ

さくら活けた花屑の中から一枝拾ふ

君を待たしたよ桜散る中を歩く

これらの句は得意時代のものである。明治の子規は元禄の芭蕉に比すべき優れた後継者と多くの門下を有したが、河東碧梧桐と高浜虚子はその子規門下における双壁であった。しかも現俳壇において一流を成せる人たちの多くは碧門下、虚子門下の人々である。碧は虚

子より一歳年長、子規との交わりも早く、虚子が子規との文通をはじめたのも碧を介してである。碧梧桐は新興俳句の祖として虚子と相並んで俳史に遺さるべきである。(今秋昭和四十八年十一月、松山市では虚子・碧梧桐生誕百年祭が盛大に行われる。)

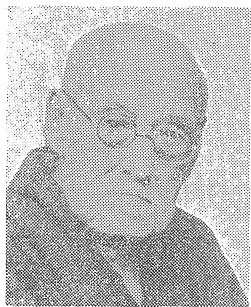
村上露月 明治二年素卦家の長男として生まれ子規より二歳の後輩、碧梧桐、虚子より四歳の先輩であった。明治二十四年夏、存孝中の一高を中退、父久太郎の後を継ぐ、彼は青雲の志に燃えて遊学したのであるが、その父久太郎が浪費家であり叔父寛之丞の在世時代はまだしも、寛之丞が二十四年七月急逝の後、父の遺産を監督の意味で、母親の意に従い学業を捨て、帰郷するに至つたのである。かえると今出社の社長となり、二十六年頃から今出銀行の頭取にも就任していた。その二十五年頃業務出張で大阪に行った際講入した俳書の中に「蕪村句集」の上巻があつて、いたくそれに感興をひいた。東京では子規が大学をやめて根岸にうつり「日本新聞」に入社したので二十五年の十二月、彼は二十一年頃から俳句の研究をはじめ、二十三年頃から本格的に俳句を作りはじめてゐる。当時俳人の間にまとまつた「蕪村句集」のあることを知られていなかったが、露月は「蕪村句集」の上巻を発見し、之を愛読した。ある機会にそれを鳴雪の知る所となり、鳴雪はそれを東京に取寄せて筆写し、子規らもこれによつてはじめて蕪村句集に接することができたのである。このような関係にありながらも、二十八年に後とも先ともこの一回だけ、露月が根岸の子規を訪ねてゐる。その年子規が帰松に際して、今出の露月居を尋ねたことがある外、子規が帰松して漱石の島陀仏庵に起居した居も郷里松山の松風会あたりの人々は、毎日の

縁に子規の許に致えを乞うたが、露月は僅かに二、三度しか訪ねていない。ある時、漱石居で、子規の前で、松風会員が「露月君あたりも早くから、子規先生の教えを受けていたからよかった」と言つた時に、子規が「否、さうでない。露月君は旧派の混沌たる所から独りで、此処までやつて来たのだよ」と言つたといわれている。露月は常に「俳句は人格である。人格の発露でなければならぬ。句中に個性の発揮を期せねばならぬ。個性を発揮しないのであつたら、むしろ十七字の活字で機械的に印刷してもよい」とか「自分の句には花鳥諷詠などと言つた様な暢気な作はない。季節は感慨を表現し、吟詠する対象であり、吟詠の多くは人間の苦衷歎息、憤激罵倒の表現である。わが俳句は全人格の反映であり、反響である」とも言っている。

露月は俳人としても、愛媛農業経済界の大先駆者である。明治二十五年に一市六郡農会を設立し技術改善や農業経済に力を注がれた。明治三十年には、資本金十万円を以て伊予農業銀行を発足し、頭取として迎えられ産業金融の面にも多くの功績を残している。

柳原極堂 慶応三年旧松山藩士大小姓格柳原権之助正義の長男として松山北町に生まれた。本名は正之と云つた。子規と同年であるが子規より半歳の先輩である。明治十六年、子規と相談して松山中学を中退した。先ず極堂が上京し子規は一か月遅れて上京して、極堂の下宿に同宿した。子規と極堂は既にこうした少青年から相離ることを得ぬ運命にあったといふべきであらうか。東京の共立学校を終え明治二十二年、二十三歳の時、松山に帰り海南新聞社に入社、後同社の主筆、三十九年四十歳の時、伊予日日新聞社社長、政友会

の機関紙南海新聞と憲政会の機関紙愛媛新報の間にあって不偏不党厳正中立新聞を標榜し、終始一貫悪戦苦闘の連続であつた。昭和二年ついに廃刊し、上京した。極堂が松山で俳誌「ほととぎす」を創刊したのは明治三十年一月、発行所は松山市大字立花町五十番地柳原方であつたが印刷は海南新聞社であり、三十一年八月二十号を発行した。第二巻から発行所を東京に移し高浜虚子がこれを継承して今日に至つたが、これはもち論子規と相談つてのことであつた。俳句は明治二十七年三月、野間斐柳らと松風会を結成、翌二十八年八月、子規病氣保養のため帰省、十月まで二番町の夏目漱石の島陀仏庵に寄寓中、連日同庵に句会を催した時から、三十一年「ほととぎす」発行所東京移転までの足かけ五年が第一期であり、第二期は昭和七年十月東京における「鶏頭」創刊より十七年の第十一巻第九号にて廃刊までの十一年間である。その後終焉までを第三期と大別することが出来る。右によつて明らかになつていく作句に遺さかつたのは大正時代を中心とするその前後であつたが、しかしそのうちの伊予日日新聞時代には同紙に俳句欄を設け、伊予吟社を創設して句会を催し、ある期間には毎週新聞二頁の「俳句附録」を出し県下俳壇の興隆に寄与するところすこぶる大であつた。「鶏頭」発行中には「子規と其の郷里松山」子規の下宿が



柳原極堂

え」を連載、十八年二月

「友人子規」として出版、これによって「子規全集」に欠けたる子規の青少年時代を明らかにし子規研究の貴重な文献たらしめた。終戦後における松山時代の晩年は子規会の創設、子規句碑歌碑の建設、子規生誕五十年祭等、子規顕彰のために在るが如く、これにその余生を捧げ尽くした。「吾生ハへちまのつるの行き処」の辭世の句そのままであった。「ほととぎす」「伊予日日新聞」「鶏頭」の経営に苦難の道ばかり歩んで来たが、最後には松山市より初の名譽市民称号、県より教育文化賞、没後には内閣より勲四等瑞宝章を贈られ最後が飾られた。句集「草雲雀」がある。

春風やふね伊予に寄りて道後の湯
城山や笛のびし垣の上

いつまでも忘れじ秋のこの旅を
の外三十墓に近い句碑がある。

高浜虚子 明治七年旧松山藩士池内庄四郎政忠の四子として生まれ後祖母の姓家系高浜姓となった。本名清・今日の俳壇「ほととぎす」派の勢を以てすれば、あるいは元禄の芭蕉、天明の蕨村、明治の子規について高浜虚子もこれら俳聖に次ぐべき俳聖として俳史に遺されるべき人である。現代は長男年尾の「ホトトギス」長女立子の「玉藻」は虚子没後においても俳誌の王座を占め、ホトトギス系の俳誌、ホトトギス派の俳句人口は他の追隨を許さぬものがある。これだけの俳句王国を築きあげた虚子は、それだけでも偉大なる俳人であったと言わねばならないであろう。虚子にとって最大の不遇時代は碧梧桐の新傾向俳句の全盛時代のみであった。この時はさすがの虚子も勢いの赴くところ抗する術もなく「ホトトギス」の経営も

不振困難を極め小説に活路を求めて新聞の連載小説「朝鮮」を書いたりしたが、活路たり得なかった。その他はおおむね順調幸運であった。子規とは漢町四丁目の生家が隣家であり、碧梧桐の紹介で文通がはじまった。虚子の俳号は子規が名付親である。明治二十五年京都の第三高校、二十七年同校廃校、仙台の第二高校に転校したが、同年十月碧梧桐と共に退学後上京、子規の文学運動に参加した。明治三十年一月柳原極堂が松山から創刊した「ほととぎす」が翌年第二巻、第一号から東京に移され、これを継承したことが後年の大虚子たらしむることとなった。「ホトトギス」百号当時は夏目漱石の「吾輩は猫である」続いて「坊っちゃん」が連載され、虚子自身も「風流戯法」「斑鳩物語」などの小説を執筆して、一般文芸雑誌化したこともあったが、この「ホトトギス」によってどれほど多くの俳人を育成、大成せしめ、今日の俳界興隆の基礎たらしめたことかわからない。虚子は碧梧桐の新傾向俳句に対し「俳句の目的は花鳥風月を詠詠するにあり」と平易で垣々たる五七五調と季題を尊重する客観写生、花鳥詠詠に徹し、しかもこれを自由自在に詠んだ。俳句においても「ホトトギス」の経営においても虚子は才能豊かで、文章においても亦然りで、その著書はすこぶる多い。たとえば「五百句」「五百五十句」「六百句」等句集の外に、「俳



子 虚 高 多
トトギス」の経営におい
ても虚子は才能豊かで、
文章においても亦然り
で、その著書はすこぶる
多い。たとえば「五百
句」「五百五十句」「六百
句」等句集の外に、「俳

諧師」「繞俳諧師」「柿二つ」「旬日記」「虚子俳話」、歳時記「花鳥詠詠」、能楽の方では「実朝」「奥の細道」歌舞伎俳優で門下の中村吉左衛門のためには「髪を結う一茶」「嵯峨日記」の戯曲まで書いた。昭和十二年には日本芸術院会員、二十九年文化勲章、没後従三位勲一等瑞宝章が授けられた伝統俳句の大御所としての面目躍如たるものがあつた。句碑は全国に及んでいるが、県下にも各地にある。

ふるさとのこの松伐るな竹伐るな
笹啼が初音になりし頃のこと
この松の下にたたずめば露のわれ
戻り来て瀬戸の夏海絵の如し
春潮や和冠の子孫汝と我
の句碑がある。昭和四十八年松山市において、虚子、碧梧桐生誕百年祭が盛大に行われる。

松根東洋城 明治十一年東京築地生まれで、本名は豊次郎。父が司法官であるため出身地宇和島を離れ、転々とし築地小学校から大洲



松 根 東 洋 城

小学校松山中学に進み、ここで夏目漱石に英語を学び第一高等学校に入学のち、熊本に転任している漱石に書を書いて俳句の教えをうけ、根岸子規庵の句座に参加した。初めて東洋城と号したのは

明治三十三年である。東京大学から京都大学に移り三十八年法学部卒業、翌年宮内省式部官になった。この間常に漱石山房に出入して小宮豊隆、寺田寅彦、野上豊一郎、鈴木三重吉らと交わりを結んだ。俳句ははじめから「ホトトギス」に投句していたが、子規没後、河東碧梧桐と虚子が対立して俳壇を二分する形となり、新傾向を提唱する碧梧桐派の「俳三昧」に対して東洋城は虚子らの「俳諧散心」グループに加わって新傾向派に対し堂々の論陣を張った。明治四十一年十月、虚子は小説に専念するため、国民新聞選者を東洋城に譲った。ここには飯田蛇笏、長谷川零余子、久保田万太郎、野村喜舟らの新人があつまり、新傾向運動に対峙していた。ついで東洋城を主宰としてこれらの人々によって俳誌「洪柿」を創刊した。これより先、東洋城は客観写生一週刊の俳句は心境俳句であり、俳諧は人間をもつて大自然に帰る。俳諧は難行道であるとして、芭蕉への還元を提唱し、芭蕉を尊び、連句を重んじ、人間修行として俳句の境地を力説した。たまたま大正五年四月、俳壇に復帰した虚子がふたたび国民俳壇の選をはじめたため東洋城は憤然として、虚子ならびにホトトギスと絶縁するに至った。式部官から宮内書記官、帝室会計審査官を歴任したが大正八年九月いっさいの公職を辞して俳句に没入することになった。東京朝日新聞俳壇の選を担当したのもこの年で、連句の研究と実作にはげみ、幸田露伴が「俳諧のことは東洋城に聞け」というまでに、その造詣は深かった。漱石が人生即俳句観を抱いて道途に呻吟するものと評した東洋城は、門弟を教えることすこぶる厳に俳諧道場と称して徹底した指導を行い、そのため離反するものも出たが、いささか惋惜しなかった。花鳥詠詠の虚

子と境地境涯の東洋城、ホトトギスと洪柿は相対峙して俳壇を二分した。大戦中全国救官の俳誌がほとんど休廃刊した中に、この両誌だけは当局から用紙配給を保証され、一号の休刊もなかったのは洪柿一誌であった。昭和二十七年一月、七十五歳で隠居を声明し、二十九年喜寿を迎えて芸術院会員に推された。洪柿を野村喜舟にゆづった。三十九年十月二十八日東京で逝去、宇和島金剛山墓地に葬られた。

芝不器男 明治三十六年、愛媛県北宇和郡松野町の旧家芝来三郎の四男として生まれた。松丸小学校、宇和島中学校、松山高등학교を経て、東京帝大農学部に入學、後転じて東北帝大工学部に入り機械科を修める。俳句は同大学在学中から熱心に研究を始め大正十四年冬より天の川（俳誌）に投句していた。後、ホトトギスに投句するようになり、その秀れた作風は同誌壇に波紋を起し、幾多の名作を掲げ新人として不器男時代の来るのを約束されるほどになった。就中「あなたなる夜雨の葛のあなたかな」に付す虚子の評釈は歴史的鑑賞と言われた代表作である。東北帝大卒業後郷里に帰り、昭和三年四月同郡二名村大内、太宰孫七氏の義嗣となり長女文江と結婚、昭和四年夏、病を得、八月九州大学後藤外科に入院、病名肉腫と診断された。自来療養思わしくなく、十二月同市庄に居を移し、五年二月に永眠したが、当時二十八歳であった。

富沢赤黄男 明治三十五年西宇和郡伊方村、父医師、富沢岩生の長男として生まれ本名正三宇和島中学を経て、家業の医師を嫌って大正十年早稲田第二高等学院文科に入學、在學時代、松根東洋城門下の俳人に俳句をすすめられ句作していたが、卒業後すぐ軍隊に志願

し、廣島工兵隊に入隊二年後陸軍少尉に任官していた。除隊後、川之石の人々と俳句をはじめ蕉左右と号し、のち赤黄男と改め俳句をつづけていた。木村会社に失敗し、単身上阪、日野草城選「青嶺」に出句、昭和十年創刊の「旗鑑」に参加、評論「密秋氏の魅惑」を書き、俳壇に頭角をあらわした。この「旗鑑」で終生の赤黄男のパトロン水谷碎壺に会い以後彼の世話になることが多かった。昭和十二年の支那事変に召集を受け、中支に出征、戦争俳句を作り、新しい分野に入り赤黄男独特の詩情ロマンの句が数多く作られ、俳壇を風靡するにいたったが、十五年マラリヤにかかり中支野戦病院に入院し、転送帰還、善通寺病院に入院した。このとき中尉に昇進、帰郷療養を許され、いち早く大阪の水谷破壺を訪ね逢った。戦後、大陽系俳壇で大活躍、多くの名句、問題を提唱し、句集「天の狼」第二句集「蛇の笛」を出版して人間探究派の全盛時代を築き上げた。神田秀夫は「戦前、戦後を通じ、態度、方法をまげず横波を突っ切るように生きた俳句作家は有季俳句では石田波郷、松本たかし、新興俳句では赤黄男と密秋であった」と言っている。惜しくも奇病で倒れたが富沢赤黄男氏は惜しい人である。

石田波郷 大正二年松山市垣生、農家の二男として生まれ本名哲夫・少年の頃同じ村の村上霽月の句会をながめていた。昭和四年松山中学時代の友達にすすめられ、愛媛新聞、海南新聞俳壇に投句し、隣村の五十崎古郷に師事、本格的に俳句をはじめたが、従来の洪柿一派の句を捨て「馬酔木」に投稿、水原秋桜子に学び、庇護を受けて、後「馬酔木」の編集に参加し、この頃より俳壇に頭角をあらわし、波郷時代を築いた。自らも「鶴」を創刊、人間探求の句を発表

してはげしく主張したが、昭和十八年九月召集令によって佐倉聯隊に入隊、草北武定にて肺結核にかかり陸軍病院に入院した。これより、波郷に肉体的な苦痛が加わったが、俳句に対する熱はさめることはなかった。陸軍病院でも俳句をつくると共に院内同好者の指導をかって出た。終戦後、自宅療養となったが病氣は進むばかり、昭和二十三年、東京療養所へ入院宮本忍博士によって、第一次成形、第二次成形手術を受け、恢復をはかった。その後小康を得て、句集「惜命」が上梓、戦争のため休んでいた「鶴」を復活、療養隨筆「清瀬村」を出す。二十九年には句業に対し「馬酔木賞」を受賞、再び俳壇に浮び上り、俳壇を風靡しはじめた。しかしながら結核が再発したが文筆はなお続き読売文学賞を受け、「俳句哀歌——作句と鑑賞」「四月八日虚子忌」「南山房」「西東三鬼と現代俳句」「現代俳句歳時記」など多くの文をかいた。四十年東京清瀬療養所に再び入院をしたが四十三年、気管切開手術をした。その間も休むことなく句集「酒中花」を出版、四十四年、芸術選奨文部大臣賞を受賞し、これが波郷への最後のはなむけとなった。

かえり来し命度しめ白菫蒲
病むわれを囲む師かなし白菫蒲
芸術選奨文部大臣賞受賞発表
白樺主治医祝言賜ひけり
遺書未だ寸伸ばしきて花八つ手
も有名である。

酒井黙禪 本名和太郎明治十六年生まれ、明治四十二年東大医科卒

業後、同大学内科教室に内科学、薬物学を研究され、大正九年松山赤十字病院院長に就任、以来昭和二十三年退職されるまで、二十七年間の長期にわたり県内医学振興のため貢献している、昭和二十八年には日赤初の名誉院長に推された。その在職中、高浜虚子に師事し、ホトトギスの同人として活躍、県内俳壇の重きをなした。俳誌「葉桜」「柿」「峠」等の選者となり俳句界の指導者として敬慕をうけた。またNHK、各新聞の選者を委嘱され、活躍するなど愛媛俳壇に貢献している。

阿部里雪 本名利行明治二十六年伯方島生まれ、幼少の頃より文才に優れ、早くから俳諧文芸に志を立て、十六歳のとき野村朱鱗の門下に入り、子規門下の人々とともに、俳諧振興に参画、柳原極堂が社長の伊予日日新聞社に入社し、昭和二年廃刊まで極堂を助けて大いにその敏腕をふるった。その後極堂の俳誌「鶏頭」の編集にあたり、斯界の注目を集め好評を博した。戦時、郷里の伯方島に帰った。以来戦中、戦後を通じて郷土文化の振興に精魂を傾け、専ら本県俳諧先駆者の調査研究に情熱を注ぎ「子規門下の人々」「極堂書翰集」などの編集発刊に努力した。また伯方文化会を設立し、俳句の指導に専念した。昭和三十二年は極堂会を設立し副会長に選任され顕彰に努力するなど、地方俳諧振興のために貢献しており、県教育文化賞を受けるなど県民から尊敬されている。

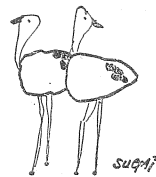
西岡十四城 明治十九年伊予郡砥部町原町に生まれ、愛媛県師範学校を卒業し、大正七年北条市河野小学校に就任した。在職中、僚友古川芹亭とともに既望会を起し、かつ北条市風星吟社に出席し、

仙波花斐のすすめによって松根東洋城の渋柿に入門した。以来東洋城の来松ごとの俳席にのぞみ研鑽をつんで、海南新聞俳壇、南海集、下萌集また各方面に作句活動を始めていた。大正十一年上京して早稲田大学に学び、その間東洋城、寺田寅日子、小宮豊隆の漱石研究にたずさわった。大正十五年三月帰松、松山商業高等学校に就職、以来松山渋柿会に出席、ますます東洋城から渋柿の至宝として嘱望され、昭和十七年課題句選者に推せんを受け、また松山支部長として、同門の融和と後進の育成に情熱を傾けた。自身は俳諧生活でも徹底して古句の研究をおこたらず詩歌の音感構成の研究を重ね、昭和四十四年「国語音感考説」の著書を刊行した。この書は数多くの専門学者から絶賛を受けるにいたった。作風にも音感研究の進むにつれて、芭蕉晩年の莊重な句風から次第に天心無縫というべき境涯句に変わって来た。四十八年二月米寿を記念し第二句集「続此一筋」を出版した。同年八月四日永眠したが愛媛俳壇史に特筆すべき人物である。

昭和四十八年の俳句年鑑によれば、現代活躍している俳人には筆頭として、全国に会員を有する「萬緑」の主宰、そして朝日新聞俳壇の選を担当している中村草田男、石田波郷なき後、全国俳壇では随一の長老株、関西俳壇で読友の最も多い「柿」の村上杏史、老舗「渋柿」の新珠集の選者の関谷期風、天狼同人「炎昼」主宰の谷野予志、萬緑同人「海杏」の主宰橋本月登、現代も句作をつづけ俳面で活躍の渋柿の村上壺天子、地方俳壇の長老「糸瓜」の森薫花壇、全国組織である俳人協会に所属する「浜」の吉野義子、現代俳句協

会に所属する「いたどり」の川本臥風等が活躍しているが、愛媛にはその外に多くの作句のための集団や指導者がいて、それぞれ機関紙等が発行されていることは喜びにたえないところである。

(愛媛県教育委員会文化課長)



人物を中心とした

文化郷土史

— 高 知 県 —

松 田 忠 吉



土佐の人物や事件を題材にして、かずかずのベスト・セラーを書いている作家の司馬遼太郎さんは、日本にあって歴史も人間も風土も今に連続している、と感じられるのは京都と土佐だけだ、と言っている。

一九七六年現在の土佐人を見ても、戦国時代や幕末、明治の土佐人とすこしも変わらぬ言動をしているように見える、というのである。

土佐通の大家に、そう指摘されてみると、純粋の土佐種である私なども、いろんな意味で、思い当たることが少なくない。

いま、明治以降の芸文の世界で、力強い足どりを示した人物をあげようとする場合にも、幕末維新時の変革運動から自由民権運動とつづく反体制の精神と行動が、どの分野にも色濃くにじみ出ていることに気づく。まことに、土佐という国は、何よりも「人間」の体臭が、この百年、連綿として生きつづけている風土だ、と改めて痛感させられる。

以下、おもなジャンルについて思いつくままに気軽な文化人巡礼を試みてみよう。

思 想

板垣退助（一八三七～一九一九）をリーダーとする自由民権運動が燎原の火のように燃えひろがるうとしていた時期、『政府は東京にあるが、政治は土佐にある』という言葉がはやった。新生日本の政治思想であった「自由」は、土佐の山間より生まれるという当時の土佐人士の自負がいわせた語であろう。だが、これは必ずしも単な

る「壮語」ではなかった。

中江兆民、植木枝盛、幸徳秋水の三者の名をあげただけで、すでに日本の新しい思想の夜明けがそこにはっきりと象徴されている、といつてよい。

中江兆民（一八四七～一九〇一）は維新の動乱期に青春を過ごし、その時代の激動に心をとらわれることなく、西洋の学に志し、ヨーロッパの新思想を日本に紹介した明治の先覚思想家である。



中 江 兆 民

十九歳で高知藩から選ばれて長崎へ留学、さらに江戸へ出て、それぞれの地でフランス語を学んだ。明治四年、岩倉具視卿らの欧米視察に便乗してフランスに渡り、彼の地で若き日の公爵西園寺公望と相知り肝胆相照らす交わりを結んだ。後に、日本の政治を昭和の激動期までずっと推進した元老・西園寺と兆民との出会いは、近代日本の政治思想の実践面でも歴史的に意味の深いものであった。

兆民はフランスから帰国後、西園寺の後押しで「東洋自由新聞」を発刊、民権ジャーナリストとして健筆をふるった。その間、代議士にもなり実政政治にも関与しようとしたが、国会の醜状に幻滅し、即座に辞職した。彼の学問は法学、哲学、文学の広い分野に及び、当時の第一級のものであっただけに、現実政治の渦中を泳げる

ひとではなかった。

だが、その著「民約論」「三酔人経綸問答」「一年有半」などは、今日なお明治思想史をたどる者の必読の書とされている。

植木枝盛（一八五七～一九二二）もまた兆民に劣らぬ新思想の鼓吹者であり、進歩的なジャーナリストとして盛んな文筆活動をおこなったが、彼の場合は、兆民の現実的、漸進的な平民主義と異なり、一種、狂信的とも思える激情的な性格と相まって、最も急進的な自由民権家として終始した。

板垣退助の立志社に入り、板垣の片腕として自由民権運動の理論的支柱の役割を果たしたが、国会開設を要求する天皇への上奏文のいくつかは枝盛の執筆によるものとされており、また、彼が草した「私製・日本国憲法」は、死刑廃止や人民の革命権なども盛り込んだ内容であり、今日の民主憲法に比してもなお色あせぬ進歩性がある。

第一回国会に代議士となり政界の表面にも登場したが急死。一時は暗殺説も伝わるほど、その三十六年の生涯は波乱をきわめた。著書「無天雑録」「植木枝盛日記」は貴重な明治研究資料とされている。

兆民、枝盛の二先覚者以上に明治の新思想家として幸徳秋水（一八七二～一九一三）の名は当然、指を屈せねばならないが、秋水が前二者と決定的にちがうのは、その殉教者の革命行動である。

若いころ、兆民門下の逸材としてルソーの思想を学び、「平民新聞」を刊行し、日露戦争反対の論陣を張った活動ぶりは、兆民、枝盛と同様の進歩的ジャーナリストとしてのそれであるが、明治天皇

暗殺謀議の容疑による刑死という終焉の姿は、秋水のイメージを暗くしている。いわゆる秋水一派の大道事件は明治政治史のナゾとして、いまだに不分明な問題を多く残しているが、秋水の思想と行動もまた、日本の社会主義の歩みを正しく解明するために、こんごの研究に待たねばならぬ部分が少なくない。

明治以降の土佐の文化人物史の中で「思想」を明瞭に位置づけるために、ここでは、兆民、枝盛、秋水の三者をもって代表させたが、板垣の自由党の中心をなし、衆議院議長にもなった片岡健吉（一八四三～一九〇三）ほかの、世にいう自由党土佐派の民権運動家たちの多数が熱心なキリスト教徒であった事実は、土佐の反骨・反体制思想の基盤には人道主義的性格も色濃かった証左だと考えた。

ただ、このような明治の土佐人の鮮烈な思想活動をその後、大正・昭和にかけて継承した人脈があったか？となると、少なくとも「思想家」としては、さっそくに名をあげるのに苦しみという実情は残念ながら認めなければならない。明治土佐人の変革の志は、思想家としてよりはむしろ、次の「文芸作家」において、実り多いものが、三代にわたって受け継がれているのではなからうか。

文 芸

この分野における土佐の人物群像はなかなか壮観である。

現代においても依然としてブームを起している坂本竜馬物のはしりの小説「汗血千里の駒」を書いた坂崎紫瀾（一八五三～一九



大町桂月

九三八）の二人であろう。英光はロサンゼルス五輪大会でのボート選手としての体験を書いた「オリンピックの果実」で大いに喝望されたが、私生活の破綻により三十七歳で自殺。浩は「間島バルチザンの歌」で反戦

詩人としてその天才をうたわれたが、治安維持法に触れ、獄中生活の労苦によって、二十六歳の若さで病死した。

ここで目を現存の作家群に移すと、これはまた文壇土佐派ともい

うべき有能な人気作家が多士済々である。まず、長老作家として長い病中生活にありながら口述によってまでも力作を発表しつづけている上林曉（一九〇二～）をあげねばならない。曉は私小説作家として一貫し、初期の「聖ヨハネ病院にて」「春の坂」などから、近作の「ブロンズ的首」（川端文学賞）等に至るまで、その透明、素朴な文体による身辺心境小説は他に類を見ない文業として高く評価されている。

その他、「悪い仲間」（芥川賞）の安岡章太郎（一九二〇～）は最近、小説だけでなくエッセー、評論、紀行などにもユニークな仕事をしており、ますます油がのってきた。

「足摺岬」「霧の中」などの田宮虎彦（一九一一～）は、しばらく鳴りを静めているが力量は十分だから、やがて秀作を発表するだろう。「強情いちご」（直木賞）の田岡典夫（一九〇八～）も

一三）、島崎藤村とともに「文学界」同人として明治の浪漫主義文学の発展に尽くした馬場孤蝶（一八六九～一九四〇）、明治文壇批判、資本主義批判の文章で鳴らした漢学者・田岡嶺雲（一八七〇～一九二二）らは、その先駆的文学活動において、土佐の伝統的な変革精神を如実に反映している。

また、黒岩涙香（一八六二～一九二〇）は「萬朝報」新聞を経営、記事面でも日本の新聞製作に清新の風をもたらしたが、自らも筆をとり、「巖窟王」その他の翻案小説を連載し、大いに世に迎えられた。森下雨村（一八九〇～一九六五）も雑誌「新青年」の編集長として敏腕をふるい、自分でも翻訳作家として、日本の探偵小説の草分けとなった。

涙香、雨村が果たした新聞スタイルの一新、新文芸創始の役割は、まさに土佐の性格の文学面での発現といえる。

さらに、土佐人の人間的側面を作品にも生活にもあらわに見せた何人かの作家がいるのも面白い。

美文調で後世まで教科書にまで宣伝された大町桂月（一八六九～一九二五）、新聞連載小説「旋風時代」で文字どおり文壇に旋風を巻き起こした田中實太郎（一八八〇～一九四二）、「浅草の灯」など市井庶民の哀歓をうたって異色の存在だった浜本浩（一八九一～一九五九）らは、それぞれの作品以上に、その愛酒、感傷の風韻が酒仙作家としてかすかずの逸話を生み、「酒は土佐」の文学者と切っても切れぬイメージとして今日に至るまで定着している。

昭和期に入って、土佐の作家としてやや異風の悲劇性をとどめているのは田中英光（一九二二～一九四九）と横村浩（一九二二～

健在で、小説、エッセー、紀行に洒脱、枯淡な筆づかいを見せている。

文壇土佐派の一つの特色は女流の目ざましい活動ぶりである。

「執行猶予」（直木賞）の小山いと子（一九〇一～）と「於雪——土佐一条家の崩壊」（女流文学賞）の大原富枝（一九二二～）は、ともに円熟の女流大家として位置づけられている。若手では「バルタイ」（女流文学賞）の倉橋由美子（一九三五～）と「櫂」（太宰賞）の宮尾登美子（一九二六～）が氣を吐いている。

宮尾の「櫂」は芸術座の舞台にのぼり、最近テレビドラマ化され、脚光を浴びている。「櫂」には、大正末期から昭和初期にかけての高知市の風俗人情が綿密に描かれ、方言を巧妙に駆使した独特の文体は、土佐の地方色を濃厚に表現した文芸作品として注目される。

地元では、維新史、とくに坂本竜馬研究の第一人者とされている史家・平尾道雄（一九〇〇～）が「竜馬のすべて」などの歴史エッセーで優れた成果をあげており、土佐文雄（一九三〇～）は「人間の骨」「熱い河」など、横村浩、植木枝盛をそれぞれ主人公とした小説でローカル性を強く打ち出している。

美 術

幕末維新時の、変革を求めてやまなかった土佐の政治風土が、文化面において最も多彩に発揮されていると思われるのは美術界である。この稿は、明治以降の文化人国記ということになっている

が、美術分野に限っては、土佐の性格のよってくる強烈な個性の画人として幕末の絵師・絵金（一八二二～一八七六）についてまず若干、触れておかねばならない。

絵金―正しくは絵師・金蔵。その風変わりな人物像と奇怪な作品群は、ここ数年來、全国的なブームをなしている。美術雑誌は絵金の人と作品を特集で紹介し、映画化、舞台化もされた。その、血みどろな、病的ともいえる作風が現代の風潮にもはやされたのはなぜだろうか。

絵金は、もともと名字帯刀を許された藩のおかえ絵師だったが、その激しい性格がわざわざいし、野に下って一介の市井の画家となった。好んで下層生活になじみ、もっぱら芝居絵を描いた。特権者に奉仕する、きれいいこの絵師でなく、常に大衆とともに喜びと悲しみをともにする庶民派画家として、おどろおどろしい彩管をふるった。この絵金の人と作品をつらぬく反権力・孤高の精神と、新風を成そうとする情熱的画魂は、明治以降の土佐の画家たちにも、かなり色濃く尾をひいているとみられる。

例えば、近代日本洋画発達の端緒を開いた国沢新九郎（一八四七～一八七七）の場合を考えてみよう。

国沢は土佐藩上士の子として生まれ、維新時には、若くして砲術局陸軍所指南役、仕置役、大監察、海軍参謀となり藩船夕顔の艦長として活躍した。明治三年、彼が二十四歳のとき、藩命によって渡英、そのチャンスに彼は自らの運命を百八十度、大転換させる。

藩の意向は、彼に法律学を修得させることにあったのだが、彼はひそかに、かねて幼時から秘めていた画家たらんとする志の実現を求めた。

信徳（一八八六～一九五二）についてもそれがいえるだろう。

山脇は東京美術西洋画科の卒業制作として描いた「停車場の朝」が第三回文展で入賞、日本に初めて本格的な印象派が誕生した、と内外から騒がれた。

当時の山脇の画壇へのデビューぶりはまことに華麗なものであった。とくにそのころ、西洋美術の紹介に熱っぽい意欲を注いでいた若い文学グループの志賀直哉、武者小路実篤ら白樺派の人たちは、山脇を日本の新しい美術運動の旗手の一人として積極的に交わりを求めた。

志賀直哉のそのころの日記を見ると、山脇との深い交友、明治末期の青春像がよくわかって興味深い。



山脇 信徳

山脇はフランス遊学中、梅原竜三郎らの国画会創設に参加し、在仏のまま会員となり、力作を発表したが、晩年、土佐へ帰ってからは格別に見るべき画業もなく六十五歳で孤独な生涯を終わった。最盛期の作である「疎林」「穀山の雪」など七点は山脇の没後、所蔵者志賀直哉から高知市へ寄贈され、日本洋画史における山脇の余光をわずかにとどめている。

このように絵金、国沢、山脇―と、幕末から明治―昭和初期へかけての土佐の三画人の生涯をたどってみると、いずれにも共通

期し、当時ロンドンで知られた画家ウィリアム・エドガーについて洋画の手ほどきを受け、三年間の留学期間をもっぱら西洋画技の習熟につとめた。

そして帰国するや、直ちに東京麹町に画塾彰技堂を設立し、子弟に西洋画を教えた。また、初の絵画展覧会を開催し、政府に美術学校建設の必要を説いた。帰国後、数年ならずして死んでいるから画業については見るべきものはないけれども、日本洋画の最初の扉を開いた人物が土佐藩の特権武士の出であったという事実は特記されてよからう。



国沢 新九郎

国沢は藩の要職にあり、当然、明治新政府においてもその地位が約束されていたはずなのに、なにゆえ突然に変身したか。

思うに、彼の行動は、維新時に政治変革の大業に参じた土佐の下級武士たちと共通する、成すところあらん、とする志が、日本の美術変革という「文化革命」への参加となって現れた、ということではあるまいか。

常に新しいものに感動し、あこがれ、新世界の創造に身を挺していどんでいくバイタリティーは土佐人に生得のものであり、土佐的エネルギーの源泉ともいってよくなるうか。

土佐の画人群像に、こうした見方が許されるとすれば、日本における最初の印象派画家として日本洋画史に重要な位置を占める山脇

しているのは、常に先駆的な役割を果たしながら、ついに日の当たる場所へ十分出ることを得なかった、という点である。そして、人生、社会、世間に対して、いささかすねたポーズをとり、がんこ、わがままな一途の道を歩んでいる姿である。

むしろ、だからといって、その後現代に至る土佐の画人たちに、絵金―国沢―山脇の系譜をそのままつなぐことには無理があるかも知れぬが、少なくとも、この三画人が、日本の美術史に一時代を画しながら、そのわりには世間的栄誉から遠かった事実は、維新の政治変革期に土佐の志士たちの多くが明治新政の栄光を見ずに非命に倒れている事実と相似するところがあるように思われてならない。

以上、土佐の美術風土の特異性を説明するために、三人の画人の数奇な人生にライトを当て過ぎたが、その他の画人を大いそぎで紹介しておく。

石川寅治（一八七五～一九六四）は文展、帝展、日展の各審査員をつとめ、恩賜賞を受けた日本洋画壇の長老的存在であった。アカデミックな写実的作品が多いが、晩年は大胆、奔放な色彩感覚で新風を見せた。八十九歳で功成り名とげたのは土佐種の洋画家としては異例である。

日本画では広瀬東畝（一八七五～一九三〇）がいる。東畝は文展入選六回、後に帝展無鑑査となった。花鳥画を得意とした画家である。島内松南（一八八一～一九六二）は花鳥山水にも秀でていたが、人物画もよくした。梶田半古門下の逸足として名を成したが、晩年は土佐に帰り、伝統の日本画風を守りつづけた。

以後、現在は、洋画で高橋虎之助（一八九〇～）が東京で、上

島一司（一九二〇～）が奈良で、小松益喜（一九〇四～）が神戸で、それぞれいい仕事をしている。いずれもしばしば帰郷して個展をやっている。故郷忘れじ難し、という彼らの土佐人としての心情は、その作品にも画材としてだけでなく、色調その他に何がなし懐かしくにじみ出ている。

日本画では森田暁平（一九一六～）が東京に、山本倉丘（一九三三～）が京都に、東西の両大家として貫録ある実績を示している。

漫画家として著名な横山隆一（一九〇九～）、横山泰三（一九一七～）兄弟も土佐出身だ。

書道では手島右卿（一九〇二～）が土佐らしい風貌と豪絶の迫力を持った書業で断然、重きをなしている。

土佐には日本画の下司凍月（一八八一～）が九十四歳でなおかくしゃくとして画筆をにぎっており、最後の日本画絵師として幽仙の境地に遊んでいる。山脇につながる国画会員中村博（一九〇二～）も健在で「花」の連作などに豊かな才能を開かせている。

学 界

自然科学畑で傑出した存在は、物理学の寺田寅彦と植物学の牧野富太郎であろう。

寺田寅彦（一八七八～一九三五）は三十歳のとき「尺八の音響学的研究」で理学博士となったが、すでにこの博士論文が示しているように、常に意表に出たテーマでユニークな実験物理の研究成果を

あげた。

彼は多才な学者で、夏目漱石とも親しく、吉村冬彦のペンネームで好エッセーをものし、藪柑子と号して俳句もよくした。世に知られた「天災は忘れたころにやってくる」というのは彼のことばである。

牧野富太郎（一八六二～一九五七）は、ろくに小学校も出ずに東京大学の植物学教室へ飛び込み、九十四歳まで長生きし、世界的な植物学者として大成した。彼が命名して学界に発表した日本植物は新種千種、新変種千五百種、採集した標本は五十万点にのぼっている。没後、文化勲章を贈られたが、生前は東大でも万年講師として報いられることなく、学閥の外にあってほとんど独力で日本の植物学を確立した、スケールの大きい野性的な学者であった。

寅彦、富太郎に共通する異色の学風は、やはり土佐人の血脈に流れる反骨の気質の学問世界における発現というべきであろう。

神経衰弱（現在のノイローゼ）に関して独特の療法（森田療法）を創始した森田正馬（一八七四～一九三八）は、精神医学者として世界の医学界に広くその名をとどめている。彼の治療は、いっさいの薬を使わず、物理療法もやらない、徹底した生活指導による自然療法であり、当初は医学界からも軽視されたが、現在では最も有効なノイローゼ療法として認められている。

小島祐馬（一八八一～一九六六）は一般には「支那学者」として通っているが、京大教授として中国の哲学・思想をきわめた日本の数少ない中国学者である。中国に関する学問と知識を完全に自家薬籠中のものとし、全く自分のことばでそれを述べ、理論づけた学者

であった。

小野梓（一八五二～一八八六）は大隈重信の股肱として早稲田大学の前身・東京専門学校を創立した教育家であり、優れた法律学者でもあった。「国憲論綱」「利学入門」等の著を成し、官途にもついたが、彼がおこなった「洋書の取りつき」という良書普及運動は読書運動の大先覚として高く評価されねばならない。

日本で最初のテレビジョン開発者・山本忠興（一八八一～一九五二）も土佐の生んだ稀有の電気工学者である。

このようにあげてくると、学界においても土佐出身の学者の果たした役割は、それぞれの専攻分野は異なっても、いずれもが、前人未踏のテーマへの挑戦であることがよくわかる。そして、それは常にいばらの道であり、たたかいの生涯であった。これらの学究たちの生きざまにも、土佐人の激しい性格がありあろうかがえるのである。

芸 能

まず純音楽部門で作曲家・弘田龍太郎（一八九二～一九五二）をあげねばならない。

弘田は東京音楽学校教授としてピアノ、作曲の音楽教育にたずさわったが、それよりも彼は日本の音楽界に革命的な新風運動を起こしたことで知られている。彼の作曲家としての生涯は三つに分けられる。

その一は、大正六年零の宮城道雄、尺八の吉田晴風が「新日本音

楽運動」を起こしたとき、これに参加し、不遇時代の宮城らを助け、舞踊曲「柳」「姥捨山」「雪の幻想」「生にえ」「刺客」など、新邦楽への道を開いたこと。

その二は、東京大震災後、詩人・北原白秋らと童謡運動を起こし、大正から昭和へかけての童謡の世界に一時代を画したこと。

「すずめの学校」「靴が鳴る」「雨」「キャーピーさん」「浜千鳥」「叱られて」など今に愛唱されている名童謡はみな弘田の作曲である。

その三は、島崎藤村の「千曲川旅情のうた」「小諸なる古城のほとり」などに詩の連作曲をおこない、戦時中は、仏教音楽「仏陀三部曲」と歌劇「西浦の神」の大曲を書いたこと。

以上を見ても日本の西洋音楽移入の約半世紀に弘田が残した業績の大きさがわかるだろう。

弘田龍太郎とコンビを組み、一時期、ステージにも立って活躍した声楽家・外山国彦（一八八五～一九六〇）の名も抜かせない。外山はシャンソン風歌曲「お菓子の好きな巴里娘」で知られているが、現役引退後、東洋音楽学校教授となり音楽教育家として多くの人材を育てた。

パリトン歌手・下入川圭祐（一九〇二～）は外山と同郷の門下生で、藤原義江とともに日本のオペラ界を代表し、現在なお音楽教育の現役として精力的に活動している。

外山門下には他に歌謡曲「緑の地平線」で一世を風びした流行歌手・楠木繁夫（一九〇三～一九五六）がやはり土佐だ。彼は終戦

後、自殺した。かつてのステージ生活が花やかだっただけにその最期の哀れさが目立った。

演劇部門には、新国劇の創始者・沢田正二郎（一八九二～一九二九）がいる。彼は、わが国新劇運動の草分けである文芸協会から出発し、協会解散後は芸術座に加盟して松井須磨子の相手役をした



沢田 正二郎

が、その後、新国劇により国民的な大衆演劇を創出し、「国定忠次」「坂本竜馬」などの当たり役で「沢田正」の名は国民的英雄の地位にまで高められた。三十七歳、人気絶頂の時期に急死したのも、いかにも土佐

人らしい潔さとして今に伝説的な逸話が伝えられている。

浄瑠璃界には名人・竹本土佐太夫（一八六六～一九四一）がいる。彼は若いころ、土佐出身の大政治家・後藤象二郎の書生をしていたこともあり、郷党意識が強く、「土佐」にゆかりのある演し物「吃又」や「賀の祝い」を好んで語った。特に世話物の語りは入神の至芸といわれた。

新劇界では左翼演劇演出家・土方与志（一八九八～一九五九）の名を逸せない。若い時期、ヨーロッパ、とくにベルリンで演劇理論と演出を学び、大正末、帰国して築地小劇場を建設した。それは日本で初めて有形劇場と財源を持つ芸術的新劇運動であった。彼は維新の土佐の功労者・土方久元伯爵の孫であったが、戦争中左翼演劇

人として終戦まで下獄、爵位も奪われた。日本の新劇受難史を象徴する指導者の一人であった。

その他には民芸の下元勉（一九一七～）がテレビに映画に強い芸を見せ、俳優座の浜田寛彦（一九一九～）も老巧な役をよくこなしている。映画界では「狂った果実」で石原裕次郎ブームを作った監督中平康（一九二六～）がいる。

（高知新聞社業務開発委員）

